
誰も幸せになれない物語

幻想夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰も幸せになれない物語

【Nコード】

N2879P

【作者名】

幻想夢

【あらすじ】

四系統、火、土、水、風に隠れてもう一つの系統『虚無』があり、四組の虚無とその使い魔がいた。それに従い他にも、もう一組の虚無と使い魔がいたとしてもありえない話ではないだろう。

そして現にいたとしたら？ これはそういう物語。（のはずだけれども、虚無関係についてはまだ触れる気はありません）

えっと、ただいま更新停止、及び整理中です。章の数がめちゃくちゃになってたり、1Pの量を増やしたり変更したりするので、ご注意ください。あと、章も整理の際にものすごく邪魔なので削除い

たしました。整理終了と同時にもとに戻します。

予言する夢想（前書き）

今年も最後ですが本日投下いたします。

予言する夢想

数奇なる運命というものはきっと実際に存在しているのだろう。
と、私は思う。

これは私が望んだことではなかった。私は物語と現実が溶け合っ
て混ざり、お互いのバランスが悪くなることなど、幸せになる可能
性が増えたとしてもその制で世界を混乱させてしまうかもしれない
ようなバグなど望むはずがない。

神の私は望まなかった。
それなのに……。

例えば、三人の人間がいて、その一人一人が実は人間とはかけ離
れていて、それなのに仲がよかったり。例えば、その三人が一度な
んらかの形で別れてしまったのに、結局のところ戻ってきてしまっ
たり。

偶然は必然、必然こそ偶然と言う者もいる。きっと、運命もその
ものから見れば偶然であり、必然であるのだろう。
私でも介入できぬような。

この物語を一言で表すなら、偶然というのだろうか？ 必然とい
うのだろうか？ 運命というのだろうか？

私はそれを悩みながら綴る。誰も読むことはないだろう。誰も知

ることはないだろう。それでも、私は彼が生きた証拠のためにこれを綴る。

神は人と対等に交わることはできない。

——それでも、人を愛してはいけないだろうか？

けれど、このとき運命と偶然と必然を並べて語るのはいたってナシセンスなのかも知れない。

だけど、そうとしか言うことはできないだろう。

予言する夢想（後書き）

プロローグ、短っ！

もともとは結構長かったのに。いつでも、これくらい短くなってしまいそうですね。更新で来ても。努力します。

実は、今一巻から読み直しながら書いてます。だから、設定がかなり悲しいことになっているかもしれない。見つけ次第感想とかに書いてくださると嬉しいです。誤字、脱字も恐ろしい量あってもおかしくないのです、そちらもよろしく願います。

？ 平和（前書き）

h a p p y n e w y e a r !

あけましておめでとうございます。
今年も良いお年になれば良いのですが。

？ 平和

《side 少年》

俺はいたって平和に、ただいま日常をすごしている。

と、なんとなく一人勝手に心の中でアナウンスしてみた。否、特に意味もないしむしろどうでもいいーだろーみたいな感じだけど。まあ、なんとなくそう思ってみた。実際そうだしな。

俺の目の前の席には大親友——サイトが恥ずかしそうに右隣の幼馴染に目を向け、そのたびに顔を赤くしていて、それがやっぱり可愛いなと思っているのは、何処までも日常。誰一人欠けてもない。

それにしても、俺の髪がもともと赤茶色なのはおかしいのだろうか？

大親友の髪だって幼馴染の髪だって真っ黒だというのに、俺の髪が赤茶色というのはやっぱりおかしいし、それだからといって俺がクウォーターなわけでもハーフなわけでもなくて、だからといって染めたわけでもなく……やっぱりおかしいよな？

授業中は意識飛び飛びだから、こんな変なこと考えていようが先生には全く悪いと思わない。けれど、なんでこんなこと考えてんだろ？

やっぱ、幼馴染、否俺の初恋の人の真っ黒で真っ直ぐなよくとかされた大和撫子的なところを見て思ってしまったのだろう。

あー、自分が考えていることにだろうとか使うの正直なんともいえねー。自分のことがわからないって案外怖いな。

そんな事を思っていると、あっという間に授業は終わってしまい、無機質な絶対機械の合成音だろと思われるチャイムの音が響く。そして、目の前には真っ白なノートと真っ白な黒板。（先生の頭は真っ白な髪さえなかった）

また定期テストの点数やばいことになりかねねーな。とおっと、俺も立たなきゃ。

すると、「授業を終わります」という先生の声がきこえ、それと同時になんはそれぞれに友達のところへ向う。

俺も例外じゃない。ただ、移動する必要がないだけだ。四時間目の終了ってやっぱみんなテンション上がっちゃうよな？

「お前なににやけてんだよ？」

俺は大親友の声で現実に戻される。じゃあ、現実はなれて何処いったんだって感じだが。

「否、ちょっとな。それよりお前さくといい感じじゃん。背後から見てもなんかすぐわかつちまったぞ」

と、俺は返してみる。するととたんにサイトの顔は茹蛸のように真っ赤になる。漫画かよってくらいだ。

あ、さくというのは俺の幼馴染にして大親友の思い人のことだ。本当はサイトとさくは両思いなんだが本人たちはまったく気づいていない。それどころか、あいつは出会い系サイトなんかに登録をすましてしまったらしい。現実しろよ！ お前の愛する人は普通の少女漫画のように実は両思いだったりするぞ！

っていつても、俺じゃあつりあわないとか言うんだろうな。俺はお前のためにさくをあきらめたのに。

今では若葉に一筋に恋してるが。

「……まあな」

それにしても反応遅っ。

「っていうか、俺さくのこと諦めたんだからお前頑張れよ」

「見るだけで顔こわばるし、話すなんて無理」

いいながらサイトは顔を赤くしてそっぽを向く。どこまでも純情だったらしい。なら、出会い系サイトに登録するなって言う感じだが。と話しているところに、さく本人がいきなり乱入してきた。

「何話してるの？ 私の名前が聞こえたような……」

何時ものように、見た目のおとなしそうな感じと同じくやつぱりおとなしい性格のさくは控えめなような語り口で、俺たちに質問を投げかける。今はそれにあいつに対するテレも入っているのか顔が真っ赤。

うあ、幼馴染ながら可愛い。っていうか、お前ら本当に気づけよ。リア充め、馬鹿カップルめ、一生手もつなげずにいろ。ばーか。……なんか悲しい。

一方二人は俺が何も言わないから余計気まずそうに顔をほてらせる。さすがになんか言うべきか？ と思ったら以心伝心かあいつはなんかもごもごと言った。

よく聞いてみると「気のせいだ……と思う」といったらしい。

いつものなんかいざという時の強さはどこへー！？ 俺がお前にさくを譲ったのはお前のことを信用してだったというのに……。俺、人を見る目ねーのかな？

俺の日常とやはらさ、こんな調子で変哲もなく続いていくのかな

って無意識のうちに思ってた。否、そう思い込んでいた。

それはある日突然のこと。前触れも何もないうちに、

俺の大親友――サイトが失踪した。

言葉で言えば単純だが、俺の思いは複雑だったりする。

それはちょうどあいつがやっとパソコンが直る――といって無邪気にパソコンを修理屋に取りにいった日のことだった。出会い系に登録した方がいいが、次の日に急に立ち上がらなくなってしまったらしい。

……ご愁傷様、否、むしろありがたいな。一生パソコンなおんなよとも思ってたけど、直っちゃったんだなとへこんでいたのをよく覚えてる。

お前の嫁はさく、ただ一人じゃねーか!!

まあ、今となればそんなことを叫ぶこともできない。本人が失踪しちまったんだからな？ 話によるとその修理が終って帰りに消息が途絶えたということだ。失踪しただけで、死んではない。そのことがまだ心の支え。

それくらいに俺の中であいつは大きかった。

そして、それはさくもだった。否むしろ、さくの方がへこんでいる。

考えてみればあいつのかかわりは俺の方が深いはずなのに、やっぱり恋愛の愛の方が友情の情に勝るのか！？ それは後々考えてみる必要があるそう。

けれど、あのへこみ方は色々やばいよな……？ ちょっと励ましのメールでも送ってみるか？ 無理、送ったらなんか俺がもっと悲しいことになるそう。

それに、昨日会ったときもどこか悲しそうとか寂しそうで、俺も何もいえなくなってしまった。あと、面倒くさいからとか何とか言ってコンタクト止めた。あのコンタクトもあいつのためだったのかと気づくと、無性に悔しい。めがねバージョンも可愛いけどな。

と思うと、ふと気づいてしまった。予想外に自分がへこんでいないことを、否、あいつの帰還を信じてしまっていることを。

あいつにはじめてあった時何故かあいつになら何か重要なものでも任せられるような気がする、と思ったということがあった。実際はそんなことは無理そうな馬鹿で正義だけが無駄にあるような奴だったけど、やっぱり今もそれは変わっていないのだろう。

いつか、帰ってくる。そう信じて待てるだけの余裕がその頃の俺にはまだあった。

けれど、二人目となると耐えられるわけではない。

あのことから二ヶ月くらい過ぎたある日、さくは消えてしまった。家族と共に。

何故なんだ？ 何故さくもいなくなっちまうんだよ！

若葉はかろうじていなくならなかったけど、でもなんでお前らは何も残さずにどっかいっちまうんだよ？

やるせなさじゃない、これは怒りだ。あいつらに対する、運命に対する。

俺は必ずあいつらと幸せに仲良く生きて行く結末を見つけるために、生きよう。そう、初めて誓った瞬間だった。

あいつの失踪から二ヶ月、俺もあいつもさくも……そして若葉も変わり始めていたことに気づくのはまだまだ先の話。

？ 平和（後書き）

誤字脱字などあったら指摘よろしくお願いいたします。

あと、早速お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

これから見放されないようにかけていければ良いのですが。

2011.04.16 編集（次章との統合、及び次章の削除）

？ 会いたいよ 会えるなら 会わせてください (前書き)

これから多分一日おき投稿……。

？ 会いたいよ 会えるなら 会わせてください

《side 若葉》

もうあの人が失踪してから二ヶ月がすぎた。

最初はすごく驚いて、沈んでいたのに一ヶ月もたつとその状況に、私の左隣に座る人がいないという状況になれてしまった。

なれって本当に怖い。なれるわけがないのに、愛している人がいない世界を。

自分を何度も責めて、それでもせめてまたせめて。なれてしまった自分がとても許せなくって……。

面倒くさくなった、全てが。あの人がいない世界なんてそれこそ価値のないものの集合体でしかなくて、けれど正直私を励ましてくれた人には感謝したい。

励ましである空虚感が埋まるわけなんてなかったんだけれど。

いつか帰ってくるって思えたときもあった。けれど、私には二ヶ月というのが限界だった。もう嫌だ。これ以上慣れてしまうのは。

「会いたい、あの人に」

私は一人かつてお父さんの書斎だった場所で、ほこりをかぶった本を見ながら呟いていた。

会いたい、と。会いたい、よ。会えるなら。会えるならなにだってお願いするし、私は何だってやる。会いたいです、会わせてください。誰ともいえぬ人に、神に頼むけれど帰ってくる言葉はない。

そうだよ、私なんていうちっぽけな人の願いまで叶えてくれるほど、人は、神は優しくない。夢を掴むのはいつでも自分の力ではない。

そして、私にはその力がな……。

その時だった。何時も首にかけているペンダント、お母さんからの唯一の遺品のペンダントが浮き上がり緑色……否言葉にもできないような色の光をだし、また回転し始めた。

最初はゆっくりと、やがてどんどん早く。私はただ目の前でおこっていることにつけを取られているだけで、瞬きをすること、ましてや何かを呟くことも許されなかった。

そして、いきなりその光ははじけとび、目の前に道ができる。否、窓といった方がいいのでしょうか。加鏡のような窓。怪しくも思った。

けれど、もしかしたら、もしかしたらここをくぐればあの人に会えるんじゃないか？ 私はふとそう思ったの。

そして、もう二度とこの世界に帰れないような気がすることもさ
とった。けれど、私は進むことしかできない。
私に選択の余地はないの。

バイバイ、みんな。ありがとう。
ありがとう、この世界。

そして、私の頼もしい幼馴染。

？ 会いたいよ 会えるなら 会わせてください（後書き）

やっぱ短いすな。ごめんなさい。

そして、私にないものは文才だと気づいた（気づくの遅！）

あと、お気に入りにくれた人……いつも駄文ですみません。精進はしていきたいと思います。

では、誤字脱字ありましたら（以下略）

？ 輪廻転生のはじまり（前書き）

一見関係ないのですが、後から結構関わるので一応ここにまとめておきます。

そして、多分この小説で最長……。飛ばしてもいいほどどうでもいいっちゃどうでもいい話なのに……。時間ない人はとばしてどうぞ。

？ 輪廻転生のはじまり

《side 若葉》

誰かに愛して欲しかったよ。

私は今ものすごく人生で二番目に悲しい事態に直面していた。

私の愛する少年が友人を失って、悲しんでいるっていう事態に。

私の愛する少年と出会ったのは、この学校に入学したその日だった。彼は友人と一緒に二人で歩いてて、その時彼とすれ違ったあの時のこと、思い出そうとすればもう何回でも鮮明に思い出せる。みんな嘘っぽいとかなんとか言うけれどさ、本当なんだよ。開け放たれた廊下の窓から見える木漏れ日や桜の花びらの美しさから、彼の表情や姿や立ち振る舞い、瞳の中に映る希望の色まで全て思い出せるんだ。

その時、私と彼は目がぴったりと合ったんだ。本当の偶然か運命なのかわかんないけど、わずか一秒にも満たない時間しかりと目が合った。それだけで私は彼に恋してしまった。

その後、同じクラスだと知るとまたすばらしく嬉しくなった。名前もその時初めて知って、お互いにアイコンタクトを取ってしまい、もう天にも昇る気持ちってこういう気持ちなんだってすごいわかった。彼も私を意識してくれてるかはわからないけれど、私は彼が好き。

そんなこんなで高2までおなじ恋を引きずりつづけてしまった。

また同じクラスで、今回は隣どおし。目の前の女の子がライバルっぽかったけど、私は彼に猛烈アタックを繰り返してた。といっても話しかけることなんてほとんどなくて、ただその三人の姿を見ているだけといってもいいほどの感じだったけど。

いつもは積極的な私が恋にはこんなに内気だからよく友達にもからかわれたね。

あと、高1の二月頃から生徒会の仕事もしていたんだよね。似合わないけどさ。最近受け継ぎがしつかりと終わり、私の仕事も格段が増えて教室にいれる時間も短くなってしまったんだよ。折角あいつの隣になれたというのに。でも、私は彼の隣で入れることが幸せ。話せなくても、隣にいるってだけで幸せなんだよね。

でも、それは唐突に終わった。

彼の友人が行方不明になった。

それはある日突然のこと。その時から急激に彼が落ち込み始めた。話すことはほとんどなかったけれど、それは見て取れた。励まそうとしてもどう励ませばいいのかわからなくて、私は何もいえなかった。

私は良く知ってる。突然失ってしまった時に励ましても、そんな

のは嫌味にしか聞こえないこと。私は私を励ましてくれた友人に怒鳴り返して、自己嫌悪でいっぱいになって辛かったことがあった。だから、わかる。完全に彼の気持ちはわからないけれど、ここで励ましても意味がないこと。

ただ、彼が本当の落ち込む原因はあのさくちゃんって子なんだってことくらいはわかった。最初はわからないけれど、途中からはつきりしてきた。彼の目にはある種希望があった。けれど、同時にさくを見る目には慈悲と無力感があつた。

あの時の私と同じくらいの無力感。

そして、その目にあるときから希望がなくなった。彼女まで消えた。彼女は自分の家族とか自分を示すもの全てをなくしてから消えた。家はかろうじて残っていたけれど、生活の痕跡はもうなくなっていた。

最初からまるで存在しなかったように消えた少女、彼の幼馴染の少女。

その頃から希望が彼から失われた。

たまに私の姿を見て微笑んでくれたけれど、その微笑みはもう昔の微笑ではなかった。私を見てかれは安心し、私をみて彼は生きようとする。もう私のことを彼は一人のほとんど話すことのなかった友達としてみてくれなかった。私という少女にかつての思い人――

きつとまださくちゃんを諦めていなかったんだ！——としていた。
私に彼は心の中ですがっていた。

そんな姿を私は望まなかったけれど、生きているだけでしたって
何十回も思い込んだ。無駄だったけど。彼が私を見る目、それを感じ
るたびに気持ち悪くなった。

私をどうしてかれは、彼はどうして私を……。

今、目の前に横たわっているものを私は信じられなかった。
私の目の前には命を失った彼がいた。



私は昔、ある人を呪い殺そうとした。ある人は私の愛すべき人で
あり、同時に憎しみの対象であったある人を。最初は彼を慕ってい
た。私の家族だったから無条件に慕っていた。

けれど、彼はある綺麗な女性に奪われた。その時私の家は、私の
すぎるべき家は崩壊した。

昔々はお父さんもお母さんも優しかった。

休日の何回かに一度は三人でいろんなところにいった。時に駅前
のスーパー、時に家の近くの小さな児童公園。時に大きな動物園や
遊園地、寂れたカフェなんかにもいった気がする。

みんなで思い出を沢山作った、みんなで幸せを沢山作った。お父
さんの手は何処までも暖かくて、お母さんの手も何処までも優しか
った。

でも、そんなの昔の話。その時とった何十枚もの写真や動画、そ
の時かっでもらった服やおもちゃ……全て捨てた。いいえ、呪いの
道具にした。お母さんが持っていたものの方はお母さんがある日突
然全部焚き火にしてしまったと思う。確かその日のうちに消防車が
やってきて私もお母さんも怒られてしまったけど。

ある日突然お父さんはいなくなった。否、サインは何個もあつた
んだ。それまでも何十個もサインはあつたんだ。例えばこれからも
う会えなくなってしまうねといいながら高い、高いをやってくれた
こととか……お父さんは沢山私にヒントをくれたんだ。とめて欲し
いって心で叫びながら。

けれど、私は何も気づかなかった。人はしょうがないっていうだ
ろう。君はまだ幼かったんだか
しょうがないって。

わかる？ みんなは本当にわかる？

この無力感。全てが自分のせいな気がしてくるこの心苦さ。

わかる？ あなたは本当にわかる？
幼いとかそんな条件、目の前で起こってしまった事象には関係ないこと。

時間は、運命は待ってくれない。
私が大人になることを待ってくれない。

そして気づいたら私の家にお父さんはいなかった。私の目の前からお父さんは颯爽と退場して言った。私の人生から。

けれど、私はあきらめられるわけない。お父さんのこと。私はお父さんが大好きで、お母さんが大好きだったからあきらめられるわけがない。まだ、私の人生から退場するのは早い！

返して、私のお母さんを。

お母さんも変わってしまったんだよ。あの時から急に私の相手をしなくなっ、家にもいなくなっ、帰ってくるたびに缶に入った麦茶ばかり飲んで。私のことなんてほとんどほったらかしで。返して、私の日常を。返して私の幸せを！

三、四年かして私はお母さんの手帳に挟んであったメモの住所の家に行くことにした。きっとあの女とお父さんの家だと信じて。その住所は意外に近くて、私が歩いてすぐのところだった。

いってみれば私の家と、昔の私の家と同じ字が門のところに書いてあった。それが、すごく許せなかったのをよく覚えている。私の名前をお父さんとあの女が名乗っていることを。

そして私はチャイムを恐る恐るならした。ピーンポーンと私とお母さんの住んでいる家と同じようにチャイムの音が鳴って、すぐにその機械からあの女の「誰でしょうか？」という声が聞こえる。私はその機械をゆっくりと覗き込むと、すぐに扉があいてあの女が出てきた。

あの時と変わらない美しい姿、おながが人一人入っているくらい大きくなっている。そして、ゆっくりと彼女は澄んだ声で「いらっしやい」といって、家の中に入れてくれた。

私はこの家の中に入ったら取って食われるような気がして、怖かったけれども彼女が手招きをするので仕方なくその家に入った。

玄関、廊下、何処をみても綺麗に掃除が行き渡っておりお金持ちなんだなと思った。そして、やっとたどり着いたリビングもすごく綺麗で、花が花瓶に入っていたりと細かいところまで素敵で、まるでモデルハウスのようなだった。

そして、私をリビングの四つあるうちの一つの椅子に座らせると、お茶を持ってきて私の反対の椅子に座った。彼女は私にお茶を勧めてきたけれど、この女から何か貰いたくなかったから私はだまって

首を左右に振った。

「ごめんなさい」

彼女は一つまずそう言った。私を真っ直ぐと見つめて、綺麗なりんとした声でごめんなさいと……。私はそのあまりにも真っ直ぐな目と気迫に押されて、途端に目をそむけてしまった。そう今更いわれても許せなかったし、許す気なんて毛頭もなかったけれど、私は目をそむけてしまった。その後も、ただ何回もごめんなさいと言った。彼女は何の弁明も弁解もしなかった。

彼女はただ謝ることで逃げ続けた。自分の罪から。

私は愚かなことに、彼女を何度もものしった。口足らずに言葉を操り彼女を何度もひどいことを言った。それでも彼女はただしっかりと私の言葉を聞き、私を見つめていた。

そのあとしばらくして私は自分のおばさんみたいな人であった。見たいなというのは、お母さんはもともと神主の三人いるうちの二番目の娘で、お母さんの妹のほうのおばさんだった。昔から風水や占星術について研究していて、それをおじいちゃんが怒って家族の縁を切ってしまったらしい。まあ、色々あって彼女に私はその辺のことを教えてもらうことになった。

実は彼女が研究しているのは風水とかといっても何処に入り口を作ったら福が来るとか、何処に何色の家具を置けばいいとかそういうのではなく、呪術とか占星術とか陰陽道とかを同時に研究したりしているため、ものすごく奇怪なものとなっていた。彼女曰く元をたどれば五行の考えからくるから同じようなものだっていうけれど、私が少し大きくなってから調べてみれば大分違うものだった。

そんなこんなで彼女から風水の基礎やらなんやらを教えてもらうことになった。どの話も結構奥が深くて次第に彼女の話やこれらの学問に私はのめりこむようになって、彼女の家につきか住み着いていた。最初はお母さんに悪い気がしたけれど、なんか離れないと大変なことになってしまいう気がして彼女の家に住み着くことになった。

彼女は本当に色々なことを教えてくれた。途中から魔法円とかの話もまじってめっちゃくちゃなことになっていた気がする。学校でも少しだけこの辺の話をしたことがあったけど、みんなからすごく気味悪がられた。いつしか、私に魔女のあだ名がついたんだっけ……。

そして、私は実際にこの力を使えてしまった。たった一度で、それも失敗だったけれども。

こんな力、使えるわけないって思ってた。私がよむこの力関連の話は全てフィクションだったし、歴史書にのってると言ってもそれは昔の適当な話。だから、私はこれを信じていなかった。

ある日、ふざけていかがわしい風水の書にのっていた陣をチョークで地面に書いた。そして、「もしも悪魔がいるならば、私のお父さんを殺してください」って、誰にも聞こえないくらいの小さな声で言った。そしたら、何日か後に私のお父さんは事故で死に掛けた。一命はとりとめたけれど。

突然私の家に彼女から連絡が入って、そのことは伝えられた。その日の夢に私が出てきたこととかも話してくれた。そしてゆっくりと落ち着いた声で最後に

『呪い殺したりなんてしてないよね』
って、言ってプツリと電話は切れた。



私の目の前にはあの日の夢のように一人の人間が横たわっている。あの日からしばらく続いたお父さんが事故で車に引かれ、目の前で倒れて行く夢のように。

私はゆっくりと手を伸ばしてその少年の頬に手を当てる。冷たくなった体。そして、ゆっくりと後ろに向って歩き全貌を見る。

地面に真っ赤な血で、書かれた宗教的な円と紋章。そして、血まみれの私の手。右手に握られた血まみれのナイフ。

私は望んでいなかった。

私は……私は……！！

終らせてしまおうって思った。

目の前で苦しむ彼がかわいそうにしか思えなくて、全てを終わらせてしまってもいいかなって思ってしまった。

自分勝手な人、といつか私を形容した人がいた。まさにその通りだよと心の中で毒づく。私は自分勝手。彼がどんな思いで生きていたかなんて知らないで、みるに耐えないから殺してしまうなんて。一緒に死のうなんて思ってしまうなんて。可愛さ余って憎さ百倍？なにそれ。

私も正直あの時、その瞬間に何を考えていたかは全く思い出せない。本気で彼を愛していたかなんてひとかけらもわからない。ただ、その時はきつとこれを正義だとこれを最善だと信じていた。なんて馬鹿な人。何て可哀想な人。

なんて思いながらも結局ナイフが手から離れていない。自殺、結局それしか道がない。ここまでやってしまったんだ。無意識に彼の血で書かれた輪廻転生の陣。死んでしまった彼。そして、壊れると自分でもよくわかってしまうほどに壊れている自分。

ここで後戻りしてもどうしようもない。否、ここで後戻りしたら彼は何のために……。

私もゆっくりと陣の中心に向って行く。そして、静かに最後の呪文を唱えた。

「変わり逝くときを越えて、私と我が同胞に新しき生を、新しき世界をください——……」

らしくもなく、祈ってしまう。存在するのかわからないような神様に。

次は誰かが愛してくれることを信じながら。
次はもうあやまちを犯さないと信じながら。

？ 輪廻転生のはじまり（後書き）

ということで「日常↑↓残像」は終了です。

最後はこのねじこみキャラの話で終るとは思ってませんでした。

彼女は今ふって思いついて書いて書いた子ですし。

そして、魔方陣や風水ネタが何回かでてくるだろうけれども、オカルト系列のネタは基本適当です。風水は……ある程度は頑張ってます。はい。

っていうか、この子をいれて構想を練り直すとエルフさんがどう頑張ってもでれない。

ティファは出れるけどルクシャちゃんやエルフ勢までたどりつけん……。

まあ、これからも頑張っていきたいなと思いますながら。

あと、誤字脱字や文法間違い、知識的なおかしさ（特に風水らへんの）あったら指摘よろしくお願いいたします。

そして、またお気に入り登録してくれた方が増えてわぁーうれしーって感じです。今回は特に見返せば途中から崩壊している駄文……、精進して行くといつときながらどこが？　って感じですし……。

軽ーくがんばっていききたいと思います。ではでは

キャラしょーかい(前書き)

や……紹介するほどキャラでてくない？

キャラしょーかい

一応章の区切りなんでキャラ紹介。

しかし、問題があるとすればキャラの名前をほとんど公開してないこと。

そして、もう一つの方が年賀状が書き終わらず投稿できない……（こっちはコピー）

キャラしょーかい 日常↑↓残像

サイト

さくに片思いする普通の高2の少年。

いざとなったら信用できそうな雰囲気。

けれど、失踪してしまう。

少年

赤茶の髪を持つ少年。サイトの友達でさくの幼馴染。

勉強はできるわけではない。love! 若葉。

さく

黒髪のまじめそうな少女。少年の幼馴染。実はサイトが好きだったのか？

最近コンタクトを眼鏡にかえた。

なんかしらないけれど、ペンダントと謎の書物の力で異世界に（！？）

若葉

複雑な事情を持つ少女。

魔術などのオカルト系の知識豊富なうえ、生徒会に所属（勉強がで

きる?)

少年を殺した犯人 (?)

あれ……キャラの紹介いら……未来の自分のためにです。
画像は……気分がのったらつけるかもです。

思考の沼

僕は今日の前で起こっていることの何一つもわからなかったし、何一つも信じられなかった。

ただ、目の前のことは僕のせいでおきてしまった、僕のあやまちの結晶のようなもので、それを否定することも肯定することもできない。僕はおおきなことをやってのけてしまったんだ。僕は、僕は……。

このまま深く思考の沼に沈んでいきたかった。そうしたら逃げられるから。否、もう何も考えないで沼に沈んでも悪くはない。

僕は最後に思い出すのはあの燃えている村が言いと思った。

でも僕が最後に悔やむのはあの村のことじゃなくて、お母さんのことであればいいなって思った。

今が最後じゃなければいいなって思った。

お母さんはなんで僕にあの呪文を覚えてくれたんだろう、どうして彼女は壊れてしまったんだろう。どうして僕は逃げ続けているんだろう、村の人々を許せないんだろう。考えることはまだまだ沢山あって、それでも思考の沼の中に沈むことしか出来ない。

走馬灯のように流れる日々の光景。お母さんの笑顔。彼女の笑顔。

そして、あいつらの憎らしげな……もうそんなこと思い出さなくていい。

——さようなら……



えっと、ここはどこ？ 私は……さくだっけ？

それにしても一体どうしてこんな不思議なところにいるのでしょうか？ 白い綺麗なベッドに白い壁、金色の椅子に白いシンプルな机。まるでどこかのお姫様が住んでいるような綺麗な部屋。でも、その割りに装飾は少なくて其処がまた美しい。

そんな綺麗な場所に綺麗なお姫様、ピンク色のかわいらしい女の子がいる。

夢のようなそんな感じ。私の生きている世界にありゆるはずのないような場所。

って、私はサイトを追ってきたのよね。私はサイトにあいたって思ってたらなんかいきなりペンダントが浮いて……。で、結果的

にはサイトはいないみたい。

本当にまるっきり何がおきているのかわからない……。。

「どうして私の部屋に平民が転がっているのよ!? って、あなた水兵?」

「えっと、私は水兵ではありません。そして……あなたは誰ですか?」

思考の沼（後書き）

さて、プロローグの延長ぽくなっちゃいましたがいよいよ本編開始です。

そして、さくとあのこのご対面!!

（設定間違え、口調とかの違和感、誤字脱字や表現間違いありましたらご指摘よろしくお願いいたします）

？ ちよつとした自己紹介

「出てけ！ 赤髪の化物め！」

「この街にお前らの居場所は無い。罪人！」

「冷血女、死ね！」

僕とお母さんが村へ出ると何時も周りの人にこう叫ばれる。

赤髪の化物は僕のこと、冷血女はお母さんのこと、罪人はお父さんのことだっていうのはもう何遍も言われてきたから知っていた。

昔からずっとこう呼ばれ続けて来ているので、慣れてしまったといえど慣れてしまったのだが、やはり正面きってそう叫ばれ忌み嫌われると、少し悲しい。

僕らは村の人々から忌み嫌われている。何故かは僕はまだ幼くてわからないけれど、少なくとも彼らがお母さんに食べ物売っているのをほとんど見たことはなかった。

売ったとしても、高額なお金を出した時腐ったにんじんを投げけているのを一度見ただけで、それ以来お母さんはこの人たちから食べ物を買うのをあきらめていた。

きっと、僕のせいもあるんだろうな、と僕は自分が赤髪なのを恨

んでいたりする。

何故、赤髪が嫌われるのかはわからないけれど、きっと何か不吉なんだろう。

だから、友達も一人しかない。

否、一人いることが幸せだと思ってる。一人でもいればそれは何千もの幸せに相当するから。

一人も友達がいなかったらきっと今ごろ僕はもっと卑屈な性格になっていただろう。その友達ルマという女の子だ。たまに他の村から渡り歩いてくる商人の娘だ。

だからこそ、僕たちのことを偏見も無く見てくれるのだろうけど、それを差し引いてもぼくはルマをとっても大切な友達だと思っている。

ただ、いつでも村にいるわけじゃなくて、月に一度来るか来ないかくらいの頻度でしか現れない。それが本当に残念だ。

それだけしか語ることの無いような少年、それが僕だ。

否、あと一つ語るべきことがあるだろう。

それは僕が平民メイジだということ。メイジというのは普通貴族だというイメージがあるけれど、本当はその没落した人たちもメイジ、魔法を使える。その中の一人が僕。

お母さんもお父さんもメイジだったって言うからそれなりに魔法もつかえたりする。ただ、これは僕とお母さんの秘密で、だからルラも知らない。

このことがばれたら村の人々にもっと恐れられることになってしまうから。

けれど、何かの役に立つからといってこっそりだけとお母さんは僕に魔法を教えている。

今はまだコモンマジックの中のほんの少ししか使えないけれど。最近では色々と使えるようになってきたけどね。

「シアリー、ちょっと手伝ってー」

お母さんの声僕たちの家の裏手の方から響いてくる。

「うん、わかったー」

僕はまだしつかり開いていない目をこすり、水を運ぶのかなとかなんとか思いながら僕は家の後ろ側のドアから外に出る。

うっ、寒い。そういえばそろそろ秋も終って冬がはじまるんだっけ？

今年こそあの小さなローブキレなくなっちゃうけどどうするんだ

ろう？ この姿じゃ風邪ひいちゃうし。おっと、とりあえずはお母さんの手伝いしなくちゃ。

「どうしたの？」

「水樽、盗まれちゃったみたい……」

水樽とは村の井戸を使わせてもらえない僕たちの唯一の水の調達場所、森の中の湖で取ってきた水を入れとく樽だ。

何時もなら週一度くらいで交換すればいいのだけれど、冬が近づくと僕たちの家から水樽を盗む人が増える。

——ひどいよね。本当に。何時もは村八分にしてくせにこんな時だけ水を盗みにくるなんて。

でも、もっと悲しくなる理由はお母さんがどんなに馬鹿にされても村の人たちを嫌わないこと。

冷血女とか赤髪の化物とか、銀色の妖怪とか言われてもお母さんが村の人を悪く言ったことはない。なんで村の人たちは僕たちのことを嫌うのだろう？

「ということ、水汲みに行こう」

お母さんは何時ものように僕に笑いかけながら魔法の練習をしている森の中の平らなところに行く。

そして、小さな声で何かを唱えると短めの葉のなくなった木が倒れてきた。小さいからドーンとかそんな音はならず、ちよつと土ぼこりが舞うだけ。どうやら魔法を使ったみたい。

また、何かをお母さんが唱えるとその木もまた四分割される。それだけでもすごいと思うのに、お母さんはまだまだというように杖を振るいながら小さな声で何かを言う。

すると、それは見る見るうちに樽に変化し始める。僕より少し小さな樽が四つ。

それぞれにしっかりとした蓋もついていて、所々れんきんという魔法で作った金具もある。水漏れだったのを見たことはない。

「すごい」

「でしょー?」

僕の頭を優しく撫でながらお母さんは言う。やっぱり、こういうときのお母さんの顔は好き。

「さてさて、水汲みにいこっか」

「うん」

僕は目の前に落ちている樽のうち二つを持つ。お母さんも二つ樽を持った。

れびてーしょんという宙をうく魔法があるみたいだけど、疲れるからといってお母さんはあんまり魔法を使わない。

だから、湖までは僕とお母さんで樽を運ぶ。かなり重いけれど、少し疲れ気味のお母さんを見ると運ばないわけには行かない。

「大丈夫？」

「これくらい平気」

平気でもないけれど、そういわないわけには行かないんだ。

よし、森の木々に当たらないように気をつけながら前進あるのみ。

湖は森の中央のところにある。

だから、実を言うところからあまり近いわけではない。いつもこれが終ると十分は倒れていないと体が動かない。往復しなければならぬから。

その時、ふと背後に何かの気配を感じた。残り少ない葉っぱが揺れるような……、でも振り向いても誰もいなくて。うん、気のせいだよ。

「どうしたの？」

「なんでもない」

さて、急がないと昼に間に合わないぞ。僕は自然と少し足を速めて歩き出す。それを見ると何か安心したのかお母さんも優しく笑い、足を速める。

すたすた、すたすた。僕とお母さんの足音が森に響きわたった。



すごい、すごい、すごい。あの魔法を使った。木が樽になるなんてすごいよ、すごい。私、驚いた。

私にも魔法、つかえないかな？

あ、森の奥に行くみたい。きっと、湖にいくんでしょう。

どうしよう……私これ以上奥に進むなんてお父様に言われているのに。

でも、私気になってしょうがない。あの二人のこと。

みんなは冷血の女っていうけど、銀髪のお姉さんはとても優しくそ

うだし、赤髪の化物って言われてる男の子だって化物には見えない。

なんで、みんな二人のことを嫌うんだろう？

よし、追っかけよう。見つかったら……そんなのどうでもいいわ。お父様に怒られるのは否だけど、好奇心に勝てるわけじゃないじゃない。

ゆっくり物音を立てないように二人の後をつけ始める。それにしても、この森って意外に暗いんだね。ちょっと怖い。

だけど……あ、草に触れて音が。気づかれたら……嫌だ嫌だ。どうしよう。嫌われてるかもしれない。村長の娘だから。

——逃げなきゃ！

颯爽と少女は森の中を外に向かい駆け抜けていった。

？ ちよつとした自己紹介（後書き）

さて、本編スタート。やっぱりどうでもいい話多いし、描写文が死んでいる。死にまくり。見た目について特筆なしって……。

誤字脱字ありま（以下略）

？ 白い友達

今日は魔法の練習の曜日。

僕が一番好きな曜日はって聞かれれば練習の曜日って答えるだろう。

練習は村の人にばれないように早朝と深夜に行われる。だから、昼間少し昼寝するというのが僕の楽しみの一つだ。

場所は僕たちの掘っ立て小屋のすぐ近くの森の中の平らな場所。村の人たちはほとんど森に入らないから、昼やってもいいんだけど、変な光が出たりしたら困るから変な時間を選んでいるらしい。

「さて、今日はどんなのをやってみたい？」

お母さんがまだ柔らかい光に短めの銀髪を照らされながら少しかがみ、僕に聞く。

ちょっと釣り目なのを気にしているみたいだけど、僕にはそれがまたかっこよく見えた。

「空を浮く奴がいい」

今日やるものは前から決めていた。ずっと前から。ただ、突然宙

に放り出されるような気がしてなかなか決心がつかずいえなかったのだ。

それを聞くとお母さんはうんうんというように頷き、にっこり笑った。

「よし、今日はレビテーションをやるのね」

「レびてーしょん？」

「そう、宙を浮く魔法をレビテーションっていうの。今からやって見せるから、よく見てて頂戴」

そう言ってからお母さんは一回深呼吸をして静かにレビテーションと言った。

すると、お母さんはふわっと浮き上がり、僕の頭のずっと上まで、周りの木々の一番上の部分があるくらいの高さまで飛び上がった。

お母さんの背後から太陽の光が差し込み、後光が出ているみたいだ。

「す、すごい……」

「でしょ？」

お母さんはいたずらっ子のようにそう言うと、ゆっくりと宙から降りて目の前に着地する。

すごいよ。だけど、僕もできるようになれるか正直不安。

僕はまだ全然魔法を扱えていないし。杖といってもお母さんの綺麗な形の木の手と違って、木の枝を再利用したようなものだし。お母さん曰く、杖に形なんて関係ないみたいだけど。

「今、僕にもできるかなとかんんとか思ったでしょ？」

「う……」

お母さんは僕の心のなんでもわかるんだってくらいに、僕が思ったことをずばずば当てる。これこそ、魔法なんじゃないかと僕は思うんだけど……。

「大丈夫、誰にだってできるから。」

でも、まず始に其処に落ちている石を浮かせるところからはじめよう。いきなりは誰でも使えるわけないからね」

「うん」

よし、僕もやるぞ。とりあえず、どの石を浮かそう？

僕たちを取り囲むように生えている木々の根元の奴？ それとも、
何もない平土の上になんとなくおいてある奴？ どれでもいいか。

よし、とりあえず目の前に落ちている白い綺麗な手のひらに乗る
くらいの大きさの石を浮かせよう。

「きまった？ それなら、その石が浮く様子をイメージしてみて」

浮く様子……白い雲のような石が僕の目の前を漂うって違う、止
っている様子。

そう、目の前に止っていてちょうど僕の目の前に……。

「イメージできたならレビテーションって唱えてみなさい」

お母さんの声が僕の中の心にしみるように入ってくる。

そして、目の前には僕が立っていて小さな声で「レビテーション」
と言っている。するとたちまち僕は僕の中に戻って、目の前には白
い石がっあああっあ。

気づいたら石はまた土の上の最初の場所に戻っていて、何事もな
かったように風が吹いた。

「ほら、浮いたでしょ？」

「うん……」

「さて、もう一度。今度は、浮いて自分の周りを動き回るイメージ」

動きまわるイメージ、動物のようにどこかの精霊のように。

喜ぶようにかな？ 悲しむようにかな？ きっと白いものは動物のようになって……そして……。

気づいたら僕は眼を閉じていて、その中の僕の周りを白いかわいらしいものが飛び交っていた。

「レビテーション」

そう唱えて目をあけてみると僕の周りを実際に白いまるで動物のような石は飛び交っている。僕にも出来立てこと？

って、あ。お母さんが白いものに石を投げた。避けなきゃ、右？ 左？ どっちがいい？ どっちでもいい。

ふう、なんとか避けてくれた、上にだけけど。僕の頭のずっと上。お母さんの頭と同じくらいのところ。

すると今度はその石を叩き落とそうとする、ってバランスが！

浮け、浮け、僕の石。あ、なんとか浮いてくれた。

と、思ったら石は途端に石に戻って僕の足元にコトンとかわいらしい音をたてて落ちてしまった。

しばらくお母さんは口をあけない。そして、何時もお喋りなお母さんが黙るのは僕が悪いことをした時だけ。

「あれ？　僕……なんか悪いことした？」

恐る恐る僕が口を開くと、お母さんはにっこり笑って僕に合わせてかむ。

「そんなことないわ。ただ、ちょっとおどろいちゃっただけ」

「え、どうして？」

「だって、この石がまるで動物みたいだったんだもの。飛び交っている間はずっと。何をイメージして飛ばしていたの？」

優しい笑顔でお母さんは僕に問いかける。怒られるわけではないみたい。ちよっと、安心。しかも、誉めているみたい。

だから、僕はちよっと自慢げに話してみる。

「白いかわいらしい動物がぼくの周りをくるくると回るのをイメージしてた。」

それは、喜んでいるみたいで、悲しんでるみたいで、でも時々本当に楽しそうなんだ。友達みたいだった」

「友達？」

「うん。僕が魔法を使えたことを喜ぶと、石も喜ぶように飛んでいった。」

石が打ち落とされそうで驚くと、石も驚きながらよけてくれた。

僕が安心すると、石も安心したように地面に落ちちゃったんだ。石も僕の気持ちが変わってくれてるみたいで、友達みたいだったんだ」

僕と石がまるで一つのものになったような気もした。何故か分かり合えたような気さえした。今から思い返せば本当に不思議な感じ。

けれど、お母さんはまたも黙ってしまった。何か考えこんでいるように。でも、割り切ったようににっこり笑ってから

「そう、それは素敵。じゃあ、次はもうちょっと大きなものを飛ばしてみようか」

と言ってくれた。

そのあとしばらく練習したら僕自身を浮かせることやお母さんを浮かせることもできるようになった。

けれど、お母さんは時たまに考え込むように無口になって、だから内心びくびくしていたり。

？ 白い友達（後書き）

誤字脱字などあ（以下略）

いよいよ魔法を使い始めたんですけどなにか間違ったところがあったら其処も私的よろしくお願いいたします。

？ 世界は丸く美しく（前書き）

（私が物臭だっというのが前面に……）

？ 世界は丸く美しく

それにしても時間がたつのもって速い。

だって、僕は今コモンマジックだけじゃなくて系統魔法もやろうとしているんだもん。

お母さんがこれくらいコモンマジックを使えば、まあ大丈夫って言うてくれたからついに僕も系統魔法をやってみようってことになったんだ。

杖が木の短い枝だっていうのは相変わらずだけだね。どうせ杖を新しくするなら今の杖を自分で煉金しろ、だそうです……（ついつい敬語に）。

僕が土系統じゃなかったらどうするんだろう？

僕だってさすがにメイジの端くれだから系統のことくらいは知っている。

系統は四つあって水、火、土、風。その中でも順位付けがあつて下からドット、ライン、トライアングル、スクウェア——だっけ。座学にはかなり自信がない。まあ、どんなのなんてどうでもいいよね。

さてと、とりあえずお母さんが使える水と土（二つ名は『冷鉄』

だったからあたりまえ）だけだから、僕がお母さんから習えるのはこの二系統だけ。

そして、お父さんは風と火だったらしいから、そのどっちかしか使えなかったら僕の系統魔法の修行はあえなく終了となってしまいうん、それだけは避けたいな。

「じゃあ、とりあえずまず土から。」

よし、私が一個腕を振るってあげるから、私の後に続いてやってみて。まずは、その石ころをいつもの樽の金具みたいなものに煉金してみよっか」

お母さんはそういうが速いかいつの間にか杖を取り出し、ゆっくりと丁寧になにかを唱える。僕はそれを頑張っって覚える。

ちょっと長いから覚えるのは大変。そして、一つ区切ってお母さんは小さな声で言った。

「煉金」

すると、たちまちその石は青とか黒とかかなんともいえないようなものになった。いつも、樽の金具になっているやつ。

「思い浮かべるのは樽の金具でいいと思う。さてと、やってみなさ

い」

うん、とりあえずやってみよう。失敗したてまあ悪いことはないしさ。僕はさっきのお母さんの言葉を思い出しながら一言一言たどたどしく言葉を唱える。でもそれも短くやっと、終わり。

「煉金」

僕はそう枝の杖を構えて言った。イメージするのはやっぱり水樽の金具。僕の身近にある金属といえばあれくらいしかない。さて、目を開けてみれば……。

「やっぱり駄目か」

「一発でうまく行くわけないもの。まあ、当然の流れ。」

さてと、じゃあ次は水ね。私もじつはこっちの方が得意。月みたいな丸い水の塊をイメージして……」

お母さんが杖を構えながらまたゆっくりと言葉を唱え始める。そういえば詠唱って言うんだっけ？ そんなのどうでもいつか。思ったところでまた一息ついて

「アクアボール」

とお母さんは言った。すると、その杖の先にいつもここから見える月と同じくらいの大きさの透明な玉が浮かんた。するとその後ゆっくりゆっくりとその玉が大きくなる。

「多分、これくらいのが一番出しやすいと思うんだけど……、まあやってみればわかるわね」

ちよ、ちよっとお母さん。その考えって単純すぎて言うかなんていうか。さっきの失敗したせいで少し臆病になってるし。

でも、物は試してもものだしやってみよう。僕はお母さんと同じように詠唱を始める。ゆっくり間違えないように……。よし、これで最後。

「アクアボール」

僕はそう唱えて杖の杖を構えてみる。想像するは大きな月。黄色くなくてただただ透明な月。水の塊のような……光も通してしまいうような丸くて綺麗な……。

「あら、なんか出来そうね」

そうお母さんの声が目の前から聞こえてくるのに気づいて僕は目を開ける。すると其処には丸くて綺麗なものが浮かんでいた。せ、成功？ 一発で？

「こ、これで成功？」

「そうよ。これでいいわ。さて、今度から猛特訓ね。

あ、そうだ。これから週に一度の練習を、週に三回に増やすから覚悟しなさい」

「え、ええええええ」

嬉しいような、怖いような。だけど、とりあえず系統魔法成功だあ！！

？ 世界は丸く美しく（後書き）

う、短い。あと、魔法の名前は結構適当です。知識ないし。
アクアボールなんて某ゲームから取りました、はい。

次回から詠唱については省略させていただきます（面倒くさい）

誤字、脱字、表現方法の間違えなどなんかこれ日本人としてありか
的な間違いがありましたら教えてくださいと嬉しいです。

そして、お気に入りがまた増えましたー
わー

こまこまとこんなこと気にしている辺り駄目人間ですが、まあよろ
しくお願いいたします。

そして、冬休みが終っていてまだ大量にたまっているっちゃたまっ
ているのですが、更新が途中から切れるなんていう事態にならない
確証はないので、そのところよろしくお願いいたします。（あー
零崎が色々あってすすまねー）
では

？ お喋りな木と美少女

最初はちょっとした出来心からだったんだと思う。

ただ、水の魔法がついに使えることが嬉しくてたまらなくて、だからちよつとだけ自分だけで使ってみたくなくなってしまったんだ。

昼過ぎはお母さんは洗濯物を干すので忙しい。一方僕はやることなんてないし、友達もいないし、学校にも言っていないから暇なんだ。

本当はお母さん手作りの木の板に爪をたてて彫ることで、文字の勉強をしなきゃいけないんだけど、たまにサボったって怒らないだろう。

え、平民なのにどうして文字の勉強をしてるかって？

それは文字が使えると色々と便利だから。お母さんは昔貴族だったからちよつと文字を書いたり読んだりできる。だから、いい先生でもある。

僕はこっそりと木の枝を柵の上からとり音をたてずに表の扉を開け、家の裏手から見えないように遠回りをしながら森に向かって橋って行く。

その時、背後からあいつらの声がした。

「やーいやーい。化物め！」

「村からでていけさっさとな」

デカとチビだ。本当は名前もあるんだけど、僕はその名前を思い出したくないし覚えていない。それに、僕の中でこの二人はただのかい奴とちいちゃい奴でしかない。

何時も仲が良いけどとくに何か出来ることがない馬鹿な奴ら、そうとは思うことができない。

僕はもうこのことになれてしまったから、何も言い返さない。

昔はよく言い返して、でも二対一で勝てるほど強くなかったから生傷が絶えなかったっけ。

それにしても、こいつら反応しない僕をからかってなにが楽しいんだろう？

「魔物の森へ行くんだな」

「さっさと魔物に食べられろよ」

ゲハゲハと下品に笑う二人。

魔物があの森に出てくるのは事実だけど、特に何かちよっかい出さなきゃ怒らないのに。なんでそれがわからないんだろう？

こいつらに話しかけられるのは好きではないから僕は足を速める。早くこいつらから逃げ出したい。こいつらとこれ以上関わりたくない。

「逃げるんだな」

「弱虫化け物」

ゲハゲハとまたそいつらは笑う。

もうこれ以上声でさえ聞きたくなかったからついに僕は走り出した。どうせこいつらは森の中まで追ってこない。

お前らこそ弱虫だよ、ばーか。

そんな事を思っていると急に辺りが暗くなった。どうやら森の中にやってきたみたいだ。

けれど、その暗さも夏よりはずっとましで、今では光も差し込んでくる。葉っぱをつける木が大分少なくなってしまったからだろう。

お、赤い実だ。この実、疲労回復にいいってお母さんが言ってたよね。よし、お土産だあ。

一個でいいかな？ でも、もうちょっと持ってた方がいいよね。けれど、多すぎると持ちきれないし。それに森に行っていたのがばれたら……よし三個にしよう。

なら、どれをとろう？ やっぱ大きい奴？ それとも光って綺麗な丸い奴？ 真っ赤な奴？ これとこれとこれがいいかな？

《うん、それでいいんじゃない？ 三つとって行くのね。大事に使ってね》

その時、どこからともなく声が聞こえてきた。

僕はどこかに人が潜んでいないかを確認するために辺りを見回す。上、左右、目の前や背後、下。全ての方向を探しても人影はおろか動物さえ見つからない。あるのは木々たちだけ。

《私だよ、わ・た・し。ほら目の前にあるじゃない。赤い実をつけた木が》

うん、あるって木がしゃべってるってこと？ そんなことあるわけじゃないじゃん。だって……。

《疑うのは勝手。けれど、それ以外に君の周りには何があるの？》

……、わかった君が話しているんだね。

けどやっぱりおかしいよ。周りには君しかないとしても君が話すなんて僕がおかしいと思えない。

《わかった、あきらめた。君頭固そうだから》

ひどいなあ……。そんなこというなら僕実を摘んだらどっかいっちゃうよ？

だって、何か話しかけてくるなら用があるってことでしょ。

《ちょっと、それは勝手だよ。私の存在否定しておいて。しょうがないなあ。今からさくって話しちゃうからちゃんと聞いててね。》

僕の実を食べたら疲労が回復するのは確かだよ。

でもね、僕の実を五つ以上連続で食べたらみんな狂っちゃうんだ。だから、僕の話始めて聞いてくれた君が狂ったりしないでね》

よく分からないけど、わかった。

僕はそう心の中で言って歩き出す。

その木は納得したようにまた急にだまりこくり、僕は逆に気味が悪いような気がした。

けれど、さっさと行かなきゃ。速く帰んなきゃお母さんにばれてしまうかもしれない。

自然と足取りはさっきみたいに速くなる。嗚呼、あの場所が遠いよ。

だけど、あせる過ぎてはいけない。あせると森の中に潜む獣はそ

れに僕に気づいて、その後はどうなるかはよくわからないけれども、必ずしも死ぬわけでもなければ、必ずしも生きて帰れるわけでもない。

その時、突然目の前が明るくなる。上のほうからの光が差しこみ……。つまりは僕は何時もの平らな場所にやっと着いたわけだ。

さてさて、さっさと魔法の練習を始めよう。

まずは……ライトがいいんだろうけど灯すべき明かりがないしな……。よし、とりあえず足音を消す魔法でも使ってみよう。

「サイレント」

小さな声でそう言ってから歩き始めると、足音や息の音さえもなくなってしまった。

鳴り響くはただ風によってゆれる木だけ。その木だって葉っぱがついていないものだと言はほとんどしない。

だから、その分周りの音に敏感になっていたんだ。

ザワザワと僕の背後の方から不自然な葉っぱの揺れる音が響く。誰かいるんだきっと。向こうはこっちが見えないから足音のない僕が近づこうときっと気づかない。

よし、とりあえず捕まえてみよう。

ゆっくりゆっくり一步一步と、その茂みに近づく。

そして、……どうしよう。捕まえてみようとは思ったもののどうすれば捕まえられるかさっぱりわからない。

魔法を使う？ でも、何かを唱えたらきつとばれてしまうだろうし。とりあえず、君は誰？ って聞いてみよう。逃げられたら……しょうがないか。

「君は誰？」

「きゃあああ」

僕が予想していたよりずっと大きな反応で飛び出してくる少女が一人いた。

貧乏ななりに小奇麗な麻の服に黒髪のかわいらしい、僕と同年くらいの女の子。

一瞬、どきっとしてしまったけれど向こうはそれどころでなく驚いているようだ。大きな目をぱちくりぱちくりとさせている。

「えっと……、可愛いね」

とりあえず誉めてみたけれど、そのせいでむしろ一步後ろに下がられてしまった気がする。女のこのことは難しい。ルマちゃんもそうなんだけど単純じゃない。

だけど、僕はその後言われた言葉でよそうを遥かに上回る絶望感到に襲われる。

まあ、つまりはその少女はかわいらしく笑いながらこう悪魔の言葉を言っただけなのである。

「うあ、森の中で赤髪の化物が出た!!」
と。

……気にしてない気にしてない行っても、美のつく少女にそういわれてへこまなかったらおかしいと思う。びくびくと震えながらそういわれると本当にへこむ。うん。

それにしても、どうしよう。逃げる？ 戦う？ 会話する？ 絶
対会話して和平を求めるべきだな。

「えっと、僕が化物に見えるのはなんでかな？」

「だって、お父さんは赤い髪の奴は化物だって言ってたんだもん」

はいそうですか。そういえば僕って村の敵だっけ。

ってことは、ここで和平を求めても無理……否、この子は僕と同じ子ども！　ならなら、きっと一緒に遊んでたら仲良くなってくれるはず。

「そっか、僕悲しいなあ。一緒に遊んでくれない？」

「え、でもお父さんが……」

「僕と一緒に遊んでみたくないの？　僕はいろんな魔法が使えるんだ。面白いって思わない」

「魔法が使えるの！？　貴族じゃないのに？」

お、予想通り驚いてくれた。

しかも目をキラキラと輝かせてる。まぶしい！　よし、魔法を見せてあげるぞ！

「うん。見ててよ。レビテーション！」

そう枝をもって僕が言うと、たちまち僕と少女は浮き上がる。はじめはいきなり体が浮き上がったことにとまどってたみたいだけど、僕も浮いていることを見て安心したのか、さっきみたいに目を輝か

してすごいと言ってくれた。

そういわれると、ちょっと調子に乗ってしまうって言うのが僕だ。

そこで、僕は一步一步少女にあるいて近づくことにした。すると、少女は宙を歩いている僕を見て本当に驚くように拍手を送ってくれた。

でも、それだけでは終らない。

僕はまだまだというように杖を上には振り上げて小さな声で詠唱を始める。ゆっくりと丁寧な、丁寧に。歌うように、僕と少女にだけ聞こえるように。子守唄のうように、最初にお母さんが唱えてくれた時のように。

そして、一つ……

「シャボン」

……呪文間違えた!?

調子にのってたから間違えた。というか、今思えば詠唱もところどころ間違ってたような。シャボンってなんだよ!?

けれど、少女は空を見ながらさっきよりずっと嬉しそうな笑顔で‘すごい’を連呼していた。僕も少女と同じように空を見ると手のひらにちょうど乗るくらいの色々な色に光り輝く水の玉が空に向っ

て舞い上がっていった。

昔々に遊んだことがあるようなそんな既視感。^{デジャブ}

大きな魚が空にみつつも四つも踊り、僕達は地上で

『しゃーぼん玉飛んだー屋根まで飛んだー』

って歌ってて。からからと音をたてて金色の金具はまわって、おばあちゃんが白い不思議なまるっぽい食べ物をくれて、それは葉っぱに包まれていて。僕たちはみんなでたのしく喋りながらそれを食べて、思い出したようにしゃぼんを――シャボン玉を作って。

あいつが何処まで飛ぶか競争だって言ったら、僕は負けないぞって言い返して、でも結局どっちがどれを飛ばしたかわかんなくなっちゃって。

僕はこんなことを体験したことがないはずなのに次々と流れ着いてくる記憶。

「シャボン玉ー飛んだー、屋根まで飛んだー、屋根まで飛んでー、壊れて消えたー」

つい、僕は口ずさんでいた。そのメロディーを。懐かしいようなメロディーを。何度も、何度も。

すると少女も僕に頑張って合わせようとそのメロディーを口ずさむ。最初は言葉を歌わないでフンフンフンと言って拍子をとってリズムを合わせるだけだったけど、途中からは間違えながらも何度も何度も歌っていた。

続きがあったような気もしたけれど、ただただこの部分だけを延々と歌っていた。

つと、その時いきなりシャボン玉が消えた。それと同時にレビティションが解けたのか僕たちはどんどんと地面に近づいて行く。突然のことに少女はびっくりしたのか空気を掻くように両手を動かすが、努力はむなしく落ちていくのは止らない。

せめて、少女だけは地面にたたきつけないようにと思って走るけれど、空気に足が取られてうまく進まない。あー、もうちょっとで地面に。

時が止ったようにゆっくりと流れて行く。僕もゆっくりと時間身を任せながら助けに行こうともがき続ける。とったあああー！！

気づいたら僕の上には少女が馬乗りになっていて、僕の体は地面にたたきつけられていた。

「えっと、だいじょうぶ？」

少女は心配するように僕の顔を覗きながらさういう。自分のせいかなどでも言うような悲しそうな顔。

「大丈夫、こんなのへっちゃらさ」

そう僕が返すと、少女は安心するように息をはいてよかったあーといって無邪気に笑った。そう笑ってもらったら僕もまた安心しちゃって大声で笑った。

当たり一带に僕たちの小さな小さな笑い声が響いて、森も笑ってくれていたような気がしたのはきつと気のせいだね。

「ねえ、あの歌ってなんの歌？」

少女は僕の顔を見上げながら聞く。僕はちよつと考え込んでからシャボン玉のうたといった。

「シャボン玉って何？」

「さっき空いっぱい飛んでいった玉のこと。シャボン玉っていうんだ」

「ちよつと悲しい歌だったね」

「え。なんで？」

「意味は他の国の言葉でよくわからなかったけど、なんか歌っててちよっと悲しくなっちゃった」

「え？」

他の国の言葉ってどういうこと？

僕がしているのはお母さんが話しているあの言葉だけなのに。僕にはしっかりとあの歌の意味がわかったし。あの体験したことのない記憶に関わるものなのかな？　よくわかんないや。

「あれ、悲しいような曲じゃなかったの？」

「あ……うん。最後にはシャボン玉は壊れて消えちゃうんだ」

何個ものシャボン玉は空に旅立ってはどこかでプつりと消えてしまつて、それでも空に舞い上がってはまた消えて。触ってしまつても消えてしまつて、儚すぎて。

「壊れないシャボン玉ってないのかな？　私、ほしー」

僕は一瞬答えるのにとまどう。

ここでないよって答えたら少女はどれだけ悲しむだろうか？　そう思うと一瞬ためらっちゃって、だけど何も言わないでただこのキラキラしている目を見ている勇氣なんてなくて。

「名前、なんていうの？」

「え、えっとレティンっていうの。可愛いでしょ？　お兄さんは？」

お兄さんって僕？　化物って呼ばれてない？　なんか、うれしい。

けれど、僕ってレティンと同じくらいの年じゃないの？　まあ、いいや。きっと僕の方が身長が高いだけ。

「僕はシアリって言うんだ」

僕は出来るだけにつこりと笑いながらレティンに笑いかけると、レティンはまたも喜んだように僕を見上げて

「シアリっていうんだ、シアリね、シアリー」

と意味もなく僕の名前を連呼している。僕も

「レティンレティン、可愛いレティン」

といったを見る。するとレティンも負けないぞっていうようにシアリという。僕だっけっておっと。みつかったら駄目だしこれくらい

にしなきゃ。

「やめよ、やめよ。森の外にいる人が驚いちゃう」

「そうだね」

それから僕たちはまたあははははって笑いあった。何故かわかんないけど無性に笑いたくなって。だから、僕たちはただただそれに任せて笑って。

空を見上げるとお日様も大分斜めになってきていた。そろそろ、帰んなきゃ。

「そろそろ帰ろ。おうちの人心配しちゃ……う」

見るとレティンは急に寂しくなったように僕を見上げる。か、可愛い。

もっと一緒にいたいとかきつとそういうことだけど、口には出さなくてただただ僕を見つめてくるだけ。

「えっと、また会えるから」

僕はかろうじてこの言葉を出す。すると、レティンは顔を真っ赤にしていつつとボソツと言う。

「いつでも、この時間にここに来てくれれば会えるよ。会いたいつて思っていればね。でも、村の人に僕のことを話せばきつと会えなくなっちゃうんだ。魔法のことも話しちゃ駄目だよ」

「な……ん—で？」

途中途中息をうまくすえなさそうにしながら、レティンは聞いてくる。僕はなんと言おうか迷ったけれど、一言

「なんでも」

といって、にっこりと笑ってみた。すると、何かを理解したのかレティンもにっこりと笑ってなんでもといった。僕も何でもいって、今度は空を見ながら笑いあった。無性に笑いたくなるってことはよくあるみたい。

？ お喋りな木と美少女（後書き）

……今はじめて気づきましたがコモンマジックの呪文って普通に英語なんですね。

誤字、脱字、間違った表現、間違った情報がありましたら連絡をくだされば嬉しいです。

1 1. 1. 2 9 美少女は（r yと統合しました。

？ かくれんぼ

よし、これで隠蔽工作完了。なんて思いながら僕は汗をぬぐうような動作をした。ような、というのは今はまだあまり温かくなくて大きく動いても汗がほとんど出ないからだ。

尤も、それには僕の体質も関係しているのだろうけれど。否、体質だなんていっても結局はただたんにちよつと色白で汗をかきにくいだけなんだけど。

ほらさ、美少女（肌が白い子）は汗をかかないって言うじゃないか。詳しくは覚えてないんだけど、誰かがそう言っていてさ。まあ、要するに僕は美少女じゃないけれどそういう体質みたいで運動してもほとんど汗をかかない。夏の暑い日であろうともね。

それにしても、どうして隠蔽工作なんてしているのかというと発端は先週に会ったことに始まる。先週僕は文字の勉強をさぼって出かけてしまった。それで、帰ってみたら普通にばれていてすごくもうそれは水と土のメイジだというのに烈火のように怒っていたわけだ。遊びに行ったことは許すけれど、自分のやるべきことをやらないうで遊びに行く？ 貴方は何様のつもりなのかしら？ という具合に。いつもの温暖な雰囲気なんてもうどっかにいってしまっていた。

まっ要するに本当に怖かったんだ。男らしく胸をはれなんて思われるかもしれないけれど、そんなことができたら僕だって苦労しないよ。

そんなこんなで軽く学習した僕は今度はしっかりと隠蔽工作をしてから遊びに行くことにしたんだよ。お母さんにやれと言われた課題を全て終らせておくだけで、隠蔽も何もないんだけどね。ただ、ごろがいいからさ。

それで後は簡単。お母さんだって見張っているわけじゃないし、洗濯で忙しいんだから抜け出すのは本当に簡単なんだ。お母さんがもし風メイジだったら風の動きでなんとなくわかっただろうけれども、幸い水と土では人の動きなんてたどれない。本当に助かったよ。

さてと。僕は薄くてぼろきれのようになってしまい形だけをかりうじて保っているケープをはおり、木の枝――杖をもつ。もしもこのケープがもっともっと豪華なものでこの杖がしっかりとした杖だったのなら僕だって一端の貴族に見えるだろう。まあ、ないものねだりをしたってしょうもない話なんだけれども。そして、いよいよ出発だあ。

お母さんは風メイジでないといっても、この家の玄関となっている暖簾(?)は物干し竿のあるところから丸見えだ。それはあくまでも物干し竿に背を向けていた場合であって、普通に洗濯物を干していたり洗っていたりすれば絶対に見つからないんだけれども。でも、やっぱり念には念をとということで僕は出来るだけ物音をたてないように歩く。静かに、静かに……ふー。やっと洗濯場からみえないところまでいけたよ。

これからは本当にもう簡単。遠いけれどもただひたすらに走っていれば村に出れるし、そこから森に入るのなんていうのはすぐでできること。なんて思うと肩から自然と力が抜けていった。もともと力を入れた気なんてなかったのに、意外と緊張していたのかな。

先週はこの辺でチビとデカに会ったけれども、今日はいなかった。なんかあったのだろうか？ まあ、僕には八割がた関係ない話なんだけどね。おっと、森の入り口にやっと到着。

それにしても、この森って本当に大きいよな。全体的に。見上げてみればたくさん大きな木。ちょっと怖いとも感じてしまうほどの深さと迫力。やっぱり魔物がでるなんて噂がされるのもよくわかる気がした。否、実際にでるんだだけどね。ただ怒らせなければ攻撃してこないんだよ？ 人間とおなじで。どうしてみんなそのことがわからないんだろうね。

まあ、いつまでも感慨にふけっているわけには行かないから静かに森の中に足を一步踏み入れた。その瞬間いつものように不思議な感覚にとらわれる。懐かしいような、忘れてしまった故郷にきたような。周りに多い茂るのは木ばかりで人なんてほとんど立ち入らないのに感じてしまう、人の気配。それも優しく包み込むような安心を感じさせるような。

——そういえば、喋る木って奴もあつたんだよね。だから、それくらいして当たり前なのかな？ また一步、一步と奥に進むたびにその気持ちは強くなっていく。何かに惹かれるようなそんな気持ちがずっと強く。鼓動が惹かれるように早くなり、足もずっと早くな

ってしまう。なのにこの世界というのはあまりにもものつたりとんきでゆっくりすぎる。

まるで僕にだけ時間というものがこの森の分だけ何倍も追いかけてくるようなそれくらいに、だ。

その時、いきなり僕に飛び込んでくる小さな影が……。

「おにーちゃん！ まってたんだよ」

「あ、うん」

あー氣の入った返事の返せない自分にすごくいらつく。レティン
はこんなに可愛いのに。しかも抱きついてくるなんて、あうなり抱
きついてくるなんて破格だよ！

今日もまた白いワンピースをきていてそれがまたかわいさを引き
立っている。けれど、この木地は結構上質そうだけどどうしてそんな
お金があるのだろうか？ この村で布を作っているなんて話は聞か
ないし……。まあ、いいや。何か事情があるんだろう。

「もう、おにーちゃんつたら……。とにかく、あそぼ！」

「うん、そうだね。何する？」

彼女は少し考えるように首をかしげ、そして一つ答える。

「かくれんぼ！」

はい？　かくれんぼ？　えっと、それでもいいけれど僕とレティンの二人しかいないのにかくれんぼって。悲しすぎる。

「大人数じゃなきゃ……」

「だめ？」

「なんでもないよ！　よし、最初の鬼は僕だ！　10数える間に隠れてね」

そう言ってから僕は目を手でわざとらしくかくす。

「1」

それにしても結局彼女に乘せられてしまったな……。でもしょうがないよ。上目遣いの攻撃力は未知数なんだから。

「2」

そうそう、あの瞬間のかるい潤目は反則だよね。あんな目されて断れるって言う人間は本物の鬼畜だよ。

「3」

鬼畜って言えば僕は化物だなんて噂されているんだっけ？ 本当はどうして僕が化物に見えるんだろうね？ 僕にはよくわからないよ。

「4」

お母さんがさ、冷徹の女って言われるのも少し予想外だし。だってお母さんはいつでも優しく、優しく。

「5」

ただ、そんな事を思ってしまったえばお父さんのことなんて僕何一つも知らないんだよね。きっと僕とおなじ赤い髪だったのだろうけれど。だとしたら、お父さんも化け物とか言われなかっただろうか？

「6」

それに、犯罪者っていうのはどういうことだろう？ お母さんが犯罪者と結婚するようにはどう見ても思えないんだけれども。

「7」

お母さんはそれなりに頭いいし。って、そういえばレティンの家族ってどんな人たちなんだろう？ 後で聞いてみようかな？

「8」

お母さんはきつとまじめな人なんだろう。お父さんは優しいに違いない。甘くてやさしい。けれど、時に強くしかってくれるようないい父親。しっかり働いているお陰でお金持ち。

「9」

きつとそんな人だ。僕の勘はお世辞にもいいとはいえないんだくれどね。悪いことばかり当たるから。

「10」

そう叫んでから僕は手を目からゆっくりはずす。そして、森をもう一回見てからはっとした。

「そうだ、こんな森でかくれんぼなんて無謀！ それに最悪魔物にとつてくわれてしまう！」

なんで気づかなかったんだろう……。こんな簡単なことに。といっても10秒で歩き回れる範囲は限られているからきつと大丈夫。それにレティンは怖がりだろうからあんまり森の深いところまではいけないだろうし。

とりあえず、僕は森に分け入って彼女を探し始める。

最初の方は楽観していた。どうせ最初にかくれた位置から動かないんだからすぐ見つかるだろうなんてのんきなことを考えて。だけ

ど、彼女の誤解を僕は知らなかった。彼女はこの遊びを鬼が逃げながら隠れている自分を探すゲームだと――隠れ鬼だと勘違いしていたわけで、そんな簡単に見つかるわけがない。ただ、僕はそんなことはわからないわけだから最初の方はたまに寒いようになんて叫んだりしながら静かに歩き回っていたんだ。

でも、ふとした瞬間空を見上げると太陽が大分西に傾いていて……。この後は本当に無我夢中に探した。同じところを何度も歩いた気もしたしあてなんてないけれど、森の中をひたすらに走り回って。道なき道を走り抜けて。

「はぁ、はぁ、はぁ……いた」

気づいたら池のほとりにいて……。そして池に映った太陽に顔を照らされているレティンがいた……。今まで森の中を走りまわっていたけれども、まさかこんな単純な場所にいるとは思わなかった。

そして、しばらくするとはっとしたようにレティンは顔をあげ僕をゆっくりと見つめなおしながら無邪気に言っただけだ。

「やっときた」

そりゃないよ！　ずっと探していたのに。でも、レティンの姿を見ればなんか帳消しにしてもいいような気がしてきてしまっただけ……。

「最初は逃げながら隠れていたのに見つけてくれないから……もう寂しかったよ」

「ごめんね、中々見つけてあげられなくって」

結局謝っているのはぼくだった。なんかさつきからずっとそうだけれどなんだかんだでさ、僕はいつも立場が弱いよね。

ただ、それ以上に寂しかったって言葉にきゅんときてしまった。ちよっとだけ目を逸らしながら言われると本当にかわいらしくて、ずっと一緒にいてあげたくなってしまう。絶対にそんなこと不可能なんだけれど。

「いいの、見つけてくれたから。それで……どっちの勝ちなの？」

「僕の勝ち。だからさ、一つ……いや少し教えてくれない？」

考えてみればレティンの勝利条件がないけれどもそこはつつこまない。突っ込んでもしょうがないし、それ以上に僕は勝ったという理由のもとで聞きたいことがあった。しばらく森の中を散策していて感じていた疑問。彼女を探しながらもふとした瞬間にはそのことばかり考えていた。

「いいよ。なんでもきいて」

「それじゃあさ……家族ってどんな人？」

その瞬間空気が凍った。彼女の顔が一気にこわばってそしてさっきとおなじ目遣いで聞いてくる。

「答えなきや駄目？」

かわいらしい声なのに、見た目は普通の少女なのにどうしてだろう。どうして、何かを脅迫されているような切迫感を感じるんだろう。どうして、首に冷たい氷の刃物を押し当てられているような恐怖と寒気を感じるんだろう？ どうして、彼女から彼女ではないような気配を感じるんだろう？ どうして、どうして。

「いいよ、答えなくても」

僕は気づかないうちにそう答えていた。そして手を二三回振って走り出す。村までただひたすらに走る。ふと振り返ると森にちょうど夕日が沈もうとしていた。

赤黒い気持ち悪い色の光をとどろかせながら……。

？ かくれんぼ（後書き）

えっと、話がこの辺飛んでいて足りないと思ったのでとりあえずここに挿入です。

誤字脱字その他もろもろありましたら教えてください。

異常

挿話 昔の話 レティンとアニエス

「たくさんの幸せを、短い間だったけれどありがとうございます」

レティンちゃんはあまりにも嬉しそうに微笑んだ。



side ???

「パパ、これでいいの？」

「嗚呼、さすが私の娘だ。これで私も……」

パパは私の舞を見ると素晴らしいながら私を撫でてくれた。神祇の舞……だっけ？ 一ヶ月くらい前にお父様にいきなり教えられたのよね。意味はよくわからないけれど、どこかにいる神様を私が賛美する舞いみたいなの。神様だなんていきなり言われても私は困るし、それ以上に巫女だから神祇の舞を踊れなければならないなんていわれてもさっぱりなにもわからない。

巫女？ なにそれ。神様に仕える？ 神様って誰？ それが私の本当の気持ち。だって、なにもわからないんだもん。しょうがないじゃん。

だけどね、私がうまく舞えると笑いながら誉めてくれるの。沢山抱きしめてくれて、頭を撫でてくれるの。それがたまらなく私は嬉しかった。パパが誉めてくれるならこんなへんてこりんの舞を踊って巫女を名乗るには充分だったし、私としてもこのどこか重苦しい巫女の衣装は好きだったから。

あとは、神様のお話も好きなんだよ？ 神様ってなんなのか、巫女ってというのがなんなのかはよくわからないけれど私は大好き。

昔々この村には神様がたくさん住んでいたんだって。だけど赤い髪の間がこの神様の一人を殺そうとして、そして神様はカンカンに怒ってお空の方に逃げて言っちゃって。そのあと近くの土地で食べ物で作れなくなっちゃったんだって。それを哀れに思った巫女が神様に向って神祇の舞を踊ってご機嫌をとったの。それで、神様は自分を滅ぼそうとした赤い髪の間とその周りの何十人もの間を木に変えることでお許しになったって話。だから、向こうの方に森が広がっているみたいなの。

面白いお話でしょ？ パパが何十回も話してくれたからもう全部覚えちゃったよ。何十回も何十回も確認するように、言い聞かせるように。パパもこのお話が好きなのかな？

でも、だからなのかな？ 私にはお友達がいらないの。パパは昔から何回も言っていたの。「巫女にお友達はいらない」って……。

と言われても、やっぱり私は小さな小さなお庭から村の子どもたちが走り回っている様子を見ることしかできないのかな？ 大人の人たちがえっしょえっしょと麦をまいている様子を見ることしかできないのかな？ 私だって一緒にしゃべったり一緒に働いたりしてみたいよ。巫女だから特別とかそういうのはあんまり好きじゃないよう。

前々からね何回かパパにお外に出たいようっておねだりはしてみてたんだよ？ けれどね、パパはお前にほこりがつくなんて言って許してくれなかったの。ひどいよ。私だって普通の女の子なんだよ？ 私だってお外でお喋りしたり駆け回ったりしたいんだよ？

それでね、私神祇の舞を踊らないようにしたの。言われてもずっとやだ！ って言い続けていたの。そしたらある日パパが折れてくれたの。神祇の舞を村の人たちの前で踊ることを条件に。

勿論踊ったよ。正直うまく踊れた気がするし、村の人たちがみんな拍手してくれた。ちよっと誇らしかったけどパパに抱きしめられたらもうそんな気もちどころかいつちゃった。それで、しぶしぶパパは外に出ることを許してくれたの。それも一人で。

本当に嬉しかった。お外に出れることが。だけど、この妙に真っ白の服を脱ぐのは許してくれなかった。だけど、しょうがないよね……。あんなふうにおねだりしちゃったんだから。村娘の赤いチュウの服とかにあこがれていたんだけどな。

「行ってきます！」

私は大きな大きな家に向って叫ぶ。庭の植木の隙間から見た外の家よりずっと大きな家に向って。きっと貴族さまの家よりはずっと小さいだろうけど。

さてと、どこにいかかな？ 本当は森の中に入って赤髪の化け物に会いたかったんだよ？ だって、どんな人が気になるもん。化物とか家にたまにやってくる人が口をそろえて言っているけれどなんで化物なんだろう？ 赤い髪ってだけなんでしょ？ やっぱり神様のお話が関係しているのかな？

でも、行けない森のことを考えてもしようがないよね。とりあえず、畑のところを走り回ろう。畑をふんじゃきつと駄目だろうからその近くの道を通り抜け……った！ 周りをあんまりみないで走っていたら誰かとぶつかっちゃったみたい。とっさに謝ろうと思って顔を上げると、そこには小さな顔色の悪い痩せ細った女の子がいた。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 許してください、巫女様！」

もともと青白い肌をさらに青くして言う。ばさばさの白っぽい髪、白くにごった瞳。そして、ぼろぼろの布キレのようなワンピース。足ははだしで所々豆ができている。もともとはかわいらしい少女だったはずなのに、どうしてこんな。しかも、私にただたんにぶつかっただけで地にひれ伏して謝るなんて大げさだし。

「いいよ、私の不注意……」

「そんなことはありません。全ては私のせいです。どこか天罰を下してください」

そう言って顔も上げずにもう一度深く頭を下げる少女。どうして私なんかにこんなに深く頭を下げているのかわからなかった。そして、それ以上に周りには何人かの人がいるのにどうして彼女の弁護をしないのだろう？　なんで私たちが見えないようにふるまっているんだろう？　みんなが彼女を避けているような、関わってはいけないようなそんな雰囲気を感じる。それがたまらなく嫌で、だから私はつい言ってしまったんだ。

「じゃあ、私のお友達になって？」

「とんでもないです。私なんかが貴方様となんて……」

……やっぱり巫女って何か偉いのかなあ？　私が外の人たちと関わったことってそれくらいしかないし。きっと私が神祇の舞をした時見ていたんだよね？

「だって、一人じゃ寂しいもん」

「……わかりました。だけど、私でいいのですか？　まだあって間もないですし」

彼女は少しだけ顔を上げてから節目がちに答える。私をできるだけ直視しないようにと。私はその行動の意味がよくわからなかったけれど、考えるのが面倒くさくなったから普通にうん、とひとつ頷く。すると、彼女はみるみる顔を真っ赤にした。本当にかわいらしい。さっきまでの青白さが嘘みたい。けれど、やっぱり頬はこけていて体のところどころに骨がうきあがっていた。私の手や腕を見てもそんなことはなかったのに。

「私の家に来て！」

「はい？」

彼女は首をかしげるけれど、気にしない。許せない、許せない。こんなかわいらしいのに骨が浮き出ているほどに痩せていて、頬もこけているなんて。せめてせめて、私と友達になったんだからご飯くらいは食べさせないと。私は彼女の手を引っ張って引きずり始める。驚くほどに軽い。まるでパパに読むように言われた本くらいに軽い。

「えっと、どうして。というか、ひっぱら……ごめんなさい」

「あ、ごめんなさい。痛かったかな……」

「いえ、自分で歩けるので」

彼女は私の手を冷た過ぎる手で掴みながら立ち上がる。けれど、足はふるふると震えていて今にも自分の体の重さに耐えられず折れてしまいそう。やっぱり、何か食べさせなきゃ駄目だ。

私は彼女の手をぎゅっと掴み歩く。彼女を少しだけひっぱりながら。完全にひっぱっちゃえばきつと痛いだろうしね。彼女は一体何が起こるかわからずおびえたような顔をしているけれど、気にしない気にしない。つと、やつと家に着いた。さて。

「ただいま！ お友だち連れてきた！」

「お、お友だち？ そして、そこが貴方様のい」

「貴方様なんてひどい。友達なんだからアニエスって呼んで」

「……アニエス様の家に入るなんてとんでもないです」

もう、彼女ったらなんでそんなに遠慮するの？ 私がいいって言ってるんだよ。そんな事を思っていると扉が開いてパパが出てきた。そして、私と彼女の顔を見比べるよ驚いたように眼を見開いて叫ぶ。

「ど、どうして外者を家に！」

「外者じゃないよ。友達なの！ だから家に入れてもいいでしょ？」

「駄目だ！ そんな穢れをもちこんではいけない！」

「私もいいです。私なんかがこんな素敵な家に入るなんて許されるわけが……」

「こんなに痩せ細った女の子、友達見捨てられないもん！　パパの馬鹿！」

どうしてパパはわかってくれないの？　どうして、外者だなんて悲しいこというの？　なんでさ！　なんでさ！　私はパパをにらみつける。パパはしばらく目を逸らしてから、低い声で「ならん」と言い切る。いつも優しいパパからは予想もつかないような低い声で、恐ろしい声で。だから、つい一瞬ひるんじやってその時に手の力が緩んで。私の手から彼女の冷たすぎる手はこぼれ落ちた。

「さようなら、さっきはありがとうございました」

「今更丁寧語なんてやめてよ！　行かないで。何とかしてあげるから」

「……私は優しくしてもらえただけで幸せです。それにアニ……貴方は貴方様の立場をわきまえてください。貴方はこの村の巫女で孤高の存在なんです。私なんかという外者と関わってはいけません」

「じゃあせめて名前を教えて！」

彼女は何も言わずに微笑んでから一つぺこりとお辞儀をしてあのもろそうな足で走って行った。途中転びそうになりながらも必死で、必死で――……。。

挿話 昔の話 レティンとアニエス（後書き）

レティンちゃんの昔話です。

あの日記の補足みたいな話ですね。

誤字脱字ありましたら教えてくださると嬉しいです。

？ 巫女

あれから何週間たったかな？ 否、もう何ヶ月っていう単位で考えた方がいいのかもしれない、なんて思いをはせながら僕はいつもの場所にむかって走りだす。お母さんにばれないように家を抜け出すのだってもうお手の物だ。まあ、何故か抜け出すたびに本当はお母さんはこのことに気づいているんじゃないかって思ってしまうんだけどね。

さてと、今日も村を通ってあの森の開けたところまで行かなきゃと走り出す。

「サイコキネシス」

僕は左手の杖を足に向けてそう近くに立っていても聞き取れないくらい小さな声で言った。すると、走るスピードが格段に速くなる。

だって、自分の足が自分でもびっくりなほどに早く動くように操っているんだからね。その時ふと視界の端に二人の少年が映った。デカとチビだ。そういえば、あいつ等の姿を見るのは久しぶりな気がする。とりあえずすーっと無視していこう。

「おーい、巫女よ。何処にいるんだ？」

「無駄だよ。こんなところに巫女様がいるわけねえー。それにこっちを他に見ている人なんていないんだからサボったってバレやしね

え。あ、化物が出た」

……気づかれないように気をつけていたのに簡単にばれてしまった。面倒くさいことになりそう。それにしても、巫女様って誰だろう？

「またむつつりだんまりか。けっ、俺等が遊んであげるのに可愛くない奴等だな」

「あの巫女様とは大違い。あの方はいつも真っ白なワンピースを着ていて、清潔で美しいからな」

「ちよっと気味悪いけどなあ」

今日は無駄に絡まないみたいだ。運がいい。よし、このまま無視して逃げちゃおう。僕はさっきからの二倍くらいの速度で走り出す。音とかはもう気にしない。どうせ森まで行っちゃえばこっちのものなんだ。あの場所より向こう側に彼らはいけない。魔物様様って言っても悪くないかもしれない。

自分自身が食われちゃったら終わりなんだけどね。それにしても気持ち悪いほどに辺りが静か……。村総出で『巫女』って人を探しているっていうこと？

じゃあ、それほどに『巫女』という人は村にとって大切な人だっ
てこと？　もしかしてレティンも村を抜け出せてない？　それとも
――……。否、そんなことはないって。ありえない。真っ白なワンピ
ースだからといって。それに、レティンは清潔で美しいというより

はただの可愛い女の子って感じだしね。

とりあえず何時もの森の中の開けたところまで行ってしまおう。
さくさくと、こないだから先日まで降り積もった雪を踏みしめて走る。サクツ、サクツと雪の碎けるような音が重なりながら響いてゆく。

そういえば周りを囲む大量の人のように高さがまちまちで、けれどやっぱり高めの木々の上にも真っ白な雪が降り積もっている。まるでいつか食べさしてもらった氷に甘いものをかける食べ物みたいだ。尤も、食べれないだろうけどね。

それにしても雪に足跡をつける感覚って好きだな。振り返ってみれば自分の足跡が雪に点々としているなんてちょっと面白いじゃないか。

ただ、残念なのは既に一人分の足跡があったこと。小さな小さな足跡。きつとレティンの足跡。歩幅だってもものすごく小さくて、つたない足で一步一步ようやく歩いていくってくらいだ。……雪の中で倒れていたりしないかな？ 雪の中で彼女が倒れている図というのはきつと儚げで美しいのだろうけれど、あんな小さな体じゃあ命に関わってくる。

なんて、考えるといつかと同じように自然と足早になってしまう。さっきまでも充分速かったけれど、さらに歩く早さが速くなったからきつとこのスピードは駆け足に充分達しているだろう。と、その時いきなり目の前が開ける。やっといつもの場所についたみたいだ。

確かにレティンはいた。けれど何時もとは明らかに様子が違う。何時もの明るさがなくなつて、かわりにすごい硬くてまじめっぽい雰囲気をもっているんだ。刹那レティンは僕に気づいたのかこっちに視線を向ける。すると、いきなり目に涙を浮かべた。大粒の涙は周りの雪に冷やされた空気によって軽く凍りながら地にひたひたつと落ちてゆく。

「ど、どうしたの？」

たったこれだけの言葉なのに、これだけのことしか言っていないのに口が震えて思うように声がでない。なんとか言葉にはなつたみたいだけれど、これ以上意識をぬけばたちまち僕はへたつと座り込んでしまうだろう。

レティンはその言葉にはっとしたかのようにもともと寒さでか青白かった肌をさらに青白くさせる。そして、僕をゆっくりと試すように見つめてくる。藍色の瞳が僕をぐるぐるぐると飲み込んでいく。彼女の瞳はまるで僕の奥にある何かを探るようにじーつと見つめてくる。ただただじーつと。

そして、少しも時がたたないうちに彼女は確実に言葉をつむぐようにゆっくりと口を開いた。

「私ね、嫌われちゃったの。きっと。私が思い通りの巫女でいられ

なかったから。お父さんにきたわれちゃったの」

ゆっくりと頭の中を整理しながら彼女は一つ一つの言葉をつなげながら喋る。それにしても、巫女っていうのはもしかしてあいつ等が探していた……。

「お父さんはね私が神祇の舞を踊るだけの巫女でいいって言ったの。綺麗で清潔なだけでいいって言ったの。私もそれでよかったの。だけどね、私がこっそり何度も抜け出してたから。自由がほしかったの。私はね友達がほしかったの。昔から今も。最近はね心の中にレティンがいるからもう誰もいらなんて思ってたの。けれど、そんな時に……シアリと会えたの」

ずっと息を深くすいこんで、言葉をとめる。不可解なことを何個かいつていたような気がするけれど、とりあえずは気にしないで彼女の言葉に耳を傾ける。

「そしたらもう夢中になっちゃって。他のことがどうでも良くなるくらいに。でもね、お父さんはきつとそんな私なんて嫌いな……だから。結局逃げたのは私。巫女なんて辞めたって叫んだのは私。それ意外の方法であんな幸せに生きていけないのにね」

あははは、と乾いたような笑いまた大粒の涙をたらした。巫女……それはやっぱりレティンのことだったんだ。でも、それがわかったって僕はどうしようもなくて。

結局僕に出来たことといえば泣きつづけるレティンの頭を撫でながら

「帰ろう」

って言うことくらいで、それもきつとレティンには届かなかったと思うし、僕というのは本当に無力なんだということが、それ以上レティンのことを何も知らなかったんだってことを思い知らされるだけ。

気づいたら辺りはまた一面の雪に囲まれていてレティンの姿はまるで自然になくなっていた。

？ 巫女（後書き）

はい、挿入です。また。

誤字脱字などありましたら指摘よろしくお願いいたします。

（それにしても、話が進まない）

挿話 昔の話 パン

side アニエス

あの日から私は外にでられなくなった。月に一度の神祇の舞を踊る日を除いて。庭にでることは許されていたけれども、それだけで門番の顔は昔よりずっと険しくなった。私は何回か脱走しようとしたけれど、毎回毎回門番に阻まれて、脱走は成功しなかった。

少しは彼女がこっそりと遊びに来てくれることを期待していたんだけど、ただでさえ貧乏で生活が苦しそうな彼女が忍び込むなんていうリスクの高いことが出来るわけがない。

パパには何度も神祇の舞なんて踊らない！なんて叫んでおねだりはしたけれど、今度ばかりはパパも折れなかった。何回頼んでも、どう頼んでも「ならん」と一括するばかりで……。

それでかな、私は少しづつ諦めだした。こんなにしつこくおねだりしても折れてくれないんじゃない、もしかしたら私は一生巫女と呼ばれ踊るだけの小鳥なんじゃないのかなと。嫌だったけれど私には対抗する手段なんて何にもなくて、ただ流されることしかできなかった。

なんだかんだであの踊りは好きだったし、それでうまくなってパパに誉められるのも好きだった。もう、これで満ち足りているといっても過言じゃなかったのかもしれない。

だって、食べるものも着るものも住むところもある。パパからは愛されていて、踊るだけでみんなに誉められる。

食べるものだって少ししかないじゃなくて、私が食べきれないくらい沢山あって、そのどれもが普通の平民に食べられるものじゃなかったし、着る物だって白いワンピースしかないけれど、その生地が上質で上着まで着ることができなんていうのはやっぱり恵まれている。

それに、住むところなんてほかの平民には考えることの出来ないくらい大きな家。部屋だって広い。尤も私の部屋には家具やぬいぐるみなんてこれっぽっちもないんだけどね。

でも、風雨がしのげるだけじゃなくて、寒さもしのげる家って言うのは珍しいと思う。私が庭の植木の間から見る村にはそんな家はなかった。この前出かけたとき見た家の中にもなかった。

だからさ、私は結局これ以上何も望まなくてもいいような環境に生きていて、それでもまだ友達なんて望むのは勝手なんじゃないかなって思ったりもしてしまう。

この環境っていうのは私が巫女であって始めて与えられるものみたいだし、巫女でなくていい友達が欲しいなんて馬鹿らしくて笑っちゃうほどの話なのかもしれない。

でも……やっぱり一人でぽつんと部屋の真ん中に座っていると寂しいんだ。どんなに周りが飾られていても、寂しいんだ。

そんな時に、門番に余裕がではじめた。それは子どもである私がみてもはつきり見て取れるほどの余裕。きつともうこの譲さんは外に脱走しようなんて考えないなんて侮り始めている。本当はもつと前からこんな感じだったのかもしれないけれど、私は残念ながら気づけなくて今まで至ってしまったみたい。本当に、迂闊。

だけど、後悔する前にまずはあの子に会いに行かなきゃ！

できるなら、何か食べるものをもって。あの調子じゃあきつとほとんど食事なんて取れてないはず。もしかしたら家族もいるかもしれないし……。そうだ、パンを持っていこう。大体の場合私のご飯は使用人が勝手に部屋のドアの前においてくれている。ならば、昼食と夕食の間に抜け出せば……。そうしよう。これが一番ばれにくい。

でも、二つ目の問題点はどうやって庭から抜け出すかよね。庭に出るまでは許可は要らない。だからパンをだいてもって行けば多分ばれない。そんなに近くに誰かが寄ってくることもないしね。ただ、両手が使えないからちよっときついかもしれない。

で、抜け出す方法だよね。それならばやっぱりいつものように植木のところを乗り越えて行く方法よね。でもパンを持ったままだとやっぱりきつ……。いいえ、根性。努力次第でなんとかなるはず！

とりあえず希望をもってやらないとね。お母さんが昔言ってたから。何事にも希望を持ちなさいって。

というわけで、まずは目の前にあるご飯のうちパン以外を食べちゃおう。ブリミルに感謝を捧げたりは勿論しない。だってパパは私の使える神様はブリミルじゃないって言うから。

さてと今日の献立は何かな？ えっとまずなんかの野菜のスープを一気にのんで。次にジャガイモの塩茹でをパクリと。やっぱり私この味大好き。そして、一応メインの野菜炒めを一気に口にかき込む。味なんてどうでもいい。とにかく食べきってしまうのが先決。

ふー。やっぱりこういう風に食べるとすぐに食べ終わっちゃう。きつとパンを食べなかったことも一つの原因なんだろうけど。だって、あのパン固いし大きいんだもん。私の両方の手の平の長さの二倍くらいはあるし、固さなんて火があんまり通ってないにんじんよりもずっと固いもの。そのくせ、よく粉が落ちて食べにくいし。けれど、こんなんでも食べられるってやっぱり幸せなんだよね。

よし、さっさと脱走しよう。そして、早く彼女にこれを届けなきゃ。

まずは昼ごはんの食器を全部廊下にだす。こうすればしばらく私の部屋の中なんてのぞかない。次に、庭にでなきゃね。出来るだけ音を立てないようにこっそりと。それもパンを持っているのが不自然じゃないような雰囲気。よし、周りにはだれもないしいける

かも。

で、問題は植木のところを乗り越えるところよね。油断しているとはいえあの人たちもなんだかんだで門番……ってえ？　なんで門の前に姿がないの？

もしかして——お・昼・休・憩？

否全員で休憩なんて冗談じゃないって。それっておかしいよね？
警備大丈夫？

だけど、心配する前に脱出よね。監視の目が一つ弱まったんだから喜ばなきゃ。それにいたとしてもどうせ葉巻ふかしてばかりで警備の仕事なんてほとんどまじめにやってないんだらうけど。

とりあえず私と向こう側の間にある私の身長よりちょっと低いくらいの高さにパンをおいちゃおう。そしてその扉に手をかけて飛び上がる。でも全然飛べない。どんなに手に力を入れても、足に力を入れても私の力のない手足では扉を飛び越えられない。

——やっぱり諦めようかな？　いいえ、駄目。またあの子にあって今度こそ何か食べ物をあげないと死んじゃう！

その時、ふわっと体が浮き上がる。そして気がついたら扉の上に立っていて……。やったあ！　と声にだして叫びたくなったけれど、この声で門番が戻ってきちゃったら大変だからさっさとパンを掴んで飛び降りる。

あととはとにかく走った。あの日のことを一生懸命思い出しながらあの畑まで急いで、急いで。

足が痛い、こんなに走ったのは初めてだったから。

肘が痛い。こんなに大切に物を持ったのが初めてだったから。

目が痛い。どの光景も私にとってはほとんど初めてで刺激が強いから。

頭が痛い。全てが私にとっての初めてで、その全てがとてつもなくすばらしいから！

刹那、何かに裸足のつま先があたる。痛つと感じる前に私の手はあの青白くて細い手に掴まれていた。強い力で引っ張られて転びかけていた体が安定を取り戻す。感謝を伝えるために顔を上げると……。

「アニエス様、お久しぶりです。また会いましたね」

目の前であの日の少女が優しく微笑んでいた。——下手な様付けは止めようよ。



「はあ……抜け出しちゃったんですね。それにしてもパンおいしいですね」

あの日の少女――レティンは私の話をパンをバリバリと音を立てながらかみついていている。本当は食べるというのが正しいんだけど、その様子をみるからに食べるというより噛み付くの方が近い気がする。細い肢体に似合わぬ噛付き具合だ。

とりあえずあの場所にいたら周りの人々に白い目で見られてしまうため彼女の家のところまで行くことにした。

まあ、レティンのお母さんが寝込んでいるから家にはは入れなかったけれども。だから、家の前の平たくなったところに腰をおろして話し込んでいるわけ。

最初はでははなんていって彼女は逃げようとしたんだけど、とっさに捕まえて「友達でしょ？」となみだ目で交渉し今にいてっっている。その間に「とんでもない」「止めてください」「私なんて……」と何回言われたことだろうか？

まあ、今はパンをバリバリと食べているんだだけでも。

「それにしても、本当にいいのですか？ このパン頂いてしまつて。私もらってばかりで心苦しいのですけど……」

「だから、敬語やめようよ。それにさっき私助けてもらったし、他

になにかあげた？」

そう私が聞くと彼女はさも驚いたように目を見開く。

「だって、友達だって言ってくれたり……」

「それはあげたんじゃないよー。友達になってくれたのはレティンでしょ？」

「でも……」

彼女は何かをいたげにしながらも言葉にならなかったのか、結局うつむいてしまう。細い首に対して頭がとても重そう。

やっぱりこういう姿を見たくないし、何かを貰うべきなのかな？でも、これ以上もらえるものなんてないし。私は友達になつてくれただけで嬉しいから。

——そうだ！

「ならば、私のことをレティンってよんで。もちろん呼び捨てで。私はレティンのことをアニエスって呼ぶから。ほらさ、友達っていつも心の中にいるんでしょ？ だから二人でいるときは相手が自分の名前を名乗るの。面白いでしょ？」

「……わかりました」

「敬語もやめて！」

「……わかった。これからはレティンって呼ぶ」

少し不満げに。だけど、楽しそうにアニエスは言う。

「よろしく、レティン」

挿話 昔の話 パン（後書き）

レティンとアニエスが仲良くなりました。イエーイ！

これで大分少女の日記でのレティンという言葉の意味がわかりやすくなっていればいいのですが。

誤字脱字そのたもろもありましたら指摘お願いいたします。

？
ありがとう

あの日から突如として雪が強くなった。彼女が大粒の涙を流したあの日から。お母さんはこれで僕の特訓がもっと楽しくできるって笑っていたけれど、本当は体温がすごく高くなっていることを知っている。体温が高くなって、ふとした瞬間に転びそうになって頭が痛そうに顔をゆがめて……。

正直見ていられなかった。でも、お母さんは僕が何かを手伝おうとするたびに「大丈夫」って笑ってそれが余計に僕をみじめにさせた。結局は何も出来ない僕。駄目な僕。

それでもレティンとは会い続けた。お母さんが眠っている間にこっそりと家を抜け出してあの森の開けたところへと。だって、レティンはお母さんとは別の意味で今にも壊れてしまいうさだから。

最近僕が魔法を見せても笑わなくなった。笑うっちゃ笑うんだけどどこか作ったような固い笑い方で見ていて辛い。彼女自身もそれに気づいているのかもっとうまく笑おうとするんだけど、それで余計に顔がゆがむんだ。笑うたびにどんどん、どんどんと。

でも、やっぱりどこか悲しそうで。つい、目が離せなくなってしまつて……。彼女はもう思ってるんだろう？ 自分のこと。そして僕のこと。

みんなぎりぎりで生きている。みんなぎりぎりまで悲しさとか自分のこととかこらえながら生きている。

だから誰もが幸せになれる世界なんてない。

みんな自分の中の幸せは違うけれど、それが全てうまくかみ合うような世界があるわけないんだ。だから、僕とお母さんは村の人たちと交わることが出来ないし巫女の彼女は村のために孤高の存在の振りをしなければならぬ。

でも、誰もがぎりぎりで生きないでもすむ世界はあるんだきつと。それは夢のような世界かもしれないけれど、誰かが誰かを倒しても幸せになることを望まなければ。誰もが幸せになれない、しかし誰もが不幸にならない世界はあるんだ。

尤もきつと幸せを望まないで生きることなんてだれもできないんだろうけれどね。だってそれは望みを捨てることだから。

何かを人が望む時、必ずそれは自分自身の幸せにつながっているとか何とかお父さんが昔言ってたとお母さんはいつかいていた。

それを聞いた時には僕はまだ幼くて意味の半分も理解できなかったけれど、今はなんとなくわかる。僕が村の人と関わるといふ望みによって僕は幸せになれる。そして、幸せになったとききつと別の誰かを輪から追い出そうとする。するとその人が不幸になる。

世界はそんなループ。大きな大きなたくさんのループが連結してねじれながらまわってる。途中ある一顧の輪が大きくのびたら、他

のループは小さくなって、何個かは壊れてしまう。途中ある一顧の輪が逆周りを始めたら全てが崩壊してしまう。

1は全で全が1に適っている。

これもまたお父さんが言っていたらしい言葉。実際に言ってたかは僕が聞いた覚えがないからよくわからないんだけど。こっちについてはまだ意味がわからない。そもそも適っているの意味がよくわからない。まあ、お母さんもわからないらしいんだけど。

だからさ、もしかしたらこの大雪だって、彼女曰く神様に使える巫女が巫女を辞めたがり涙を流し神にそむいたから神が怒っているのではないかとなって考えたりもするんだけど、僕は所詮蚊帳の外の人間だから詳しいことはわからないんだけどね。

彼女にそれを伝えて確認したりもしていないし。そんなこといったら彼女は自分を余計責めてしまうし、きっと頭のいい彼女ならば僕が言うまでもなくその可能性に気づいているだろうし。

それでどうして、彼女はさ変にまじめな顔をしているのだろうか。何時もよりずっと思いつめたような雰囲気おって。しかもその瞳は俯いているのではなく真っ直ぐと僕を見つめていて。

「聞いて欲しいことがあるの」

彼女は突如そう口を開いた。答えようとした瞬間からだの中を何らかの電気が走り回る。気がついたら僕は動けなくなってしまった。瞬き一つだってできやしない。一つ例えるならば体が凍り付いてしまったように。

「それは私についての話。私、もうちょっとで死んじやいそうだから」

あはっと変に無邪気な顔をして笑う。子どもっぽい彼女らしい昔の笑顔。今はもう浮かべられないようなそんな笑顔がうかんでいる。言っていることは諦めだというのに。どうして、未来に希望があるようなそんな子どもらしい笑顔が出来るのだろうか？

僕はわからない。

「せめてさ、シアリには覚えていて欲しいの。私のこと。」

私はね巫女として生まれたわけじゃないんだ。ただたんに私がたまたま村長の娘だったから、巫女となったわけですることといえれば神祇の舞を踊ることだけ。そしてね、私が巫女となる意味は村をまとめることにあったの。そして、もう一人の巫女いらなくなったの。

ここらへんの村を「ダングルテール」と人は一まとめにして呼ぶんだけどね、その中でもここはちよつと特殊な立ち居地だったの。他の村には海があつてそのお陰で豊かな生活が出来た。新教徒を名乗ってブリミルの加護を受けないでもいられるくらい」

ブリミル教……前にお母さんが言っていたことがあった気がする。この辺の国の信じる宗教とか。尤も中身は腐った人たちに利用されるだけの武器でしかないとか。お母さんはブリミル教と中が悪いとか。なんとか。

じゃあ、新教徒というのはブリミル教以外のことだろうか？　ブリミル教の人たちと仲が悪いのだろうか？　彼女への疑問は沢山あったけれど、とりあえず心の内に秘めておく。

「でもね、ここは何もなかった。ためしに新教徒を名乗ったけれど周りから弾圧されて苦しいばかりで、次第に人々は移住を始めたの。そんな時、お母様が現れた。

お母様はある日ふらっとこの村にやってきたらしくて、そして私たちを見て一言「何て可哀想」そう言ったらしいの。そして、その後お母様は自らを巫女と名乗り村をまとめ始めた。最初は親に捨てられた孤児たちに昔話を聞かせたらしい。私もその昔話は何度も聞いたよ。中々に面白いお話だった気がする。

それで、今の村の上のほうの人とも仲良くして、次第にみんなに敬われることになったの。だけど、そこで嫌なのは村長——お父さんよね。だから、巫女はね結婚したの。本当は結婚してはいけなかったけど特例でとかなんとかいいながら。

そして、私が生まれた。

そしたら、村は古い巫女が要らなくなった。最初は私に巫女というものを教えたり知識を与えたりしてくれたけれど、ある日もう教えることはなくなった。それで……彼女は失踪してしまったの。

犬ってね死期が近くなるとふとどこかに行ってしまうんだって。自分の飼い主に死ぬところを見せないために。お母様はまるで犬のようにふらっと失踪し死体が発見された。見つかった時もまだとても美しく若かったみたい」

彼女はもう一度微笑む。今度はどこか大人っぽく寂しそうに。彼女の言葉の中のお母様というのはきつとこういう人だったんだなと僕はなんとなく思った。

「その頃からねお父さんは怖くなったんだって。私が消えてしまうんじゃないかって。そして、私を閉じ込め始めた。外に出さなくなつた。

でも、ある日私のおねだりによって一日だけ外に出たのよ。その時、ある少女に出会ったの。その日にちよつと問題を起こしてしばらく外に出れなかったんだけどね。

そして、彼女と友達になった。たまに家を抜け出して彼女と一緒にパンを食べたりしたの。お互いにお互いの名前を交換して呼び合ってお互いに楽しく話したりもした。それも、長くは続かなくて突然彼女は

「幸せをありがとう」

って言ってつかまってしまったの。お父様の部下に。理由は私を変な風にそそのかしたから。必死に私は違うって叫んだけど、誰も聞いてくれなかった。

巫女が偉いんじゃない。先代の巫女がえらいんだって気づかされた瞬間だった気がする。

彼女はお父さんに聞くと処刑されたらしい。みんなの前でさらし者になって。

それから私は私でなくなったの。私と巫女は切り離されたの。

彼女は言ったわ。

「本当の友達ならばたとえ片方の命を失おうとも、片方の心の中で生きるでしょう」

と。真っ直ぐな瞳だね。その時私と心の中の彼女が切り離された。

本当は私って言うのはね私の心の中にいきる友達なの。口調とかは全部もとの私なんだけどね。そしてもう一人、本当の私というのが巫女」

少しこんがらがってきた。つまりは今目の前にいるレティンはレティンの友達で、もう一人レティンの心の中に誰かが住んでいて、それが彼女が言う巫女。

僕は何もわからない。

「わからないでしょ？ 大丈夫。わからないのが普通。ただ、ちょっと心に留めておいて欲しくなったの。

私はもう現れることができないとおもう。もう一度ここにはやってくるだろうけれど、それは私じゃなくて巫女。きっと私は記憶の中だけの存在になってしまおうと思うの。

——お父さんがそう望んでるから。

私はお父さんが大好き。その愛は全てに勝るの。どう私があがこうが私は絶対にお父さんに完全な意味で逆らえない。だから、その愛よりも別のことを優先しようとしている私は抗う前に消滅してしまう。

後は完全な巫女になるだけ」

彼女は何の恐怖もなさそうにもう一度笑いなおす。今度は何時もの作り笑いだけでも。

僕はわからない。何もわからない！

「ありがとう。忘れないでね。わがままだけど」

彼女はそう微笑むと雪の中に解けてゆく。ただ単に森からでようと走り始めただけなんだけれども、僕にはそれだけにはどうしても見えなかった。

？
ありがとう（後書き）

誤字脱字そのた辻褄が合わないことがありましたら教えてください

挿話 昔の話 アニエスとレティン

SIDE アニエス（元レティン）

「アーニーエースー！！　きたよ！」

明るい声がずっと向こうのほうからいきなり聞こえてくる。レティンだ。私は洗いのものをしていた手をとめ彼女のほうに手を振る。すると、彼女もまた私にてを振り返してくれた。

「久しぶり！　元気にしてた？」

レティンは満面の笑みを浮かべ私に聞く。私は一つこくりと無言で頷いた。すると、レティンは安心したように表情を崩す。やっぱり自分とは違ってかわいらしいなあと思ってしまう。

私なんていつも無愛想に答えることしか出来なくて、表情もあんまり豊かではないし。レティンは可愛いつて言ってくれるけれど、村の人たちはきっと私なんていうよそ者は家畜とおなじくらいにどうでもいいんだとおもう。いいえ、むしろいじめる対象。おいだす対象。

たまに私は化物にあこがれる。みんなに嫌われながらも森にこもって自給自足でくらしているあの人たちに。昔山菜とりに森に入っ

たときに見た彼等はすごくしあわせそうだった。村の人たちに嫌われながらも。

でも、私たちは森の中では生きられないから。人に混じっていないと食べ物にありつくことさえ出来ない。たとえどんなに嫌われても、どんなにいじめられても。

だから、レティンは救い。私の救い。彼女は私を私という人間として見てくれた。たまにパンとかを持ってきてくれた。見返りはいらないなんていいながら、友達になっていつも優しく微笑んでくれた。私は彼女といるとそのパワーを分けてもらうばかり。本当に感謝してもしたりない。

「そっか、よかったー」

ほら、この瞬間だって私は勇気を与えられてるんだよ。自分にだって心配してくれる友達がいるって。お母さんしかないわけではないんだって。

ただ、たまに中てられてしまう。必要以上にへこんでいる時とかに彼女に会うと苦しくて苦しくてたまらなくなってしてしまう。どうしてかはわからないけれど。

きつとずるいとか考えているような気がして自分が大嫌いになる。

今日だってそうだった。

「ねえ、パン食べる？」

「う、うん」

私は彼女から半分のパンをもらう。

前は全部もらっていたんだけど、悪いような気がして一緒に食べることにしたんだっけ。一緒に食べた方がおいしいからといって、実際にそうんだけどね。

ご飯は人と一緒に食べた方がおいしいってよく言うけれど、それは本当。一人で食べているとある瞬間自分が一人なんだって思い知らされて悲しくなる。自分は一人で周りには誰もいない。孤独。だけど、彼女の方がずっとそれを感じてきたんだろうけどね。一人の部屋でのご飯。誰も周りをとおらない。

「ふう、やっぱり二人で食べるとおいしいね」

「うん」

もっと気の利いたことをいいたいけれど、もともとあんまり喋ら

ないから思うように言葉をつむげない。

どうして彼女はこんな風にいろんなことを口に出すことが出来るのだろう？ 怖くないのかな。相手が自分と違う意見だった時に。

その時、しっかりとぶつかる覚悟はあるからとかなんとか答えたのなら私はとても驚くと思う。私は無理だから。ぶつかっても仲良くしていただける自信がないから。本当に弱い子ども。

「ねえ、少し仮定の話をしてもいい？」

「うん」

「もしもさ、私たちが離れ離れになっても友達でいられるかな？」

「え？」

私はレティンがそんな事を考えることもあるのか、と少し驚く。レティンは目の前のことしか見ないように生きているように私からは見える。

だから、そんな事を考えることもあるのかと少し驚いてしまった。レティンはそんな私の思いにきづいたのかあわてたように手を振り、「勿論仮定の話だよ！」と焦りながら言う。その様子はどっかの小動物を思わせて、かわいらしい……。

「本当の友達ならばたとえ片方の命を失おうとも、片方の心の中で生きると私は思う」

たまにはね、意見がぶつかってもいいと何故か思えてそう呟いてしまった。

なにか嫌そうな顔をしてるかもしれない！ と心配になって彼女の顔をみる。何時もはなんか悪い気がしてしつかりと見ることできない顔を。

すると、藍色のくりくりした瞳と目が合った。途端に何かしらの恐怖が私に飛びこんでくる。どうしてかはわからないけれど、嫌な予感がする。刹那、黒い影が私を――……。

蹴った。彼女にパンを貰っているとはいえまだまだ細い足で私は影を蹴る。今にも砕けそうな腕で殴る。もう一人来た。

今度は近くにタイミングよく落ちていた枝を振る。それをみると影は三つに増え算法から同時に攻撃してくる。一人はこぶしで、一人は足で、一人は平手で。私はこぶしを突き出した人の手の上にのりそいつの顔を蹴る。向こうは一步下がりを引込め私は地面に落ちそうになる。

まだまだ！ 私は枝を他の二人のそれぞれの頭に振り下ろす。二人も何故か一步下がりを私は着地する。

「どういふことなの？ 門番さん！」

レティンは叫んだ！ 黒い影に向かって。ただひたすらに叫ぶ！

私もその間にも飛び上がり一人の影の目を枝でつく。すると、はっとしたように他の二つの影も動く。私は最初に枝で目を着いた人を土台に飛び上がり、枝を捨てる。一つの影に向かって。その影は驚いたような顔をして避けようとしたが、耳の穴の方に枝の一部が入る。そして、私は左手を勢いよく仁王立ちしている影に突っ込む。

こんな時なのに、私は背後への意識が薄れていた。だから……。

「後ろお!!」

「え？ ——っあ！」

後ろに振りむくと同時におなかを殴られる。私の中身が圧迫されて息が苦しく……。かろうじて声はだせそうだけれども、それだけでしりもちをついているこの体勢から立ち上がることもできない。

レティンは私を心配そうに見つめる。声をだしたげに口を開いているが、その口から言葉は一向にもれない。

それにいい加減いらついたのか影は口を開いた。

「最後になんかいいてーことはあるか？ 聞いてやろうじゃねえか」

……貴方たちは何者でどうして攻撃したかが聞きたかったけれど、それに答えてくれるような気もしなかったしそれ以上に言いたいことが一つだけあって。

「レティン……。たくさんの幸せを、短い間だったけれどありがとう」

までで一番の微笑みをこめて。

——私の今

挿話 昔の話 アニエスとレティン（後書き）

過去の話はとりあえず終了です。

あと一話上げたら次の章にうつらせてもらいます。

誤字脱字などご意見ご感想などありましたら感想、またはメッセージに書いてくださると嬉しいです。

では

挿話 少女の日記

ある日

今日、わたしははじめて一人で外に出かけました
パパはわたしがお外に行くのを喜んでなかったけどわたしは楽しかったです

わたしは友達を作りました

友達は何ティンちゃんって言って×××××です

レティンちゃんは私の顔を見て青くなったり赤くなったりしてて面白かったです

でも家につれてったらパパに怒られました

ある日

最近は何走してもすぐに家に戻されてしまいます
早くそとであそびたいな。

ある日

レティンちゃんと今日は遊びました

レティンちゃんはわたしが知らないようなことをいっぱい知っています
すごいです

この村の外のこともしばい知っていました

レティンちゃんと、×××××したりもしました

わたしはパパの方が――

ある日

今日は外に出れませんでした
パパと二人でした
楽しかったです

ある日

今日はママが死んだ日でした

パパがわたしを抱きしめてくれました
久しぶりにパパと寝ました

あたたかったです

ある日

なんで

レティンちゃんどこ行っただの？

違う

レティンは

友達

なんで行っちゃうの？

やだやだやだやだやだ

嘘つかないで

そんなことないもん

パパ！　パパ！　パパ！　奪わないで

パパが一番だから

わたしはそんなじゃないよ

わたしは人だよ

友達が欲しい

ある日

パパはレティンちゃんは居ないって言った
わたしは××××××って言った

ある日

私は白い服以外を捨てられた

私は清くなきやいけない

私はわたしでない

私は神のもの

私は巫女

ある日

私は森の中で化物とその母を見た

わたしはその人たちの様子をこっそり影から見っていました

そしたら木がいきなり樽になってすごかったです

そしたら見つかりそうになって急いで逃げました

ある日

わたしは森のなかで迷ってしまいました。

困っていたら化物をみつけました。

こっそりとつけていたらすぐにばれて一緒に遊ぶことになりました

化物は意外に優しくかったです

ある日

今日は森でシアリと遊びました

とても優しくてまるで昔のようでした

魔法ってすごいって思いました

ある日

お父さんにシアリと会っていることがばれました

お父さんは何も言わずに赤いジュースをくれました

そのジュースをシアリに渡したら全て許すって言ってくれました

わたしはとても嬉しかったです

ある日

私は化物にジュースを渡した
何か取り返しのつかないことになる気がした
化物はありがとうと笑いながら言った

――――

「何かいてんだ!？」

「駄目、返して。私の日記」

少女の手からずりりと抜け落ちた日記は彼女のお父さんの手に渡る。そして、彼はその日記を読み終わると近くで燃えていた火に日記をくべた。

「私の思い出が……」

「お前に過去はいらない。お前は巫女だ。お前はこの村の救い主だ」

？ あの木、再び（前書き）

赤きその実はゆーがーいぶっしつうう！！

？ あの木、再び

幸せな日々というものはいつでも気付いたら終わっていて今もまたそうだったというだけの話と、言ってしまうえばそれまでだけど、ちょっと悲しいよね。

化物と呼ばれる僕でさえレティンとの日々はあまりにも楽しすぎて、終わりがきてしまうことがどこまでも残酷に思えた。

正直今日の前でおこっていることがよくわからない。だって目の前にいる子はレティンでありながらレティンにまるで見えないから、姿形は同じなのに中身はまるで全く違って、けれどお母さんが言っていた偏在の魔法ともまた違って。

双子みたいな、というのが一番正解に近いのかな？

「あなたに会いにこられるのは今日が最後になりました」

「えっと、どういうこと」

目の前のレティンもどきは今日僕に向かってはじめて言葉を話す。その言葉一つ一つに受ける印象もまったく違う。

いつものレティンが好奇心や楽しさを丸出しにしてしゃべるのなら、今のレティンは神がお告げを言うような神聖で話し掛けがたい

イメージが強い。

でもそんなことより重要なことがある。僕にもう会いにこれないって部分。いきなりすぎて何にもわかんないよ。

ただ、それは僕の知っているレティンが本気でそう思っているとは思えない。

「私はもうここにこない」

「なんで？」

「父がそう望まれた。私にここは相応しくないと」

やっぱりレティンでない。レティンは迷いや雑念がいつさいない清い声なんて出せない。……もしかしていつかレティンが言っていた巫女？ 自分は巫女だって何回も言っていたけれど、いつものレティンはどう見ても清潔とか美しいとかそんな風な言葉からはかけ離れていた。

もしかして、彼女の中に二人の人がいた？ 一人はレティン、何時もの彼女。そしてもう一人は巫女。今目の前にいるレティン。なんてね。こんなの現実を信じられない僕の妄想。だけど、僕が信じるのは自由だ。

それに、友達が欲しいんでしょ？

レティンはいつか言ってた。どんな時に言ってたかは忘れたけれどあの優しい少女の声で言っていた。

嘘だったのかもしれないけど。嘘とは思いたくないけれど。

「君は誰？　もしかして、巫女？」

僕はレティンとずっと仲良くしていたいから、さっきの言葉に頷けるわけない。やっぱり彼女は巫女なんだ。

そんなことを思っていると、彼女は首をこっと傾け、じーつとある一点を見つめ始める。いつかのように。感情を失ってしまったような虚ろな目。

そして、何か結論を得たのか僕の方をしっかりと、真っ直ぐで美しい目（僕なんてとるにたらない化物だからそんな目でみたら浄化してしまっただけでなくなってしまうよ）で見つめながら、言った。

「そう、私は巫女。この村の全てを救う巫女。神にささげられ、世の嘘と不浄を払いし者。世界を救いし尊き巫女」

僕の予測は当たったかは知らない。けれど、目の前にいるのはレティンではない。それは確実。僕は動揺してないような冷静な顔を無理やり作って聞く。

「ならばいかにして行う？」

僕は彼女に合わせるように少し難しいようななんともいえないよ

うな喋り方で言ってみる。これ、案外難しい。

ちょっと難しい質問だったかなと思ったけれど、彼女は当たり前だというように綺麗な声で言い放つ。微動ださえない。

「私の清き言葉により世界の穢れはおち、私の願いにより世界は救われるだろう」

感情、そんなものはこれっきしも感じない。少女ではもはやない。これは僕異常の化物だ。自分を心の其処から信頼し、けれど自分の中は実は空。それに気づきながらもなお信頼していけるなんてそれは人間のやることではない。彼女は神になりきれなかった化物だ。

その時、僕は彼女が手になにか小さな箱のようなものを持っているのに気づいた。赤いかわいらしい箱。何が入っているのだろうか？

「その箱のことがきになるのか？　これは貴方への贈り物だ」

手切れ金？　……彼女はそんな事を言っていない。あくまでこれは贈り物。彼女の好意は全く見受けられないけど。

「なにが入っているのか？」

「貴方の母を癒すもの」

……何かの实のジュースだろう。でも、そんな高いものを何故……
（ジュースの生成はこの世界では難しいとされている）。

正直とてもありがたい。

ちょうどお母さんは少し悪性の風邪にかかっていて、その制で調子がわるい。心配することしか僕にはできなくてとてももどかしかった。もしかしたら、このままほうっておいたら死んでしまうような気がして。

「どうしてそんなものをくれるのかい？」

「駄目！」

いきなり、口調や雰囲気が何時ものレティンに戻る。何かのつき物が落ちたような感じ。けれど、それは一瞬でまたもとの無機質な口調に戻る。

「あなたとの思い出のためだ」

言っていることと言い方、雰囲気がまるでかみ合っていない。本当に気味が悪い。何もかもが。

それでも、僕はそれを受け取らなければならぬし彼女はのと元に戻ることはない、それはあくまでも勘だけど、まるで本当に起こることのように思えた。



そのことが終わると、彼女は役目を終えたように颯爽とかえって行ってしまった。そして、僕は今その成り行き上受け取ってしまったジューズを持って帰っている。やっぱ重い。

レビテーションを使ってもいいと思うけど、途中で精神力がキレて地面にたたきつけてはいけない。だから、僕はゆっくり確実にジューズを運ぶ。

そんな時、この前目の前を通ったあの赤い実をつける木が視界の端に映った。

《あ、この前の少年。元気にしてた?》

この前って大分前だった気がするんだけど、きっと僕とこの木の間にはずっと価値観の差があるしだからそこは気にしないでおう。

「何日かおきにここを通っていたんだから、君が一番僕が元気なことを知っているんじゃない?」

《いいえ、そんなことないよ。私がこの時間を短く感じる理由は私

が長くおきていられないから。寒い世界で長く起きていられるわけないでしょ?》

えっと、超自然（自然を裕に越えた）植物の君に言われても説得力が欠片もないよ。

《超自然植物ってどういう意味？ あ、こんなテレパシーみたいな方法で話せるってこと？

そんなの簡単だよ。精霊なんだから。まあそんなことはどうでもいい。僕は怪しい気配を察知すると起きる。最初に貴方に話しかけたときのようにね。

まあ、それで警戒はとけたからしばらくの間私はゆっくりと寝れたんだけど……あなたがもっているそのジュースのせいでおきてしまったんだ》

あ、これやっぱり君の実をもぎ取って作ったジュースなの？ よかった。本当はちよつと変な毒物とか入っているような気がしてびくびくしていたんだけど。

《安心しないでね。これは毒物》

「え?」

つい気の抜けた声を出してしまったけど、君の実が毒物ってどう
いうこと？

《最初に会ったときの忠告覚えてる？》

えっと、五個以上連続でこの実を食べないだっけ？

《そう。どうして食べていけないかっと言うとその実を五つ以上食
べるとその実の回復力が人間のもともとの生命力を傷つけるからだ
よ》

けれど、五個以上食べなければ大丈夫なんじゃ……。と思うとさ
わさわわという音と共に風が僕と木の間を吹き抜けてゆく。

そのちよつと強めの勢いで木の実が何個か地面に落ちた……。なん
てことはない。この木と話した時期を最後に実は枯れて落ち、今は
もうついていない。

《これで察しがつかない？ 嗚呼、そういえば君の頭はどこかのお
じいさん、この森一番の大樹にして年寄りの頭でっかちモミジーさ
ん並みに固いんだっけ？》

モミジーさんって誰だろう。それにしても、木にもコミュニケーション

シヨンとかつてあるんだね。

《コミュニケーション？ なにそれ》

コミュニケーションってあれどういう意味だっけ？　　というかそんな言葉どうして知ってるんだらう。

《まあ、そんなことはどうでもいいでしょ？　　もう貴方と話していると話が脱線してしょうがない。要するに五つというのは濃度の問題》

濃度……詳しい意味は覚えてないけどどこかで聞いた覚えがあるようなないような。

《ああ、今の人は知らないのよね。えっと濃度とは水とかに何か食べ物とかを薄めた時に水一粒にどれくらいの食べ物の粉末が入っているかとか……まあ説明は難しいんだけどそのジュースが味が濃いジュースだったらそれを飲んだものは狂ってしまうっていう話。量は関係ない。》

あ、でも実は必ず狂うわけでもないんだけどね》

へえー、よくわかんないや。けど、また一応意味がある情報をあ

りがとう。それにしても、前回と大分雰囲気が変わるような……。

前にあったのが結構前だからそんなのよく覚えてないって言ってしまえばよく覚えてないんだけど。

《き、気のせいだよ。じゃあ、僕はまた眠るね。――そして最後に》

木はいきなり雰囲気が変わった。今まではまるで茶番だったようなそんな感じがする。

《この森を燃やすものを僕は許さない。それが誰であろうと》

……ぞくり、嫌な予感がする。僕はこの森を燃やすことなんてできないってわかっているのに、僕はそのことを不安に感じてしまう。それこそが、何かこの後におきる証拠みたいでとても嫌だった。

そのあとは、いつもと同じように家に帰って課題が全然終わってなかったからお母さんにしかれて、けれどお母さんには元気がやっばりなくて。風邪って怖い。

そこで、僕は忠告を覚えていた上でお母さんにあのジュースを渡した。

「これをのめばお母さんの病氣も治るよ」

と、言葉をそえて。

どうやって手に入れたのでも言うように目を見開いたけれど、僕が何も語らなかつたからお母さんも何も語らずに小さな木でできたコップ（もうぼろぼろで今にも中のものが漏れ出して砕けてしまいそう）を取り出し、震えた手つきでジュースをコップに注いでいる。

きつと、寒さで震えているんだ。こんなボロや、風なんて防げるわけではない。僕だってやっぱ寒い。そろそろ雪も収まってきたけれど寒いのは変わらない。

そういえばお母さんに一度聞いたことあったっけ？ 煉金で家は作れないかって。そしたら確か勿論作れるって自信満々にいつてから、でも私たちにはこれで充分。寒かったならお互いに暖めあえばいつて笑ってくれた。ひまわりのような笑顔。

けど、今は……風邪にうちひがれ寒さにてを震わせ笑顔もしわがれて疲れたような背中。僕は何か出来なかつたかとふと思いつつ。けれど、そんなのもう遅くってそれに僕はあまりにも無力で。

ちよつとなきそう。でも、ないちゃ駄目。ないたらお母さんは僕

にどうしたのって聞いて、僕がいくら無言でも無理して撫でてくれるから。笑ってもらえるようにいろいろと張り切っちゃうから。

なんでこんなにも昔のお母さんのことばかり考えているんだろう？　まるで走馬灯のようだ。もう少しでばくとお母さんが死んでしまうみたいじゃないか。

そんなわけがないのに、お母さんだってこのジュースで風邪を治して元気になって僕だって元気に生きて、二人で笑って村の人なんかどうでも良くなるくらいに幸せになってそれでそれで……。

わかってるよ。このジュースが危険で、そのせいでお母さんが狂ってしまうかもしれないこと。そしたら僕は本当に化物になってしまうかもしれないこと。お互いに幸せになれなくなってしまったかもしれないこと。

それが本当はものすごく怖くてこんな風に昔のことばかりに思いをはせてる。そんなのもう誰かに言われなくてもわかっていたし、再確認する必要もなかった。

けどね、それをやっぱり確認できないと不安。もっと違う、そう例えばもう既にことは実は起こっていてそれを後悔するようにそう思っていたとしても恐るべき程につじつまは合ってしまうから。そんなはずは本当はないのにな。

ほら、目の前にお母さんはいるしそのお母さんはジュースを飲む

うとしているし、別人じゃない。そんなはずは絶対にないんだ。

「ありがとう」

ほら、優しく笑いながらそう言ってくれる人は僕の母親以外にはいないでしょ？

お母さんはなにも怪しむことなくそのジュースを飲んだ。僕はただ信じてお母さんを見ていた。

？ あの木、再び（後書き）

誤字脱字設定間違い等連絡いただけると嬉しいです。

さて、調子に乗った私は調子にのってみることに……。読む必要は無いですよー。

幻「というわけでー、とうじょーじんぶつにインタビュー。データとか特に作ってないからこれを登場人物紹介の代用にとって痛っ」

？「面倒くさがり止め、成敗してあげるわ」

幻「ちょっと今回はあなたの出番は。それにちゃんと一言も喋ってない貴方を最初にもってくるのはたたたた！」

？「ふあー、キャラ決まらないからといって本編に示度出してくれなかった貴方がわるいのよ」

幻「今回出てるじゃないですか！」

？「地の文だけじゃない！　なんか喋らせなさいよ」

幻「水の樽の回と魔法の回！」

？「あんなのでたうちに入らないわ。っていうか名前もどうやら決めてないみたいね」

幻「すみません！」（以下、幻想夢は正座にて）

？「あれ、本当だったわけ。ちょっとその扱いひどいじゃない。地の文でさえ登場しなかったあの子にはちゃんと名前があるのに私に名前がないなんて。嫌がらせね、私が嫌いなものね」

幻「そんなことはー、はうツンデレー」

？「余計なこと言っていないで私をちゃんと登場させなさい」

幻「う、あ、はい。でも、ちゃんと登場させるか狂っているかどちらにしてもあなたはそろそろ……」

？「るさいわね。冷徹の女はそんなんで死なないわよ」

幻「はい……、そろそろ普通に紹介にうつってもいいですか？」

？「はあ？ その前に説教よ。ちょっとねーあなた（以下略）」

というわけで、？さんの正体はわかったでしょうか。あー、かきたかったけれどタイミングがはかれず描写しかなかった？さん。キヤラ紹介のはずなのに怒られっぱなしな私と名前のない彼女。いろんな意味ですみません。

まあ、そんな調子でこのコーナー。続く……わけないですね。

では

※なお、彼女に名前がつく予定は……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい（ry

？ 眠りの森の美女のように

僕はなにがおこったかよくわからなかった。お母さんはただそれを飲み終えたらいきなり倒れて眠りこけて、僕はそれをただ呆然と見ていることしかできなくて。お母さんは生きているのか死んでいるのか。もうそれもわからなくて。

僕はただ、大丈夫って心の中で繰り返す。目の前のお母さんは人間のぬくもりがして、死んでいるわけではなく僕の真正正銘のお母さんで、狂うわけもなくって。そう思いこむ。事実なんて真実なんて知らない。願えばそれは真実となる。そう思い込むことしか僕には出来ない。

呪文のように頭の中で何十回も大丈夫っていう言葉をくりかえして、繰り返し繰り返すほど不安になる。けれど、いつしか僕も疲れて……。

気づいたら朝だった。ちょっとした隙間から木漏れ日がさす。と同時に何時ものように心を貫くような冷たさが体に戻ってくる。何回もいつてるけど、雪がなくなってもやっぱり寒い。木漏れ日なんて当てにならない。隣を見るとお母さんが寝ていた。昨日と同じ優しい眠っている顔。銀髪の髪は木漏れ日で輝き、頬をつたっていた涙を光らせる。なんで泣いていたんだろう……。

何故かキスをすれば起きるようなきがしたけど、さすがにそれは

無理。お母さん相手にキスなんて。

だから、僕は何時もお母さんがするように料理を作ることにした。まず火をつてそっか、お母さんは火を起こすのはたまにだっけ。火の魔法が使えないから。けれど、温かいものを食べなきゃ凍えちゃう。どうやるんだろう……とりあえず何時も使っているぼろぼろの鍋に秋のうちに摘み取ったハシバミ草と水を少し入れて……このあとがわからないよ。いつもお母さんは調味料っていつて味をつけるものを入れていたけれど何処にしまっているんだろう？

そう思うとこの家についても知らないことばっか。生きることについてでもご飯の作り方さえ知らない。でも、僕は一人で生きていけなければならぬ気がする。やっぱり、これも予感。不確定な予感ばかり。けれど、外れる気がしないから注意するに越したことはない。

僕は何とか調味料と書かれた入れ物を発見した。中身は白い粉。ちよつとだけなめてみると辛い味がした。そして、また隣にも白い粉があった。こっちは甘い味がする。とりあえず両方とも鍋の中に火とつまみいれてみた。

さて、これからどうしようか。

肉でもいいれる？　けれど、肉は夜だけ。どんなに特別な日でも夜しか食べてはいけない。じゃあ、木の実を入れる？　この時期には

もう木の実なんてあるはずない。しょうがない、これでいいか。つと、あたたかくなきゃ駄目じゃないか。……魔法を使うしかない？
けれど、温かくする魔法なんて。

とりあえず僕は腰らへんに吊るしておいた杖をもって鍋を見つめる。なにか、魔法を……。

その時なにか電波が走って行ったような気がした。そして、気づいたらまたいつかのように言葉が先に出ていた。

「ホット、このものを温めてください」

すると、途端に鍋にあぶくが浮かび始める。さっきから溶けなかった二種類の調味料もやがてみるみるうちになくなる。貯蔵してある細かくしたハシバミもしなしなとなっていった。いつも、お母さんが作っているのと同じ奴。とおもったらハシバミは茶色くなりはじめた。なんか嫌な予感がしたから僕は魔法をとめようとする。……ふう、とまった。さて、鍋をのぞいてみると正直おいしくなさそう。けれど、これを食べなかったら朝ごはんがなくなってしまうからしょうがない。

「お母さん、おきて」

いつもお母さんがするように家に向って叫ぶ。これでおきてきて

くれるからものすごく不安だったけれど、予想を裏切るようにお母さんは明るくできてきた。完全に風邪が治ったみたい。安心。

「元氣になった？」

「ええ、お陰様で。もう楽しくて楽しくて元氣で元氣でしょうがないわ。今にも魔法が使えるそう」

「魔法はつかわないで。疲れるんでしょ？」

「そうね、今日はとりあえずゆっくりしてるわ。それにしてもその鍋の中身は何？」

「えっと、朝ごはん？」

「……今度から料理も教えてあげるから覚悟してなさい」

やっぱり失敗したみたい。でも、お母さんは元氣になっていたことでもう胸がいっぱい。そういたくなくなったけれどそういうことを言うのが無性にはずかしかったから、その言葉は僕の心の中にとどめておくことにした。



私はこっそりと彼の姿を目で追っていた。木の陰から、お父様に彼と母親のことを報告するために。

私はずっと狂った母親に殺されている彼を想像していた。けれど、実際母親はくるわなかった。木の実の毒に打ち勝った。

……。
これは私のようなものでしか起こせないような奇跡。それなのに

私は神の分身であるのにどうして化物や冷血の女が同等でなければいけない。そんなの許せるはずなんてない。



そのころから殺人事件がおこり始めた。夜な夜な出かけると殺されるという噂。森の奥に暮らす化物に巫女。そして、村長。

村はそろそろ臨界点を迎えている。厄介ごとをかかえこめる限度の……。

？ 眠りの森の美女のように（後書き）

誤字脱字などそのたもろもろ指摘お願いいたします。

挿話　ちであそぼう　狂人によるワルツ

《side　???》

いつの話だったかはわからない。けれど、私は昔々に人を殺した。何十人も何百人も。

私はお掃除だって言い張ったことをよく覚えている。自らの命に天秤を傾けた奴等への、金への執着が強すぎた奴等へのお掃除だつて。夜な夜な宙そらを舞い、貴族の家にこっそりと忍び込みその家の当主、時には子どもの命を奪った。

『血だらけのメアリー』なんて呼ばれたりもしたんだっけ？　たまたま近くで目撃された、空飛ぶ赤い女性の影から。

私の正義では奴等は殺されるしか道がなく、私はいつまでも鎌をおろさない死神の代行者になったと思っていた。

——正直思上がった話だ。私などという取るに足らない人間が死神……神の代行者だなんて。嘘っぽくってありえない。

でも、そのころの私は本気で信じてた。自分が本物の正義だと。本当に馬鹿らしいかわいそうな妄想話。そんな頃に私はあの人に捕まった。そして——……理由はないけれど恋に落ちたんだ。

何故恋に落ちたかはあえて語らない。けれど、私は電撃的にその人に運命を感じてしまった。その後、彼は私となつてつかまつた。赤い女性が空を飛んでいたのは気のせいとされて、彼は全くたつた一人も人を殺していないのに、私の代わりとなり処刑された。

その時、私は解放されたのだ。彼が苦しみながら処刑されたのに私だけ……。

誓つたはずなのに。もう誰も殺さないと。

あの日風邪が治ったら急に体があの忘れていた、忘れてしまいたかつた感覚を思い出した。正義を振るう楽しさ、人が死んでゆく面白さ。

あれは中毒。一人殺すと二人目からは痛くなくなる。何人も殺してしまえばもう、なんでも良くなってしまい頭がやられてしまう。

私はもうこんなことを起こさないために誰も嫌わないと決めたのに。誰かを嫌うことが、自分が正義だと言い張ることが私がメアリ―になつてしまった原因だと思って、どんなにつらくても誰かを嫌わないように決めた。それなのに、自分たちを迫害した奴等を殺すのがあまりにも楽しくて楽しくて楽しくて楽しくて。

[illegible]

心の其処から笑いたくなる。私に殺されてゆく人を見ると、どうしてこんな私なんかに殺されているのか嘲りたくなる。何て楽しい愉快、愉快！

そんな時、私は思い出してしまった。ある白い服をまとった少女とシアリが遊んでいたのを。幸せそうに、私と一緒にいるときより幸せそうに。

憎い――……。○

思ってしまった。そう思はないではいられなかった。憎い、私のシアリをとった奴。私の、私の。

誰かを嫌うことは止めたのに。

結果、私はナイフを持って家をでて、村長の家に向かっている。あんな上質な服をもてるのは村で噂の巫女くらいだと思って。こっそりと、こっそりと入ればどんなに警戒していても入れてしまうものである。特に、大きな家は。

そして――……。

《side 巫女、レティン》

どうして、どうして、どうして？

私は普通に生きていたいのに
私は普通に遊びたいのに

人は私を巫女というけど
本当はただの一人の少女

巫女？

そんな清く美しい人になんてなれるわけない

私はただの愚かな人間

私はある日
化物と仲良くなった

巫女と化物の友情なんて
本当におかしく異常だわ
そんなの信じた巫女も化物も
それに気づかないお父様も

だけどある日神は怒った
私の夢に――嘘だ……お父様が――現れて化物と仲良くしている
のを怒ったの

だから私はさよならしたの
死んでしまえとジューズ渡——本当は嫌だったの！ 友達を裏切
りたくない！——して

そしたら彼の母親とち狂い
私を殺しにきたのです……

「えっと、冷血の女？」

私は闇に向かって問う。すると、闇からは一つ静かな息の音が聞
こえてきた。肯定だ。

「じゃあ、貴方が連続殺人犯？」

私は闇に向かって問う。すると、闇からは一つ静かな息の音がき
こえてきた。肯定だ。

「そして、私を殺しにきたの？」

私は闇にむ……。

影がその時私をおおう。黒く黒い影に当たるつきの光は一瞬銀色
のまばゆいばかりの光を周りに弾き飛ばした。
私は殺される。

そう第六感……本能が私にさざめきかける。

後悔はない？

——ない

死んでもいい？

——ええ

世界とさよならする時間は？

——いない

鮮血が舞う。私という巫女の名を借りた化物からも美しい血は舞い散るんだなど、そんな事を思ってしまった……。

「嫌だあぁっあ！！」

嫌だよ、嫌だよ。私は嫌だ。こんな終り方絶対に嫌、嫌、嫌！

私は形振りかまわず暴れまわる。すると冷血の女にどんどん血がまわりついていった。向こうは何も気にするわけもないんだけど、それでも私はただで死んだわけではないっていう痕跡を、自分という存在の痕跡を残したかった。

結果的には血が足りなくなって意識が薄れていったけれど、後悔ばかりで死にたくないけれど——……。。

挿話　ちであそぼう　狂人によるワルツ（後書き）

……カオスですみません。

指摘を受けたはずなのに、どう見ても悪化している……。

1. 3 1

話を追加しました。

？ ダイブ——… (前書き)

あと、赤髪ってキュルケもいるし大丈夫なんじゃないって思うかも
しれませんが、こっちは血のような赤黒い感じなんで正直想像でも
あんま気味のいい色ではありません。では、本編へどうぞ。

? ダイブ――……

僕は何も悪くないってことは僕が一番知っている。現に僕は何も悪いことはしていないし、実際に証拠があるわけでもない。

でも、僕はお母さんが悪くないってことは知らない。信じているけど、真実はわからない。だから……

目の前に両手を血で汚したお母さんがいても無実を完全に信じることは不可能だ。

信じたいよ。たしかに、僕はお母さんが大好きだったから信じた。けれど、こうなってしまったお母さんを完璧に信じることはできない。どんなに信じようとしたってお母さんが心のどこかで悪いような気がしてしまう。心のどこかでついでという気持ちになってしまう。

お母さんは結局狂いに勝てなかった。それだけなのかもしれない。

僕はある時木にリスクを教えられた。それでも、僕はお母さんが今助かることを優先してしまって、その結果がこれ。今すぐに狂ってしまふなんて木はいつていなかった。全ては僕の考えがたりなかったせい。村の人が何人も死んだのも、きっとお母さんのせいだろう。僕は今まで気づかなかったけど、お母さんが全員殺したってわ

からなくもない。

結局証拠は絶対なのかもしれない。

で、ここからが問題。

僕はこのあとどうすればいいのか？　僕は自分のまだ元気な足と、手に何故か持っていた杖、そして血で汚れたお母さんの両手。

もう、ここからは何も考えなくていい。深いことなんて、お母さんのことなんて考えなくていい、僕は自分の生存本能に身をまかせてもいい。ただ、生き抜くことを考えればいい。

要するに、僕はお母さんを家においてどこかに逃げ出すってこと。けれど、できなかった。

それは僕の感情がそれを拒んだのではなく、現実がそれを許さなかったってこと。家を村の人たちに囲まれていた。

「でてけ！　化物は出てけ」

「我等の巫女を殺した蛮人め！」

「死ね、我等を汚した者よ！」

さっきまで目の真のことに精一杯で聞こえてこなかった声が周りから聞こえてくる。扉の隙間から外が見えるけれど、そこから見える辺り一帯に居座る人、人、人。

それにしても、巫女が死んだってレティンが殺されたってこと？
（否レティンが巫女だなんてことは……）そんな、どうして。レティンは何も悪くなかった。確かに僕にあの魔のジュースを渡しただろうけれど、でもレティン自身は自分のお父さんを愛していて。それだけのために巫女とまでなって……。

目から涙が零れ落ちそうになる。そして、ふと気づく事実。お母さんの血まみれの両手。

——お母さんが？ まさか……。

否定は出来ないし、もしかしたらあの赤い実のジュースで狂っていただけかもしれない。それでもお母さんがレティンを殺したのならば——許せないかな。と、シリアスなことを考えていてもしょうがない。そろそろ村の人たちが回りに集まって本格的な処刑をしようとしているんだから、速く逃げなきゃ。

今はまだ僕たちに近づくのが怖いとか、あの家の周囲には仕掛けがあるとかの噂によって誰もこっちの領域に踏み込めないけれど、そろそろこれが壊れるかもしれない。やりだったら向こうに立ち入らなくていいし、あんなボロやなら大丈夫とかいって投げってくる奴がいるかもしれないし。

まあもしかしたら……否もしかしなくても僕たちがメイジっていることには気づいているのだろうけれど。

その時、背後からふあああーっという大きな欠伸が聞こえた。振り返るとお母さんがやっと目覚めたみたい。そして、その次の瞬間その欠伸は悲鳴に変わった。

「ぎゃあつあああ」

耳を劈くような悲鳴、理由は多分自分の手が血まみれなことに気づいて、しかもその血が固まっているせいでとれなくなっているから。けれど、それって自分が何かを殺したりしてしまった自覚がないっていうことだね？ やっぱり狂って——……。

「お母さん大丈夫？ 外、囲まれちゃったみたい」
「みたいね……。それより、この血に覚えある？」

僕は首を左右に振りながら、さすが冷血の女。この期に及んで悲鳴一つで終了、なんて思ってた。ついでに、口に出したら……仮定するのも恐ろしい。

「だよね……。さて、私たちも殺され時か。いいえ、殺される気なんてあるわけないんだけどね」
「はい？」

「だって、外囲まれたんでしょ？　なら、無理無理。正攻法では絶対無理」

「軽っ！」

ちよっとまって、お母さん。そ、それは軽すぎるよ。外囲まれてそれしつてすぐにあきらめているところとかなんか悲しい。しかも、覚えなみたいだし……。僕が信じる信じないの前に、その血は偽者のような気がしてきた。狂ってもお母さんが人殺しのような感じしないし。

それに、今の悲鳴で外の人固まっているから僕は逃げやすいっちゃ逃げやすい。けれどさあ……。狂ってもいないお母さんをさあ、追いて逃げるほど僕は人間腐って……。

「まあ、さつさと逃げて。一つだけすごく危険だけど二人とも生きていられる可能性があるのだから。でも、シアリが逃げてくれないと私たち二人で離れ離れになったとしても生き延びられない」

「……納得できるわけ」

「そうよね。だから……」

そう言ってお母さんは何処からか分厚い本を取り出す。昔から持っていたのかページは全て茶色くなってしまっている。それに、古い本特有のあのにおいとほこりがあたりにたちこめた。

「これは私の家に伝わっていた魔法の本よ。ありとあらゆる魔法がのっついて……。このP84に書いてある呪文を唱えて頂戴。そして、この村を滅ぼしている間に私は逃げる。水や土は壊滅とかに向いて

ないから」

お母さんは何の根拠もないのに自信に満ち溢れた顔で言う。信じなさい、ただ純粹に。そういわれているような気がしてしまつて、気づいたら一つこくりと頷いていた。

「シアリ、貴方はいいい子ね」

「……うれしくないよ」

「わかつているよ。ただね……元氣になろうよ。そうしないとみんな生き延びれない」

「じゃあさ、名前を教えてよ。お母さんの名前！」

そう僕が言うとお母さんは困つたように顔を曇らせた。でも、それも一瞬のこと。次の瞬間にはいつものような優しい笑顔で言った。

「家名は……知らないわ。私の名前、よく覚えときなさい。ついでに未来に娘が出来たらぜったいにその名前をつけること。名前は……」

バコオーーーーン！！！！

ついに攻撃が来た。僕はとっさに扉から遠ざかり、倒れてくる扉からなんとか避ける。お母さんの名前を残念ながら聞きそびれてしまった。けれど、もうしょうがない。戦闘態勢に入ってしまったお母さんに近づきたくなかった。薄情に思えるかもしれないけど、これが精一杯の心遣いな気がする。僕が近くにいると暴れられないってたまに愚痴ってたから。

お母さんはほぼ確実に死ぬことがわかって逃げなくてなんってひどいって思うかもしれないけれど、お母さんの最後の頼みのような気がしたから……ね。

でもさ、これからどうしろって言うんだろうね？　僕に伝なんてルマちゃんくらいしかないのに。

とにかく今は逃げよう。むかうは森をこえた向こう。希望がまつてるか絶望が待っているか僕は知らないけれど、そこしか逃げ場がない。とにかく僕は森に向かって力いっぱい走り始める。刹那僕の頬を何かがかすった。トマトだ。次に僕のふくらはぎ、その次は肩。適当に投げられるトマト。何故トマトかは知らないけれどトマト。そして次には今度は水のような……油！？　一体何処からそんな高価なものを。とにかくこのまま火でもつけられたら目も当てられない。っていうか、お母さんの方に皆さん専念してよ。もうそろそろ森の中だよ！　僕は逃がしてもらったのに、これで死んだら……。

その時、魔法の本が手から零れ落ちる。そして、開かれたのは何故かちょうどP84。これは、唱えろと神様にでも言われているのか？　とにかく、時間がない。唱えるしかないよ！

僕は左手に本、右手に杖を構えてすばやく、出来るだけすばやく詠唱を始める。すると、ご都合主義なのかなんなのか周りの人たちの動きがぴたっと止まった。詠唱にひきつけられるように、聞きほれるように……。

すばやく、早くしないと魔法がとけてしまう……そんな気がしな

がらも何故かこれ以上すばやく読む気にはなれなかった。

さて、早くイメージしなきゃ。これは何の呪文？ ……炎系列っぽいなあ。ならどんな魔法？

——火の鳥が火の粉を撒き散らし空を飛ぶような——！

「ファイヤーバード——！」

その瞬間僕の詠唱による魔法はとけ、みんな動き始める。けれど、それと同時に火の鳥の舞わせる火の粉によってまた一人、また一人と燃え尽きてゆく。

僕はただそれを見つめながら木に燃え移らないようにと心の其処から願っていた。だって、あの木に約束させられたから。

ゆっくりと幻想のような火の鳥は舞う。空を美しい紅蓮でそめながら。

その時、緊張の糸がプツリと途切れる。と、同時に足が何故か池に引き寄せられる。疲れているはずなのにそれは雲を歩くようなふわふわとした感じで……。

気がついたら僕は池に飛び込んでいた——。

？　ダイブ——……（後書き）

とりあえず、色々修正や挿入で長くなってしまいました。が赤い髪の毛は一端終了です。

そして、？と？が統合されて、新しい？と？と？が統合されて新しい？と挿話があるので、意味がわからない。というか話とんでいてちよとよくわかんないなんて思っている方は読んでくれれば嬉しいです。

あと、これからも挿話などは増やす予定なので暇だったら明日も除いてくださいな。普通に未来への更新はしばらくとまるかもしれないので。

誤字脱字などありましたら報告よろしくお願いいたします。

では

次回予告(?)とキャラしょーかい(その2)そして後日談(前書き)

またまたキャラしょー

しかし、それだけではもったいないので次回予告なども一緒に(?)やるつもりです。

あと、?と挿話を追加しましたので暇だったのなら昨日投稿したものと一緒に見てくださると嬉しいです。あと、一個挿話を編集またはupするつもりなので、そちらも明日見ていただければ嬉しいです。(多分それをupした後に次の章のこともupすると思いますが)それにしてもこの修正作業の仮定でストックが減ってしまった!!

次回予告（？）とキャラしょーかい（その2）そして後日談

〔後日談〕

やっと、やっと外に出れた。お母さんに会える！ 私はそう心の中で叫びながら天井に着いた思い扉を開けた。最初は中々開かなかったけれど、強い力を加えたら簡単に開いてしまった。やっぱり鍵っていうのはすごい。

けれど、外には自分が期待したような光景はなかった。なぜなら……。

「何故！」

辺りは一面森。そして、森の端の方には火の手が上がっていて……。火が燃えているのはきつと村の中。私たちの村。其処にはレインやお母様もいるんだ。

そんな時ふと、背後から気配を感じる。嫌な予感がしてゆっくりとふりかえって見ると一人の男性がいた。年齢は二十歳くらい。顔は真っ青でこの世の終わりを見たような感じだ。私のことなんて目に入っていない。

「なんということだ。何故私はこんなことをして心が痛まなかったのだろう」

そう呟くとひざからかくんと力が抜けたように崩れ落ちる。そして、ようやく私の姿に気がついたのか目を見開く。

「まだ、生き残りがいたのか……。名前は、名前はなんというのか？」

その青白い顔の男性は私の顔を見るや否やそう聞いてきた。私は答えない理由がないし、ただなんとなく名乗ってみたくなくて「アニエス」と小さな声で呟いた。すると、彼はそうかそうかといいなから優しく私の頭を撫でて一つの袋をくれた。

古びた巾着袋。何かがじりじり言うような音が聞こえてくる。

「しばらくはこれで生きていきなさい。そして、復讐なんて考えないで生きなさい」

そういうと青白い顔で優しく微笑んで見せてくれた。私は意味がよくわからなかったけれどとりあえずその巾着袋を受け取り一つこくりと頷いた。

――彼女の旅は、彼女の復讐撃はこの日から始まったのであった。

《キャラしょーかい その2》

シアリ

一応今回の主人公。

血のような赤髪に色素のない目を持ち不吉だと思われ、化物と呼ばれる。

本人は性格が悪いわけでもない。従って、村の人に嫌われているのはむこうが勘違いしているせい。

平民メイジ、土は使えないが水は使える（無意識にシャボンというオリジナル？ 魔法も使える）。あと、最後の方にファイヤーバードという火×火×風っぽいものを使っていた。料理は下手。

今回、最後に湖に飛び込み生死不明。

シアリ母（名前未定）

美しい銀髪を持つ若い女性。土と水のメイジ（実はトライアングルなのだ！）ということで冷徹（冷鉄、冷血）の女と呼ばれる。

かなりの人格者で、昔は貴族だった。

多分かなりの実力をもつ。

村の人々に攻撃され生死不明。

シアリ父（名前不定）

犯罪者であり火と風のメイジ（多分トライアングル）

それ以外に情報はない。

多分処刑されていると思われる。

ルマ

旅商人の娘。

かわいい女の子……らしい。シアリの友達。

アニエス（レティン）

美しい茶色の長い髪と藍色の瞳をもつ少女。村長の娘で無邪気かわいらしい。

シアリの前ではレティンと名乗っていた。

シアリ母に殺される。

巫女（アニエス）

神聖な雰囲気を持つ。アニエス（レティン）と同一人物。

レティン（アニエス）

無愛想（自称）な女の子。アニエス（レティン）には処刑されたと思われている。

某メイジの前でアニエスを名乗る。

村長

説明特に無し。

次回予告（あー、どうしようこの後）

「るーいーずうー！」

「きゃあ、何よいきなり！」

「なんでもないのさっ！」

「そうじゃなくてええっえ」

ヴァリエール亭の庭の中でルイズと薄紫色の髪の子どもが戯れている。それは天使のじゃれ……。

「な、何よこのコメント！　　べ、別に好きってわけじゃないんだからね！」

ツンデルイズ登場か！？　　まで次回！

次回予告(?)とキャラショーかい(その2)そして後日談(後書き)

……やっちゃったぜ!

? **happy birthday** (前書き)

(なんなんだろう、この作者。英語はちゃんとやってるはずなのに
birthdayのスペルが不安すぎる……)
そしてやっとルイズのとーじょーだー!!!

? happy birthday

「というわけで、ルイズ。誕生日おめでとう」

やっとやっとお父様の長い挨拶が終ったわ。もう、お父様ったら喋りすぎよ。こんなんじゃ折角作ってくれた料理も冷めてしまうわ。

けれど、心のどこかでお父様がこうもいっぱい誉めてくれるってことが嬉しい、ものすごく幸せ。そうよね、私にはまだ未来があるんだから不要って決めるにはまだ早すぎるわよね。

それにしても人がいっぱいいわ。私の誕生日だということでもんな色々なプレゼントを持ってきてくれるし。ただ、実際に私が使ったり楽しめるようなプレゼントって少ないのよね。私なんかこんな豪華なペンダントやネックレス、まだ似合わないわ。

そう思いながら近くにいるメイドに声をかけて外に出る。私が主役だって言ってもどうせ私に話しかけたいんじゃないやなくて、ヴァリエール公爵、つまりはお父様に話しかけるのが目的。

そんなところで私のような子がうろちよろしていても邪魔なだけ。それに、私が面白くないわ。料理だっていっぱいあっても私の小さなおなかでは食べきれないわけでもないし、人の熱気でドレスが汗まみれになったらいやだわ。

「にしても、外は寂しいわね……」

庭に出ると人気は一気になくなり、二つの月が光を湖に満遍なく注いでいる。どうやら今日は満月見たいね。素敵……。

そんな事を思いながら髪を後ろに撫でてみるけれど、私のような小さな女の子がこんなことをしても絵になんてならないわよね。いいなあ、ちいねえさまが。私もちいねえさまみたいになりたい。湖に映るのはお母様と同じ桃色の髪をしたちよつとぶすつとしている女の子。もともとかわいらしい顔つきなのかもしれないけれど、其処にはまだ綺麗さはない。ドレスはちよつと大人びていて大きく、肩から今にも袖が落ちてしまいそう。

なんて、みじめ。一人でこんなことしていて。誕生日だというのに。

刹那、水面が白く輝く。それと同時に私の鼻に何かとても心地よい匂いがついた。イメージするなら紫色の小さな花。そんな優しい香が……。

「どうしたの？ この誕生会の主役さんだったよね？」

左側からいきなりその子どもっぽい不安そうな声は私に話しかけた。ぼおつとしていた気持ちをしんとさせ、左手を見ると薄い紫

色の腰まである長髪が見える。私より少し低い所に頭のとっぺんがあり、厚い前髪が彼女の顔を隠している。水面を見ても前髪によって彼女の顔は隠れている。

「貴方こそ、どうしてこんなところに」

私は敢えてこの少女から気持ちを逸らすために船を見る。池の端っこに忘れ去られたようにおいてある小さな船。私とワルドさまの隠れ家。ワルドさま、今日はきてくれているのかな？ きっと、きてくれているわ。折角だからあとで挨拶にいきましょう。

でも、彼女が一つ溜め息をつく意識は一気にそっちに持っていかれてしまった。溜め息をただただけなのに、其処からはまた紫色の花を思わせる香りがする。優しく、私何て取るに足らないような、何故かそんな気持ちにさせられてゆく。

「なんとなく……だよ。私、こういうパーティー嫌いなもの。えっと……ルイズさんは？」

なんで私の名前を知っているのだろうか、と一瞬思ったけれど今日の主役が私なんだから当たり前かっと思いなおす。そして、私も彼女と同じように溜め息をつき「私も」と、短く答える。長々と語る気には何故かななかった。

彼女もそれをわかっているのか、私の反応をみると首を上下に振る。

「でも、主役がこんなところにいるなんて駄目じゃないの？」

その時、彼女はやっとこっちを見た。初めて厚い前髪の下から彼女のあどけないかわいらしい顔が見える。大きな紫色の目に、桃色の小さな口、そして色素がどこまでもない肌。一個一個がまるで現実離れしていて、お人形のように。それも、特別なお人形。

私は一瞬彼女のその姿に見とれてしまう。きっと、それはどんな人でも当然のように見とれてしまうであろう。私じゃなくても、あの冷静な執事であろうとも。

「いいでしょ？ あきあきしているんだから」

私はつい言葉が崩れてしまった。彼女の美しさに一瞬見とれてしまった。そしたら、今度は彼女はくすくすと小さく笑う。表にはできただけ出さないように口の中で小さく小さく。

「私もだから何もいえないんだけどねー」

そういうと彼女はいったん言葉をきってくすくすと笑う。私はとりどう反応すればいいのかわからないから特に何もせずに関きをま

っている。だから、こんな爆弾を投下されるとは思っていなかった
わけ。

「それで……友達にならない？ 私、ルイズさんのこと気に入った
の」

……え？

私も初めてだった。こんな風に切り出してくる人なんて。いつも
いつも最初に変などーでもいいよーな世間話して、それからなんと
なくでいつも仲良くしていた。だから、初めてだった。いきなり二
言くらいしか喋ってないのにこんな風に切り出してくる人なんて。

ただ、それも超越して私は何故か彼女の友達でいたかった。彼女
という存在の近くにいたいって思ってしまった。それは紛うことな
き事実。私は彼女を好きになってしまったと言ってもいいのかもしれない。

「えっと、私が？」

だから、私はそれがちよつと信じられない。雲の上にいるような
人にいきなり話しかけられてしまったように。

彼女は私の顔をみると、こくりと一つ頷く。

「私は魔法も使えないよ?」

「もう一度いうけど、私はあなたがきにいったの。魔法なんてどうでもいいんだからね!」

私、この世界嫌い。魔法で人なんてはかれるわけないのに、魔法なんて所詮人間っていうものをはかる一つのものさしなのに、なんでそんなのにこだわるのか良くわかんないやー」

そう彼女はいきった。強く、優しい声で。見た目は子どもっぽいいし物言いい子どもっぽいい。けれど、いつていること事態はものすごくしっかりしていて、むしろ私より深く物事を考えているかもしれない。

そして、最後に駄目かな? とでもいうようにもう一度私を見つめる。そうされてしまうと私には断ることなんてできなくて……。

「いいわ、友達になろうじゃないの」

気づけば口は勝手に動きそんな風な言葉をつむぎだしていた。

? happy birthday (後書き)

以上オリキャラとルイズの出会いでした……。 (このオリキャラ、実は初期設定では存在しません。思いついたのも二三日前で、ルイズに抱きつく幼女が書きたかっただけで……勢いでやってしまった) 年は多分7、8くらいの設定なのでまだツンデルイズではありません。

ルイズちゃんの描写などなにか問題点がありましたら報告お願いいたします。

？ 貴族はメイド様！？
(前書き)

……すみません。

本当にすみません……。

ふざけすぎました。

？ 貴族はメイド様！？

まあ、そんなこんなであの少女と私は少し話したりしたのよね。
あの日。会の終る時間ぎりぎりまであの湖のほとりで話していたから、ワルドさまには会えなかったけど私は充実していたわ。彼女って話がとてもうまいんですもの。それに魔法もうまくって自分の魔法を見せられないことが少し恥ずかしかったわ。

けれど、その代わりに歌を歌ったの。二人であの小船にのって、私が静かに歌った。ちいねえさまがたまに歌ってくれた子守唄。優しい音色が私は大好きだった。正直、うまく歌えていた自信はなかったけれど彼女は楽しそうに肩を揺らしていたから、もうそれでいいだった。

それで、一体なんで私の目の前に彼女がいるのかしら？

私は確かに最後にまた来てとかそんな事をいった覚えがあるわ。けれど、それで早速三日後に連絡もなしに来る人が普通いる？ せめてお父様やお母様に報告して、家族どおしで仲良くなってからよね。普通は。

しかも、それだけじゃなくて一人で召使も連れずいきなり現れたのよ。門を守っている方々も彼女を見た覚えどころか馬車一つ通った覚えもなかったそうなのよ。明らかに異常じゃない。

けれど、ここまではまだ異常の一言で片付けられるかもしれないわ。ええ、あの子はそれをもうはるかに超越しているわ。私がせっかく気持ちよく寝ていたというのにいきなり体全身に力が加わって驚いて目を開けてみれば、私に馬乗りになっているメイド……いいえ、馬乗りになっているメイド服を着た彼女が「おはようございます、ご主人様。気持ちよいお目覚めですか？」なんて笑いながらいったのよ。それは許せると思う？ 明らかに不法侵入よ。私は部屋の中に入っていないなんていう許可は一つもしていないのに部屋に入ってきて、私をたたき起こしたのよ！ これは違法よ。私は公爵家の娘よこんなことが許されると思って！ と叫びながら右アッパーを叩き込んでしまったの。

さすがに部屋をのぞいたらメイドが一人部屋で倒れているっていうのはまずいって思ったから、つい大丈夫なんていいながら近づいちゃったのよ。そしたら今度は私が殴られた。まさか、殴られるなんて思ってたわ。私を、私を殴る不届き者がいるなんて、しかもその人が私の友達だなんて思いたくなかったわ。

そして、彼女はてへっというて笑ってどっかに行ってしまったて……。

しょうがないから私はちゃんと着替えてお母様に訴えに行こうとしたのよ。とりあえずお母様の部屋に行ってみようって思ってたのんびりと廊下を歩いていると周りのメイドたちの服が何かおかしいことに気づいたの。そう、袖が半そでになっていて……て、え？ そういえば昨日もメイドは半そでだったわ。でも、私をたたき起こした彼女は長袖……。腑に落ちないけれどどうでもいいわね。

まあとにかく私はお母様の部屋に行ったの。そしたら先客がいて、それが彼女だったわけ。メイド服を着た。

で、最初にもどるっと。

「お母様、どうしてこの子がお母様の部屋にいるのですか？」

「おや、ルイズ。今日は珍しく朝が早いみたいね」

「そんな事を聞いているわけではありません！ この子がどうして屋敷に！！ しかもメイド服なんて着て」

「あせらないでちょうだい。貴方はそう焦るからいつも魔法だってなんだって失敗してしまうのです」

お母様はそうのらりくらりと私の質問に答えないようにとしくる。それどころかところどころで何時ものように私にお説教をしてくるし。私は必死で話を戻そうとするけれど、お母様は話を逸らすうとする。何故お母様が話を逸らそうとしているのがわからないけれど、とりあえず質問に答えてもらわなくっちゃ。

今は杖を交えているわけでもないんだから、私にも分が……あるわけないわ。

「だまんなさい！ ルイズ。この子は新しく雇うことになったメイド。ただのメイドよ。貴方のお世話をするためのメイド」

「メイド！？　ですが、この子は私の誕生会で貴族のように振舞っていました。それなのにどうして……」

「そろそろ朝食の時間。早くダイニングルームに行きなさい！　折角朝早く起きたのだから。ユエも連れてってあげなさい。ほら、早く」

と、最後にはあしらわれてしまった。

メイド服をメイドが着ていることは当たり前だから納得できます。ですが、彼女は貴族なのにメイドって……。まあ、名前が知れただけよかったと思います。ユエ、不思議な名前。

「それで、ダイニングルームとはどっち……どちらに？」

「えっと、そっちよ。一緒に行きましょう」

「はい、ルイズ様」

「止めてよ、様付けなんて。友達でしょ？」

私はにっこり笑いながらそう言った。私がメイドに対してこんなことを言ったのが意外なのか彼女は一瞬驚いたけれどすぐに元に顔に戻す。

「ならば、平民のメイドにもそうい……おっしゃってくださいよー。ここでは友達とかそういうことの前に、メイドと仕える方の娘という関係が前提なん……となります。だから、私にそうゆー……強制する前に他の使用人にも平等に接してくださいな」

途中途中地の口調がでそうになりながらも、表だけはできるだけ静かな声で言い切る。私も彼女ももう何も言い合わなかった。そしてふと自分が恥ずかしくなった。友達だからっていつて上にみる扱いを止めてくれるような気がしていたけれど、結局はメイドとお嬢様でしかない。様をつけられるっていうのは正直居心地が悪かった。魔法も仕えない貴族なのに彼女たちは様付けして、敬う意味もなく。そんなの好きじゃなかった。嫌がらせにしか思えなかった。

彼女は友達だから様付けしないって思ってた。私を馬鹿にするように様付けしないって思ってた。そのほうが良かった。けれど、様付けをした。彼女は友達である前に、（多分）貴族である前に使用人だ。

私たちはダイニングルームに着いたので彼女と別れた。彼女は「では」と一言言うのとどっかにいつてしまった。

「ねえ、そのメイド……名前はなんていうの？」

ちよっただけ恥ずかしかったけれどいえた。すると話しかけられたのに驚いたのか食器をのせた台をおすのをやめて、深い茶色の髪の少女は一瞬顔をこわばらせる。周りを見回して貴族に口答えをしてもいいものかと迷うように顔を青ざめさせる。

おっと、そうだわ。私は貴族。いきなりこんな風に話しかけたら

驚かれちゃう。「早く答えなさいよ」……駄目だ、なんで命令形になっちゃうんだろう？ でも彼女は礼をしながら小さな声で「メイです。お嬢様」と告げる。

「私の方が年下なんだから敬語も礼も要らないわ。忙しい時にごめんね」

彼女は今度こそほうけたような顔をしてから「はいっ」と言い、職務に戻っていった。少し迷惑をかけてしまったような気もするけれど、私は正しいことをした。確実にそう思える……ただけだけど。

？ 貴族はメイド様！？（後書き）

名前決定！

ですが、またやってしまった感が……。

そして、カリィヌ様ーキャラが口調がつかめません！ 本当は原作を資料にしたいのに、原作今持っていないし。アニメは口数少ないし。とりあえずアニメのようにですます口調にしてみましたけど……。

誤字脱字ありましたら指摘お願いいたします。

そして、更新スピードを通常に戻します。

？ 奇跡

「というわけで、私ちゃんと平民……この使用人には平等に接しているつもりよ。ちゃんと名前を呼ぶときは様をつけないように頼んでいるし。まあ他の人たちの前では一応様付けさせているけれどね。あなたもよくそのことは知っているでしょ？」

「勿論！　じゃあ言葉崩しちゃうけどいいかな？」

「ええ。それを待っていたの」

そう明るく私が言ってみせると彼女は途端に花がさいたような笑顔をみせる。言うなればオレンジ色の小さな花。五枚の花びらで出来ていて、真ん中に緑の丸があるような花。

それを見ると私は何故かとても心が軽くなって、誰にでも優しく出来る。他の使用人やおねえさま、お母様までもが彼女の笑顔は癒されると言っている辺り、これも一種の魔力なのかもしれない。

さて、彼女がこっちにやってきて早半月。彼女も家のことには大分慣れてきて最初のような不祥事の数は大分減ってきている。尤も元がおっちょこちょいなのか何日かに一回は色々やらかしてしまっているけれど。

まだお母様から詳しい事情は聞き出せていないけど、なんだかんだ勢いでここまでできてしまった。まあ、特に不自由とかがあるわけでもないから私が文句言う筋合いなんてこれっぽっちもないのだけだ。

そういえばはたから見ても、私たちはどう見えるのかしら？ ピンクの髪の貴族の娘と菫色の髪のメイド、この二人の組み合わせ。少なくとも私は他の普通の少女よりも美少女だと自負しているし、彼女だってかなりかわいい。最近では人を見てないと「るーいーずーさーまー！」なんて叫んで抱きついてきたりもしていて、これが妹萌？なんて思い始めていたり。ってことはやっぱり姉妹に見えるのかしら？

彼女って実は私と同じ年みたいなんだけどどう考えてもそのロリ顔では二三歳は若く見える。中身は私と銅レベル……否もっと頭いいんだけどね。それは本当なのよ。私が人を誉めるってことはあんまりないんだから。

「で、どうしたの？ こんな真昼間」

「暇なの！ 本当に暇なの。この時間って洗濯物や掃除以外は仕事なくて、洗濯物は物干し竿に手が届かないから手伝えないし、掃除は掃除用具が重くて使えないの」

最初は威勢良く言っていたけれど、途中から役に立てないことが悲しいのかしょんぼりという。そういえば、彼女身長も私よりずっと小さいのよね。それならばそのこともできなくて普通。私だってきつと身長とかその前にそんなことやろうとも思えない。

だから、素直にこんな風に誰かを手伝いたいとか思える彼女が偉いと感じてしまった。でも、感じるだけじゃだめ。彼女のためになりたいと思わなきゃ！

どうすればいいのかな？ 暇、ならば私が遊んであげればいいかな。でも、何して遊ぼう。貴族とは言っているけれど位はよくわからないから下手な人形遊びとかは止めた方がいいし、かといってそれ以外には特になにも思いつかない……そうだ！

「うーん、じゃあ魔法教えて。私魔法が使えないの。ユエは魔法使えるでしょ？」

「あ……うん。でもラインくらいまでしか――」

「ライン！？ すごい。この年でラインってすごいって絶対」

信じられない。私ドット……いいえ、一回も杖触っている姿見たことないからもしかして魔法習ってないのかなとまで思ってた。そう思うとふと本当に私は落ちこぼれなんじゃないかと思う。だって私はどんなに練習したって一個も魔法使えないし。どんなに努力してもみんな爆発するばかり。気がめいっちゃうよ。

まああの本人はラインで驚かれるということに驚いているのか、目をぱちくりさせているけれど。

「ね？ いいでしょ？ 魔法教えてよ」

彼女はちょっと迷うようにまたぱちくりと瞬きを繰り返すけれど、やがて納得いったのかこくりと何時ものように顔を縦に振った。

さてと、魔法を使うなら広い場所がいいわよね？　だとしたらお母様といつも訓練に使っている庭がいいかしら？　ここの池から歩いても結構近いし。うん、そこでいいわね。

「ユエ、庭に行きましょ？　魔法を使うなら開けた場所の方がいいし」

「うん、わかった。いこーつといっても庭ってどこ？」

「えっと……私に付いてくればわかるわ」

説明するより実際に行った方が速いって話。おどおどしている彼女の手をとって私はスキップで全身をはじめめる。こんな気持ちのいい晴れの日の庭でスキップ、さぞ気持ちいいんだろうなあ。最初は冷たいと思ったユエの手だけど、太陽の光に照らされて少しづつだけど熱を持ち始めている。

なんて考えているとすぐに庭についてしまった。

「うああーひろーい！　さすがヴァリエール家だね！」

彼女はさっと手を離すと走り出す。きっとこんな広い場所はじめてだから感動しているのね。私もここがお母様にいつもしごかれる場所じゃなければ好きになってたかもしれない。うん、お母様は怖いわ。すばらしく怖い。

「あんまり遠くまで行かないでね！ 私、そんなに走れないわ」
「あ、ゴメン！」

ユエはさつと勢いをなくしてこっち側に向ってくると回ってみせる。スカートのすそがふわーと広がってとってもかわいらしい。草を踏みしめる音一つ一つも軽やかで綺麗。それにしても、元気ね。貴族の娘なんてそんなに走るものでもないし、私はお転婆だったわけでもないから足にはまったく自信がないわ。

足に自信がある貴族なんて軍人だけでいいのよ。私みたいなどうせ結婚して政治の道具にされるような少女に体の強さなんていらないわ。

「さてと、魔法を教えるんだったよね？ ならとりあえず一つ魔法をやってみせてよ。なんかいえるかもしれないから。好きな魔法でいいよー」

……そういわれるとかなり困る。好きな魔法だって言っても一回も成功したことなんてないんだから。とりあえずファイヤーボールでも唱えてみよう。もしかしたらうまく行くかもしれないから。

私は上着のポケットに入れっぱなしにしていた小さな杖を取り出して構える。よく想像するのよルイズ。杖の先に一つの小さな炎

が灯る様子を。しっかりとイメージして……。

「フアイヤーボール!!」

バツコーーーーン!!!!!!

やっぱり結果は何時もと同じ。杖の先に火を灯そうと思ったのに私の目の前で爆発が起こる。それも今日は何時もよりも何倍か増しな気がする。張り切った分だけ被害が大きくなったとかそういうわけではないよね……？

「というわけなの……ユエ、どうおも——？」

ユエはまた久しぶりに俯いてゆっくりと静かに考え事をしていた。私は失敗してこんなに煤だらけになっているのにユエは煤をかぶってないとかそれだけでなく怪我也一切していない。それはある意味すごいと思いながら私はユエが何故こんなに考え込んでいるのかを想像してみる。

もしかして、私の魔法がヘタすぎるから？　ありえる。こんな子に魔法なんて教えられないとかそう思っているのに違いないわ。私なんてゼロよ、ラインの子に私の気持ちなんてわからな……。

「ルイズ！」

ユエは刹那今までで一番大きな声をあげる。強く澄んでいて美しい声。

「ルイズは魔法が使えないわけじゃないよ！」

「嘘言わないで！ 私の気持ちなんて……」

「わかるの！ いやみなほどにわかつちやうの。」

どんなに努力しても成功しない。あらゆる物を調べて今度は成功するように何百回も努力して、けれど結局なにも怒らない。周りからはお前なんかができるわけないと笑われ、気味悪がられる。いつしかみんなに避けられ一人ぼっち。親も私のことを気味悪がって近づかないし、いいことなんて一つもなかった。成功をしたこともあったけど、それは失敗だった。最悪の失敗だった。

完全に私はルイズを理解できないよ。私は魔法が出来てしまうから。

でもね、そんな気持ちになったことがないわけじゃないの。それはわかって！ それにルイズは幸せになれるよ。魔法が使えなくなつてちよつとさげすまれるかもしれないけれど、爆発を魔法って言ってもいいの。貴方がもしも戦う時に相手を一発で倒せる技が使えるれば便利でしょ？

魔法って言うのはね、奇跡のことを言うんだよ」

「き、奇跡？」

私は彼女にただ一方的にまくし立てられているだけで結局何もわからない。彼女の昔の話なんてこれっぽっちも知らないしね。けれど、彼女が必死に何かを伝えたがっていることくらいはわかる。本当に必死だってことくらいは。

「そう。魔法って言うのは普通にやっても出来ないことをやってのけることを言うんだよ。だって魔法なしで目の前にいきなり炎を出したり水の玉を出すことは無理でしょ！？　いきなり相手の怪我を治したり風の向きを変えたりすることも無理でしょ？　物の根本的な性質を変えるのは無理でしょ？　それに何もないところに呪文唱えていきなり爆発を起こしたりすることも無理でしょ？

ねえ。だからね、奇跡なんだよ、魔法っていうのは全て普通の人間には行えないことを、正攻法では絶対にできないことをさすの。

だから、ルイズの爆発だって魔法なんだよ。ルイズの魔法なの」

やっぱり言葉の意味はほとんどわからない。言いたいことはなんとなくわかるんだけど、彼女が言うことは当たり前すぎてよくわからない。当然であることを当然のように言っている、とでも言えばいいのかな？　結局頭の整理がうまくつかない。

要するに私の爆発を魔法だっていつているんだよね？　それなら

ば素直に感謝してあげたいなと思った。ただの励ましなのかもしれないけれど、ここまでしっかりと私に向かって言ってくれた人は初めてだったから。

「ありがとう」

もう、その一言で他の複雑でいっぱいな気持ち、全て片付いてしまいがした。

？ 奇跡（後書き）

今までで何故か二番目に長くなってしまった。

否、皆様は普通一話が最低これくらいなのだろうけれど。

誤字脱字ありましたら連絡お願いいたします。

？ ……なんでこんなことに

この後もしばらく私とユエの秘密の魔法の特訓は続いた。まあどんなに頑張っても使える魔法（？）はあの爆発しかないから、なんならそれきわめちゃえなんて言われて最近は威力調節とかをしている。いざという時に大きな爆発が起こせなかったら不便だしね。

だけど、それよりも爆発なんていう失敗以上に迷惑なものをきわめよう、なんて言ってくるユエがおかしな子なんじゃないかって最近思う。ユエは私に爆発をうまく使えるようにさせて何をさせようとするのか、それを考えると恐ろしいような嬉しいような……。

まあ、それ以外の時間は私もユエもそれぞれのことに励んでいるんだけどね。だから、最近おおきなエピソードなんて……あった。思い出したくないけれど。

この前ユエの部屋を勝手に覗こうとしたことがあった。けれどユエの部屋には強力なロックの魔法……らしきものがかかって中に入れなかった。

でも、折角覗こうとわざわざ使用人の住む塔まできたんだからってドアごと爆破してしまったの。さすがにあの爆発魔法もこういうときくらいは役にたつてね。どんなものだって爆破できるんだから。

そこで中に入ってみると……思い出したくない。何か白いもので壁という壁、床という床すべてに円形の紋章が書かれており、その

中でも一番大きい床の紋章の真ん中には死んだ羊と馬が横たわっていた。腹の部分をナイフで切り裂かれ内蔵がところどころ飛び出しているというグロテスクな……思い出すだけでも吐き気がする。あと、ハシバミ草もそこらじゅうにまきちらしてあった。

私は叫ぶまもなく逃げ出していた。扉も閉めずに走って走って走って……気がついたら自分の部屋に戻ってきていた。それでその後はいつも使っていなかった筋肉でも使ってしまったのか全身が痛くなってベッドに倒れこんで眠ってしまった。

その後しばらくユエに会わなかったお陰か次にあったときに何も言われなかったし、私もごまかしきれたみたいだけれど、何故か実はばれているような気もする。そんな感じで私たちの日常は続いていた。

でも、なんでこんなことになっちゃったんだろう？　ただいま絶賛目の前でお母様とユエが杖を構えて対じしている。二人の間、ちやうど真ん中辺りには何か棒切れでもつかって掘ったのか、庭のしらがちやうどあの部屋で見かけた円のように掘られている。

何故か気づいたら私を審判役に二人の対決というものがいきなり始まっちゃったわけで……。私がとめなかったからおこったとかそういうわけじゃないのよ？

「さて、先行は譲るけれど……」

「結構です。どうぞお先に」

そう短く二人は会話をかわすと、お母様が動き出した。いつもの空中に足場を作る魔法が発動したみたい。一方ユエは戦闘なれしていないのかまだ動かない。でも、どこかわざと動いてないような……気のせいね。そんな風にとまっていたら恰好の狙いの的になっちゃうのに。

「動かなくていいのかしら？」

そうお母様が聞くけれどユエは詠唱にただ集中している。それを見て、お母様はまた呪文を唱え始めた。えっと今のはエアカッター（けどスクウェア補正のかかった恐ろしいもの）を唱えているのかしら？ カッタートルネードはさすがに使わないみたい。よかった……、と安心している場合じゃない。ユエったらちょっとお！ 避けないと死んじゃう！ なんて思うと不意にお母様の目の前に水ウォーターウォールの壁……いいえこれは泥の壁マッドウォールが現れる。

「なかなかやるじゃない」

「公爵夫人よりはまだまだ！」

そしてエアカッターの大半を飲み込み分散し泥が飛び散った。けれど、そこにレビテーションがかかりお母様の浮いているしたの地面のちよつとだけユエ側に何か不思議な文字のような形に飛び散る（エアカッターの方もぎりぎりのところでレビテーションを自分に

かけて速さを上げてから避けていた。まったくユエは器用なものね。
。私はさっぱり意味がわからないけれどユエはまだ余裕とでも言うようににっこり笑う。あー、お母様を挑発しちゃ駄目。お母様はこういうときの挑発を嫌っているから……。

その時お母様は次の魔法を完成させる。今度はエアハンマー。あくまでも手加減したうえで終らせる気だ。ユエはそのことに気づき、ちよつと不満そうにするけれど余裕がないのかすぐに避けるっと思わせたところで受けた！ いたそう。地面も小さな穴が一つ出来るし。カッタートルネードとかエアカッターとかじゃない分幾分かましなのかもしれないけれど、それでもあれは痛そう。でも、彼女はまともに食らったはずなのに怪我一つしていない。この前と同じ。しかも、杖もどうやら無事で、彼女はさっきからの詠唱を続けているみたい。よく口が動くわね……。

刹那、いきなり魔法は発動した。お母様の足場の風の床のようなもののお母様が立っている一点にむかって、雷の放つあの強い力が流れているのがなんとなくわかる。お母様は治そうとささっと詠唱を終えようとするが、その前に足場がついに消えた。お母様はそれを感じたのか、すぐにフライの呪文を唱えて体勢を整える。けれど、その時には落ちそうになった勢いなのか一歩前の地面のところにつま先がちょうどついていて……。

その時、なんでかはわからないけれど、いきなりフライが誤作動（そんなことあるわけない！）して、お母様はあの不思議な円のあるところに飛ばされる。そして、ユエはまた何か魔法を発動させるとその円になにか新しい文字がほられる。けれど、それに何の意味が……？

ユエの方を見るとふぁーっと一つ溜め息をついた。戦いは終わらないのに気をぬいていいの？　しかもお母様相手に、と思ったけれど不思議なことが起きた。

お母様の詠唱を行う声は聞こえるのに、魔法が発動しないのだ。それは小さな魔法から大きな魔法まで全部、何一つ発動しない。といってもためしたのはエアカッター、エアハンマー、レビティションの三つだけで、でもやっぱりどれも発動しない。否、正しく言えば発動しているけれどお母様から一定以上の距離離れるといきなり魔法が消えてしまう。そんな異常。普通ありえないこと。

「あなた、何をやったのかしら？」

「これが終わったら話します。そして、これでもう積みですか？」

ユエをもう一度見るとにっこりといつものように無邪気に笑った。お母様を挑発しちゃ駄目！　と心の中で叫ぶと刹那ユエがぶつとばされた。文字通りの意味で……だ。

「私相手に余裕こくなんて百万年速いのよ！」

と、後に残ったお母様は叫ぶことで、この決闘（？）戦いは終わってしまった。

？ ……なんでこんなことに（後書き）

……というわけでユエVSカリヌ様（手加減しまくり）。

戦闘描写の下手さ加減に涙。

そして戦闘中は基本的詠唱中なため会話が少ない。

それにしてもルイズちゃんの言葉遣いが悲しいことに……。

でも、やっぱりカリヌ様はカリヌ様。

なんだかんだで勝利ー

（あと、詠唱は長ければ長いほど力が強くなると勝手に思っています）

誤字脱字キャラ崩れで許せない。つーか作者最低なことがあったら報告よろしくお願いいたします。

？ 魔法円とルーン

さて、ここからは後始末。お母様は周りの土を巻き上げて庭を綺麗に戻して行く。相変わらず手際いいなあと見とれていると、ユエを連れ戻してこいと怒鳴られてしまった。それは普通よね。最後は勢いでどこかにとばしてしまったのだから。

けれど、どこに飛んで言ったかはよく見てなかったからちょっと大変そう。こういうときに魔法が使えるれば便利なのに。

と、思っていたら何処からともなくユエは現れた。というか上から落ちてきた。えっと私は魔法が使えないのよ！ どうしろっていうのよ！なんて心で叫んでいるうちに彼女はフライの魔法を完成させて宙を漂う。

「えっと、怪我はないわけ！？」

「大丈夫！ 全部よけられたから」

お、お母様の攻撃をうけて！？ ちょ、ちょっとまって。そんなことありえるわけ、普通なら意識失って頭が割れてしまうほどの重態になるはずなのに……。規格外とかそういうの越えてるわ。お母様でさえ規格なんかと比べるのが馬鹿らしいって思われているわけなのに。

私も魔法がうまく使えないっていう点では規格外なのかもしれない

いけど。

「それにしてもユエ、どうしてこんなことになってしまったのかしら？」

「それは私が説明しましょう」

「お母様！」

どうやら庭をもとにもどすのが終わったのか、すたすたとこっちにむかって歩いてくる。見た目だけをみればとても素敵なのに、あの戦いを見た後だと正直戦士にしか見えないわ。それにしても、どうしてあんなに中途半端な苦戦をしていたのかしら？

ユエのことだからあとで聞けば説明してくれるような気がするけれど。なんて考えているとお母様はゆっくりともとの理由を語り始めた。

「このメイドがある日突然にカトレアを治療できるって言ってきました」

「ちいねえさまを！？」

嘘、あのいろんな医者様に見てもらっていたのにまったく治らなかった病気が治るですって？ 私はユエを見て真偽を確認しようとするけれど、ユエは笑っているだけで何も言わない。

「私も半信半疑だったからどうやって治すのか聞いたのですが、

教えられません。ですが、体験することで理解できると思います。だから模擬戦をしましょう。手をしっかりとぬいた、と言ってきて、今に至ります。わかりましたか？」

「でも、お母様は病気ではないわ！ ユエ、どういうこと？」

私がユエを見つめると、左右に首を振る。私もこういう態度をとられたことは初めてだったから一瞬意味がわからなかったけれど、すぐに思い至る。教えられない？ ……違う、自分で考えろってことだわ。

まず魔法で治すつという方法は除外しましょう。だって、それならばこんな七面倒くさい方法を取る理由がないじゃない。じゃあ…：今回の模擬戦をよく思い出してみる。

えっと、そうだわ。地面にあの不思議な円、私が昔見つけた書物に書かれていた使い魔のルーンによく似た円が地面に掘られていて、でも、それが関係するならどうしてあの時まで発動しなかった？ ……部品がたりなかった？ そうよ。彼女最後の最後であの円に何かを書き足していたじゃない。

「もしかしてあの不思議な円が関係あるってこと？」

「それだけじゃないよ。っと、じゃないです」

「いいえ、無駄な敬語は止めてちょうだい」

「……わかりました」

結局いつもと口調違うじゃないかと思いつつ、それだけじゃないと

言った理由を考える。あの戦いで他に不自然だったところ……そうだ。いきなりフライが誤作動したわ。あれの原因はなんだったのかしら？ 普通の魔法じゃないわよね。

そういえばその直前にマッドウォールをエアカッターで切らせて（相殺なんて格が違いすぎて出来てなかった。威力を少し軽く出来てたくらい）泥を撒き散らして何か文字を綴っていたわよね。

「じゃあ、泥で書かれた文字のこと？」

「これ以上は聞かれたら私が異端認定されてしまいます。部屋に移動しませんか？」

「そうね。なら、いつもの私の部屋に来て頂戴」

「わかりました」

なんてやり取りが終ると、何時ものような重い沈黙に辺りがつつみこまれる。お母様がいると辺りが何故かいつも静かになる。それはきつとお母様のもつ独特の気配によるものなのかもしれないわ。

ろうかを歩いていても足音一つ立ててはいけないような、そんな気持ちに何故かなる。といっても足音が完全に隠せるわけもなく、静かな廊下には私とユエとお母様の三人分の足音がそれぞれバラバラに聞こえてくる。なんて考えているうちに、お母様の部屋についてしまった。

ユエが何時ものようにあまり軽くはない扉を静かに開けると、お母様、私、そしてユエの順で部屋に入る。そして、扉をギーという

音をたてて閉めてからお母様はサイレントの呪文を唱えた。

「サイレントの呪文はかけたからさっさと話さない」

「わかりました。さっきルイズ……様が言われたようにさっきの模擬戦には不思議なことが二回ありました。とりあえず一個目の泥の文字から説明します。あれは古代のルーンです」

「古代のルーン？ 使い魔のルーンと同じように？」

「そう。あれには魔法が誤作動する意味がありました。そして、仕掛け方は簡単に術者がなんらかの形で対象が踏むと思われる地面に仕掛けとけばいいだけです」

……もしそんな魔法があるのならとてもえげつない。いいえ、もしものはなしじゃないのよ。だてユエは私の目の前でそれをやってのけたじゃない。

でも、使ったのがユエでよかった。もし戦場とかでそんなのが仕掛けられていたら……想像したくないわ。

「そんなのが本当にありえるのかしら？ まさか嘘は言ってないわよね？」

「勿論です。私は本当にそれをやったでしょ？ 魔法が誤作動するなんてこと、普通ありえない」

お母様はやっぱり信じられないとでも言うように口をふさぐ。けれど、彼女はお母様の所作など気にせず話を続ける。

「そして、もう一つの仕掛けがあのだ……魔法円です」
「魔法円？」

聞いたことのない名称。魔法円……魔法の円ってということ？

「さっき言っていたあのルーンのようにそれを踏めば発動するとかそういうものってこと？」

「そう。あれはかなり面倒くさい準備が必要で、発動する曜日や時間もしっかりときぎまないと発動しなくて、その分威力は絶大。今回使ったのは防御の魔法円です。本来は。しかし、敵に仕掛けることで魔法が外に届かないようにしたわけです」

……そんなことが本当に出来るのか？ と問いただしくなるけれどさっきの光景を思い出して自分を納得させる。できないってわけではないはず。お母様はさっきみたいな確認作業はもうしない。

「ですが、あれは少しでもかけてしまうと発動しなくなってしまうて……ということとはもう実験済みですよね？」

「ええ」

「どうということ？」

二人の間でなんらかの会話が成立したみたいだけど私には何のことかさっぱりわからないわ。けれど、二人はまたも口をつぐむ。自

分で考えなさいっていうことなのかしら。しょうがないからまたあの模擬戦を思い出してみる。結局最後は魔法で勝ったんだろうけれど、その前に使った魔法は？ エアカッター……違う。エアハンマー……これも違う。その次にもう一つ何を使っただけ？ そうだわ、レビテーション。だけどレビテーションで一体何が？

そういえば魔法円を少しでも削れば効果がでないって言ってたけど、もしかしてレビテーションで土を移動させて魔法円を崩した？

二人の顔をもう一回見比べると、正しいとでも言うように首をたてにふつてくれた。私の考えでもよめたのかしら？

「そして、今回の治療では魔法円とそのルーンを使います。わかりましたか？」

「ええ。カトレアの治療を許可します」

「ありがとうございます」

そういうと彼女は立ち上がる。そして、一つ礼をして部屋から立ち去ろうとするけれども、お母様が小さな動作でまったをかける。彼女はぴたっととまり振り向いた。

「他に何か？」

「……どうして私の攻撃を受けて立っていられるのです？」

「企業秘密です」

にっこりと笑いながら人差し指を口に突き立てる。かわいいらしい
なあとか思ったりなんかしてないんだからね！

？ 魔法円とルーン（後書き）

う、解説で一話使ってしまった。

まあそんなこんなでカトレアちゃんの治療を魔法円（魔法陣）パワーでやってみたいと思います。

（本当は中国医学も使いたかったんですけど、こうなってしまうば活用不可能……）

そして、魔法円を崩壊させるのに派手な風魔法を使いたかったんですけど、あれ以上威力が大きいものを使うと打ち消される前に自滅するので……（それにしてもあれは絶対に戦闘ではない）誤字脱字などありましたら報告よろしくお願いいたします。

なお、オカルト（魔術式または魔法円や謎のルーン）は論理を超越します。

? **L e t ' s g o t o t h e C a t t l e y a ' s r o o m**

最近サブタのネタがない。

英語は不安すぎてあんまり使いたくないのにな。

? **Let's go to the Cattle yard room**

「ねえユエ。あの魔法円って……」

「教えられないよ？　　っていうか、教えてもルイズは使えないと思う」

「……わかったわ」

「今日は妙に諦めがいいんだね」

ユエはそうからかうように言う。というよりも、私ってそんなに諦めが悪いように見えるのかしら？　――そうかもしれないわ。だって、例えばあの日ユエの部屋に侵入したとき。あのときだってドアがあかないなら別にそのまま戻ったって良かったのよ。他にもエレオノールねえ様に馬鹿にされるからといって、魔法を使うことをあきらめても良かったのかもしれないし。

「まっ、あきらめ悪くても私が困るだけなんだけどね」

にっこりと彼女はまた純粹に笑う。その笑顔を見るとどんな時だって明るい気持ちに慣れる。何回も思ったことだけど、今日だってそう。あの時、魔法円を使っていた彼女に対する恐怖だって消えて行く。

正直なところ、今から思い出せばあの時のユエ、ものすごく怖かった。怒っている時のお母様よりもずっと。一つのミスも許されないような、気迫。取り付かれたようだった。あの時は一つ一つの行動に目が行ってたから気がつかなかったけれど……。どうして気がつかなかったのかわからないほどのもの。

「でさ、カトレア様の部屋ってどこ？ 私も入ったことなかったから……」

「えっと、もうすぐよ」

そうだ、そういえばちいねえ様の部屋に向っている途中だったんだわ。もう、また気を抜いたら変なことばかり考えてて……。駄目じゃない。私ったら。

でも、まさかユエとちいねえ様が話す機会が訪れるとはね……。実際に起こるなんて思っても見なかったわ。だって、ユエはなんだかんだ言っても普通のメイドと同じ扱いなんだもの。もともと貴族であり、今も貴族であろうともここに使えていることにはかわりないんだから。

「それでね、ルイズ。どうしてヴァリエール公爵様たちはいないの？」

「えっと……急な用事が入ったみたいなのよ」

そうそう、あんなタイミングで何故用事が入ったかはよくわからないんだけど、バルソビアナ伯爵とかいう方との密談とか何とか……。なんでちいねえ様の方の用事を優先しなかったかがよくわからないわ。

「よかったあ」

彼女はふーっと安心したように息を吐き出す。まあお父様やお母様に見られながらの治療なんてできるはずないものね。怖くて。

だけど、ユエはまだ気づいていないのかな？ お父様たちはちいねえ様の治療を自分の見ていないところでやらせたことなんて一度もなかったわ。心配で心配でたまらなかったから。でも、今は二人ともいないというのにユエは治療を許された。それは信頼されているってことだと思う。

……もしかして、本当はただたんに治療に失敗したら圧力をかけるぞなんて脅されているだけなのかもしれないけれど。

まあそんなことを考えながら歩いていたら、ちいねえ様の部屋にたどり着いてしまった。私はユエに向き直る。すると、ユエはついにちいねえ様の部屋にたどり着いたことを察したのか、こくりと一つ頷き二回扉をたたく。コンコンコンと、小さな音が響く。

「入っていいわよ、ちいさなルイズ」

ちいねえ様の優しくて甘い声が部屋の中から聞こえる。ユエはゆっくりと扉をあけた。そしたら……。

「うあ！ な、なんで？ 私動物に嫌われてるの？」

ユエが部屋の中のとりに一方的に攻撃され始めた。檻の中に入られていないありとあらゆる動物からにらまれ、つつかれはたかれている。ちいねえ様も困ったようにおろおろしながら「この子は敵じゃないわ」っと叫ぶけれど、動物たちは止まらない。こんな光景私も始めて。ちいねえ様に逆らうことなんて普通なのに。

「もう、やめてよー！ 焼き肉にしちゃうよー！！」

そんな事を叫ぶけれども動物たちは止まらない。私のほうには攻撃してこない辺り、あたまがいいのかしら？ けれど、そんな間にもユエは攻撃を受け続けている。そして、切れたのかいきなり杖を取り出して何かを詠唱しはじめるってファイヤーボールじゃない！

「ちょっとまって！ 焼肉にする気！？」

そう私が叫ぶとユエはええ、もちろんとも言うように大きく頷

く。……とめたいけれどとめられないわ。とめてしまったらこの部屋が爆発しちゃうもの……言い訳なのかもしれないけれど。どうしよう。折角ちいねえ様の病気が治るって思ってたのに。

「やめて！」

ちいねえ様は今まで聞いた事がないくらい大きく強い声で叫んだ。すると、途端に全ての時がとまった。いいえ、とまったような気がした。ユエの詠唱は途切れ、動物たちは息をするのにも動けず、私も口を開くことが許されない。そんな膠着状況。でも、それは長くは続かない。

「ようこそ、私の部屋へ。私の治療を早くしましょう」

……恐るべきちいねえさま。



「ということで、不安はないの？ 見ず知らずの子どもに命預けるんだよ？」

「私は貴方を信じているわ」

「……わかった。ルイズでてって。私ね、見られたくないの」

「うん」

不安だけどね、私はユエを信じる。そう決めた。なんて思いながら廊下に出た瞬間聞き耳をする体制をとった。

? **Let's go to the Cattleya's room** (後

バルソビアナ伯爵は実は伏線だったりwww。そして実はこの名前は某フオークダンスがもとネタだったりwww。(作者は横文字の名前にめっちゃ弱い)

それにしても不安要素がまた一つ。カトレア様のことです。

あああつ、否ねカリヌ様よりは大丈夫な感じがするんですよ。けれど、ど。私は自分というものを全く信用していません。

不安だYO!

あと、誤字脱字などありましたら指摘お願いいたします。

？ 語らえば語る

「カトレア様、しばらく用意をするので横になってもらっていますか？」

「ええ。わかりました。久しぶりのお客様だからお喋りしたいところだけれど、邪魔しちゃ悪いものね」

私はちいねえ様の部屋の前にスカートを床につけぬよう、うまくしゃがみこみ聞き耳を立てる。幸いサイレントの呪文を使わなかったみたいだし、扉に爆発で小さな穴を開ければ中の言葉なんて意外としつかり聞こえてくるのよね。

それにしても、こんなに元気そうな声をしているちいねえ様なんて久しぶり……。いつもどこか疲れたような感じで、それでも無理やり元気なふりをしているような、そんなことばかりだったから。

部屋の中からはサクサクっという床と何か硬いものをこすりつけるような音が聞こえてくる。きつとつか見せてくれたチョークとかいうもので床に何かを書いているのだろう。そして、またしばらくすると今度は小さな本当に耳を澄まさないで聞こえないくらい小さなプスっでもというような音がする。

「カトレア様、私のようなものが言っではいけないのかもしれないが、血を少しくださいませんか？」

血をください？　な、な、なに言ってんのよユエ！　血をくださいって……。

「ええ、わかったわ。その針を貸してください。あと、敬語は止めてくれませんか？　ちよっと話しにくいの」

ふー、そういうことなのね。よかった。普通に血をもらうだけなのね。ただ、一体血なんてなんに使うのかしら？　あの泥の文字を書いたため？　そんな事を私が考えていてもしょうがないんだけどね。

それから静かな時間がしばらくの間ちいねえ様の部屋とこの廊下を包み込む。一言たりとも言葉は聞こえない。そんな静寂。だけでも、そんな静寂は小さな声と共にやぶれる。

「邪魔しちゃ悪いって思っていたけれど、やっぱりつまらないから少しお喋りしない？」

「……わかりました」

「だから、そんなにかしこまらなくていいのよ？」

「なら」

ユエ……貴方は遠慮というものを知る必要があると思うのだけど、
気のせいかしら。

「あなた、何処から来たの？ 誰？」

「どうしてこんなことをきくの？」

「あなたってものすごくちぐはぐなの。私はね、この部屋に閉じこもっていたから多くの人間のことを知らないわ。けれどね、たまにやってくるお医者様とはよくいろんな話をしたのよ。そして、話すと私はわかってしまうの。相手の本質を」

「ほ、本質？」

ユエの声が少しだけ震える。何かがばれることを恐れるように。
カトレア様はそれをわかりながらもなだらかな静かな声で続ける。

「そう、本質を。お医者様にも色々な種類の方がいてね、まあほとんどの人が私との婚姻目当てだったり、金や名誉目当てだったのだけれど……。その中にも純粹に私の中にある病氣を知りたい人も何人かいたの。それは両手で数えられるくらいの少ない人数だったのだけれど、その方々は色々の努力をしてくれたわ。時には心理的なものじゃないかとか色々言って私の話を親身になって聞いてくれたりもしたの。」

「だけど、そんな人たちの中にもいなかったわ。貴方ほどにちぐはぐな人間なんて」

「……………」

ユエはいつものようなふざけたことを言わないでただ沈黙を守る。途端に心に闇が、恐怖の闇が押し迫ってくるような気がした。彼女の笑顔が打ち消していたもの、それがいきなり解き放たれ暴れ始める。彼女への恐怖、そしてその本質への興味。

本当は聞き耳なんて立ててはいけない。けれどね、どうしてもちいねえ様とユエの会話が気になってしまった。何を話すのか、どんな風なことになるのか。まさか、ここまで奥に入り込んだような話になるとは思ってもいなかった。

「貴方はちぐはぐね。貴方の心と体、それが見事に離れ離れ。人は心にあわせ体を作り、体にあわせ心が作られるのに貴方は両方ともがまったく重なっていない。人形に無理やり心を持たせたようなそんな感じ。動くものは動くけれど、やがて狂い壊れてしまう」

「そう……かもしれないね」

ユエはやつとのことで搾り出すような小さな声で一言だけ答えた。認めたくないとも言うように。

「私は好きよ。そういうちぐはぐさも。なんだかんだで優しいところとかも、なんとなくわかるわ。だからね、一つだけ貴方の人生に

助言をしたいの。

絶対に復讐で身を滅ぼさないで。復讐に身を任せ自ら鬼の道に落ちないで。復讐は幸せを生まないとかとはいわないわ。けれど、復讐して何かが変わったとき貴方はきつと何か大切なものを失ってしまふから。

私は貴方が好きよ。だから……復讐に身を捧げて死なないで」

ユエはまた押し黙り何も答えなかった。私は二人にばれないうちに——いいえきつともうばれているわ——こっそりと音をたてずにこの場から離れる。二人の領域にこれ以上入ってはいけないと、強い警告が心の中で鳴り響いていた。

？ 語らえば語る（後書き）

サブタが意味不だー……。

まあいい。考えてみれば結構変なサブタもあっただろうし。

それにしてもカトレア様が本格的にしゃべってるよ。うん。やばいね。ごまかしがきかないね。

誤字脱字、文法的漢字的致命的間違え。なんでも指摘お願いいたします。あと、今までのものでも魔法の使い方とかで悲しい間違いとありましたら指摘お願いいたします。まだ原作読み返していませんです！（涙）

挿話 カトレアの一人心地

「さて、やっとルイズがいなくなったみたいね」

「きかれては駄目な話でもするの？」

「あら、とって食べたりはしないからそんなにおびえないで」

広すぎる私の部屋についてこのメイド——ユエと私で二人つきりになってしまった。本当はさっきから二人つきりだったのだけれど、ルイズが聞き耳を立てていたからそんな風には思えなかったのよね。私はサイレントを唱えながらこのメイドをもう一度観察する。

薄紫色の長い髪に分厚い前髪。そこに埋もれるような小さな白い顔に青い瞳。ルイズよりも若干小さな身長に少しぶかぶかな黒いワンピースの上に白いエプロンという典型的なメイド服。言ってしまうとお人形のようなだった。可愛いお人形。けれど、今日の前で私を治療するための準備をしている少女からはかわいらしいというよりも、大人っぽさを感じる。本当は私と同じ年くらいの少女……何故かそんな気がするの。そんなことありえるはずはないのに。

失礼かもしれないけれど動作の一つ一つ、言動の一つ一つどれをとってもルイズよりも劣っていて子どもらしいのに、ふとした瞬間わざとっぽく見えてしまう。まあ、私は今始めて会ったばかりだから本当にそうなのかもまったくわからない。ただ、私の心がそう告げているだけ。確証なんてない。

「それでね、私からいくつか質問をしていい？ 絶対に答えて欲しいとかそういうわけでもない。ただの興味の質問。いいでしょ？」

「……わかった。何個でもいいよ。答えたくないものは絶対に答えないしね」

「あら、身が堅いのね」

「私の身は貝より固いんだよ」

胸を張りながらユエは答える。その様子があんまりにもかわいらしくてつい口元が綻んでしまうわ。

「それはすぐにフォークでさせてしまいそうね」

クスリクスリ、表面だけでお互いに笑う。どうでもいいようなそんな小さく些細な話。私はそういう世間話が好き。大きな冒険譚よりも小さな日常を。大いなる野望より小さき祈りを。私は普段からそう思ってる。それは私が外にほとんど出られないことが関わっているのでしょう。

ほとんど外にでられなかったから経験することがなかった日常。それを夢見ているから大きく残された人が悲しんでしまうような、冒険の物語よりも誰もが幸せそうな普通の日常が好きなのかもしれないわ。

でも、それは私にとっての異常……冒険物語なのよね。普通な人生を生きるという冒険が私に出来るはず、許されるはずなんてないの。きっと。

「さて、一つ目の質問。もう一度聞くけれど貴方は誰？」

「私はユエ。しがないただのメイド」

「そんなことが聞きたかったわけではないの。そんな答えをするくらいなら黙ってて欲しかったかもしれないわ」

「それはわがままじゃないの？ カトレア様」

いひひつと得意げに……面白そうに笑う。まあ勝手な答えよね。それに、私の質問の説明が結構足りなかったわけだし。やっぱり人と話す回数が人より少ないからこの手の会話は苦手なのかしらね？

「ごめんなさいね。私まだ人と話すのになれていなくて。今までも何人かのお医者さんとは話したのよ。けれど、それくらいだったから。じゃあ、もう一度質問しなすわ。あなた……いいえ貴方の中にいるのはだれ？」

私がこのちぐはぐにつけた結論はこう。このメイドの体と中の物は別の人のものだということ。もともと子どもの体があって、そこ

に無理やりに入れ込まれたというのがこの子。普通ありえないだろうし、魔法とか理論とかでは絶対に説明できない。それこそアカデミーに目をつけられるほどの異端の考え方。けれど、それ意外ではどう考えても答えにならないの。ちぐはぐがもし本当だとするならば、こんなちぐはぐになるのはそれくらい的大事じゃないとありえないはず。

ユエは少し迷った風にああでもないこうでもないと言ったりふったりするがやがて意を決したように言う。

「どこまで知っているの？」

がらっと誰が見てもわかるほどに雰囲気が変わる。今までのちぐはぐさはない。完全な私と同年代の普通の少女の雰囲気。明るくて活発で、だけど肝心なところでは恥ずかしがってしまうようなかわいらしい少女の姿。

「そうね、貴方の心と体がまるで違う人のものってところまでかしら？」

本当かどうかはわからないけれど……かまをかけてみるのも面白そうだから、ね。すると見事に当たりだったのか大きく体を振るわせる。わかりやすく可愛い子。

「あたりだったの？」

「鎌かけただけだった……の？」

「まあそうね」

「だまされました。意外にカトレアさんっていたずら好きなのね」

ええ、人が来ることは少ないからいたずらできることも少なく寂しいのよ。だけど、こんな風に親しみやすいとか何とも思ってもらえると嬉しいわ。とても。

「それで、答えは？」

「……まあつまりは正解かな？　そう、今ここにいる私はね私であって私でないの。この手の話はきくとカトレアさんの方が得意だろうけどね。」

例えばね、私は別の世界で生きていたの。だけどある日大きな犠牲を払って生まれ変わってしまった。そして、生まれ変わった少女の魂には居場所があるはずなかったのよ。そこで神様は適当な赤ちゃんの心の中に私を産み落とした。それでも心と体の年齢がかみ合いうわけなんてなくて。

まあ例えばの話なのよ」

そういいきって私をもう一度見つめてくる。今度は確認するように。さっきまでのただ純粹すぎる子どもの笑顔とは違ってもっと奥

のある、けれどやっぱりあどけないようなそんな感じの笑顔。それを私に向けながら優しく聞いてくる。

「……ありがとうね。真実を教えてくれて」

私は今彼女が言ったことを心で繰り返しながらもそう搾り出すような声で言った。静かに、感謝を込めて。



「さてと、治療用のものは完成したよ。後はカトレアさんがそれを踏むだけ。起き上がれる？」

「ええ」

そうそう、会話に夢中になっていて忘れていたわ。これが治療だったってこと。さてと、困らせないために早く治療を終らせなければね。

私はゆっくりとベッドから立ち上がりその怪しい文字列をゆっくりと踏む。正直不安もあったけれど、今の彼女なら任せてもいいようなそんな気がする。尤も、重要なのは結果なのだけれど。で、肝心の結果はというと……。

「少し楽になった？」

「ええ。だけど、どこかだるさが残っているような……」

「え？」

「そう。少しまだだるいわ」

彼女は完全に予想外とでも言うように口をあんどりとあけている。完璧に治るはずなのにとでも言うように。私は失敗したのかなと思いうも一度文字を踏みなおすけれど今度は何も変わらない。

「嘘でしょ？　ちょっと左手を出してくれませんか？」

「あ、ええ」

私はとりあえず倒れないようにベッドに座りなおしてから彼女に左手を差し出す。私よりもずっと小さいはずの少年と同じくらいの太さの腕。骨がうつすらと見えるくらいに肉がないような不健康そうな真っ白な腕。私はそれをみてちよつと悲しいきもちになる。けれど、すぐにそんなことは追い払い彼女に目をやるつと……痛い。少しだけ。私の腕に食い込む小さな指。何をしているかは全然わからないけれどとりあえず邪魔をせずに見守る。

何秒かそのまま時間が経過する。永遠とも思えるくらい長くわずか

とでもいえるくらい短い時が。そして、彼女はやっと顔を上げた。そしてゆっくりと私に詰問をするような迫力でといかける。表面は穏やかに、なだらかに。

「カトレア様は本当に外にでたいの？」

静かなすきとおった声が空間を裂く。さっきまでと同じ、何処までも同じ綺麗な明るい声。なのに、なのに、なのに！！

外に出たい？ 本当に？ 当たり前のように思い続けてきたことをもう一度自分に聞く。外にでて普通に生きたい？ 普通の貴族の女の子のように。

私が夢見てきた生活は普通にお母様とお父様に愛され、周りの子どもたちと仲良くしてそんななかで畑を耕しながら生きて行く。時にひどい徴税人が現れ私たちから全てを奪おうとするけれど、突然現れた旅の方がたすけてくれる。そんな人がいなかったのなら村のみんなが協力して追い払う。そういう平民の普通の生活を私は望んでいた。夢見ていた。

だけでもう一度現実を見つめてみよう。私は本当に普通に生きたい？

いろんな人に囲まれて生まれてきて、けれど本当はみんな私を愛

しているか定かでない。育って行く間も貴族と平民という差をたたきこまれ、普通に生きて行くのに役に立つのかもわからない礼儀やマナーを学びただ流されるままに生きる。魔法学園にいたりもするけれど、その中ではどうせ社交儀礼とか公爵家の娘だとかそんな記号にまみれて生きていくだけ。卒業すればすぐに婚姻を結ばされる。私の愛なんて関係ない。

私は貴族の娘に生まれてしまったその日から選ぶという行為が許されない。私は父や母に従順でなければならない。なぜならおおっぴらに反抗すれば二人が悲しむから。私はそんな二人を見たくない。

私はひそかにエレオノール姉様にあこがれている。自由に生きているお姉様に。結婚を拒み続け自分の道をきわめようとしているお姉様に。私が出来なかったことを簡単にやってのけるお姉様に。

結局私は自分の道を選べないかもしれないわ。だって弱いから。私なんて結局は被害者の振りをすることしか出来ないようなお嬢様だから。でもね、私は……。

「もう一度聞くよ。カトレアさんみたいにね。貴方は本当に外に出たい？」

「ええ。私はエレオノール姉様みたいに自由に生きて行くことはできないわ。けれどね、私は私なりに生きる努力をしたいなって思っただの。与えられているだけじゃない、選ばされているだけじゃない、そんな人生を送りたいの」

「よかった……」

ユエは安心したように笑う。無邪気な子どもっぽい笑顔で。幸せそうに何かを祝福するような笑顔で。

「カトレア様。まだだるいようなそんな感じはする？」

「あつ……しない。まったくしないわ。むしろ体が羽のように軽いわ。そう、今なら走れる気もする……」

すごい、健康ってこういうことをいうのね。普通ってこういうことをいうのね。すごいわすごいわすごい！

「ありがとう！」

「え、えっと無理はしないでね」

ユエは少し顔をほてらせながらも楽しそうにそう答えた。

挿話 カトレアの一人心地（後書き）

あれ、あれ、あれれれれ？

なんで挿話の方が本編よりも長いのかな？

どうしてだろうねえ？

そしてまたやってしまった。「計器はいらぬ、パイがある」というアリスの中のセリフが大好きでつい、そんなテンションの言葉がまじってしまった……。

なにより、カトレアさまあああ！ 私なんかが描写してすみません！

最後に、誤字脱字など致命的な間違いがありましたら報告よろしく
お願いいたします。

？ 城、城、城！！

「それにしても、にぎやかだね。……道が狭いのは玉に瑕だけど」

「玉に瑕？ でも、確かにそうよね。いつもいつもにぎやかで私は王とが嫌いじゃないけど。それに、道が狭いのは侵攻されにくくするためなんだからしょうがないの」

私は彼女が知らないことを説明しているということがちよつと得意で、胸を張って答える。すると、ユエはへえーとでも言うように目を輝かした。やっぱりずっとメイドをしていたから王都に来るのは初めてなんだ。まあ私だって、月に一度くらい姫様の遊び相手という名目でやってきていたけれど、王都を純粹に観光したことはない。だって……。

「それにしても匂いがひどいよおー。私のもともとすんでいた領地だってここまでひどくはなかったはずだよ？」

街中に出て行ったことはなかった気がするけど、笑いながら付け足す。まあそれが普通の貴族。私だってなんだかんで護衛が大変とか言われ続けているうちについて今日まで街中には出られなかったし。

それにしても、やっぱりこの臭さはいただけじゃないわ。ドアは閉めてあって一応密閉空間なのに匂いが外から染み出しているなんて。

「早く通過してしまいたいわね」

「でも、やっぱり街中をみたいな」

「よく耐えられるわね……」

そんなどうでもいいようなことを話しながら私は回想する。こんなことに至ったわけを。



「さて、貴方はカトレアを治療してくれましたが、代価に何を求めますか？ 私たちに出来ることをいたしましょう」

お母様は高価そうな長机をはさんで反対側にいる小さなメイド――ユエに向って聞く。今日はお父様もいるから何時ものような厳しいお母様というより、高貴なお方という雰囲気が強くなっていて、正直お母様らしくない。けれど、まあしょうがないのよね。今日のはれっきとした会談だから。

部屋にも一応お母様がサイレント（恐ろしく強い）をかけてあり、どんな話をしても多分外にもれることはないでしょう。

さて、聞かれている本人のユエはというとさすがに何時ものような感じではなく、緊張した面持ちで答えた。

「私はアンリエッタ姫様にこっそり会える機会を設けてもらい、誰にも聞かれず話すことができればそれだけで充分です」

ユエは静かにそう言ってお母様の瞳をじっくりと見る。するとお母様は少し目を逸らす。お父様に対してもそうやるがまた目をそらされてしまった。この家の真の実力者がお母様だとさとしたようね。

「それで……出来ますか？ もし出来ないのであればルイズの専属のメイドという形でルイズについて王都に行きそこで少しでも話せればいいのですが……」

もう一度ユエは辺りを見回す。すると、お母様は溜め息をつき、

「それくらいなら出来ます。さすがに誰にも聞かれず話すのは無理ですが、善処しましょう」

と答えた。途端にユエは何時ものすばらしい笑顔を浮かべてぺこりと礼をした。

◆ ◆ ◆
「ふーやっとなつたあ！」

ユエはずっと腕や足を曲げていたのが疲れたのか、大きく背伸びをする。私も背伸びがしたい気分だったけど、この洋服で背伸びをしたらシャツが上に引っ張られおなかが見えちゃうから止めておいた。さすがに私だってそういうことは恥ずかしいんだからね！

それにしてもユエって実は体力あったのね。私なんて始めて馬車乗ったときは酔うわお尻が痛いで大変だったもの。考えてみれば私の誕生日会ときやメイド服で参上した時も多分馬車に乗ってるって思われるから、実質何回目かはよくわからないんだけど。

「それにしてもさ、さすが王様が住むお城だね！ ルイズの家よりもずーっと大きいよ〜」

「ばっばか！ あったりまえでしょ？ こっちはちいちゃな一貴族で向こうはこの国の王族なんだから」

「でもルイズの家も充分大きいと思うよ？」

まあ、それもそうかもしれないんだけどやっぱり格が違うのよ。格が。王様だって今は入り婿だって言うけれど、ものすごく有能な人だって聞くし。

そんな話を話していると、いつの間にか城門を通り過ぎ、お城の入り口部分の広いところにいた。床には真っ赤な絨毯がしかれ、天井には大きなシャンデリア。壁際には何人ものメイドさんが並んでいる。私はここにきて何回かたっているから慣れているけれど、ユエは初めてだしおなじメイドだったので少し顔を引きつらせていた。

「えっと、ヴァリエール公爵家の三女のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様であっていますか？」

メイドのうちの一人、それもメイドの中で一番身長が低く幼いと思われる少女がたどたどしく聞いてくる。

昔の私だったら失礼じゃない！ と怒っていたかもしれないが、今の私は違う。だから、朗らかに微笑んで「ええ」と答えてあげた。その様子を見てユエがほっとしたような顔をしたのには気がつかなかったけれども。

「では、アンリエッタ姫様の部屋までご案内させていただきます」

そのメイドは軽く一礼するとゆっくりと廊下にむかって歩き始めた。

？ 城、城、城！！（後書き）

更新をしばらく停止していたら貯金が6話になっている（涙）

感想などありましたら、書いてくれると嬉しいです。

特に話がぐちゃぐちゃになってわかりにくくなってないかは気になるので……。

では

？
敬語注意報——言い訳無用なんだからね！——
（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

——多分。

？ 敬語注意報——言い訳無用なんだからね！——

ゆっくりと足音を立てずに歩いてゆくメイドの後ろを私たちは静かについてゆく。思うならばあの日お母様の書斎に向かったときと同じような気持ちね。音を立ててはいけないという、のろいがかけられてしまったかのような――。

これはいつもここにくると感じる。この城の何百年にも及ぶ歴史というものなのかしら？ まあ、あのアンリエッタ姫様の所にくるのも数回目だしやっぱりなれてしまうものね。

だけど、この階段の執拗までの多さと廊下の長さ……ふざけてるわよね？ 公爵家の娘をこんなに歩かせる？ 貴方たち何様のつもりよ！ と切れそうになったけれども、ここを作った人はもうずっと前に死んでいるはずだからしょうがないわね。

まあこの道のりの長さに疲れているのはユエも同じようで、退屈しているのか何回かこっちに視線を飛ばしてくる。けれど、口は開かず首を左右に振るだけで理解したのかすぐに気を取り直して歩き始めた。

その時、こっちにむかって走ってくる大きな影が……。私たちに近づかることはなくすんでのところで私の左手（つまりはユエと反対側）の壁にぶつかると思うと、ぴたっと急停止してみせた。なんか大道芸を見ているような気持ちになったが、笑いを抑える。

この人がもし国王——まあありえるはずないわ。こんなところを走っているわけなんてないはずだ物——でも、大公国の関係者だったりしたら面倒くさそうだしね。

とりあえず、礼儀としては見てみぬ振りなのでしようけれど……たすけてあげるべきかしら？

「大丈夫でしょうか？」

私は壁にぶつかるすんでのところでストップしている大きな影（マントが大きいだけ）の後ろから話しかける。

すると、はっとしたようにその影はいきなり振り返る。少々からだが重そうだけれども。その人は顔が少しこけた中年のおじさん——多分お父様と同じ年くらい——だった。しかし、それに反し威厳に満ち溢れ、伊達にはまと言えないような雰囲気を感じる。顔はあくまでもつかれきった優しいおじさんという感じなのだけれどね。

「君はヴァリエール家の……三女かね？」

「あ、はい」

きっと私の髪とか身長とかで判断したのね？ それにしても、この方は誰なのかしら？ 結構な権力を持っているような気がするのだけれど。

「そうか、ならヴァリエール公爵によろしく言っといてくれ」

「は、はあ……。えっと、でも名前……」

気づいたらその方は煙のように消えてしまった。どうやらまたあのスピードで走りだしたみたいね。転ばないといいのだけれど。

「ねえ、ユエ？ あの方は誰だと思う？」

「多分現国王ではないかな……。でしうか？」

「公式の間でもないんだから敬語はやめてよ、って国王!？」

……えつとえ？ はい？ あの走ってたら前を見るのを忘れ転びかけた頬のこけたすすけた背景を感じさせるおじさん、それもしかもとりあえずマントは豪華なのにそのマントが重くて仕方がなさそうで、でも威厳はあったわよね。威厳は。見た目だけで中身は測れないって言うし……。ね？ はい？

まあ、いいわ。気にしないことにしましょう。

「アンリエッタ姫様の部屋に着きました」

「あ、ありがとうね」

「礼には及びません。私は私の職務をまっきやん。すみません。ごめんなさい」

噛んだみたい……、途中までうまくいえてたのに。こっちも気にしないことにしましょう。メイドの子も空気を呼んで四回姫様の部屋の扉をノックする。

「入っていいわ」

一ヶ月ぶりの姫様の声。やっぱり綺麗。私なんかと違って。なんて考えているうちにユエに手を引かれて部屋の中に入ってしまった。パタンと扉がしまりそれと同時に……。

「ルイズ！ 久しぶり！」

「姫様！ 息がぐる——じい……です」

「あっ、ごめん。かわいいからつい。駄目？」

微笑みながらアンリエッタ姫様は言う。さっきまでだきつかれて息が苦しくてしょうがなかったのに、こう微笑まれると全て許してしまう私は優しすぎるのかしら？ でも、姫様だからいいわよね。

「それにしてもこの子はだれ？」

「彼女は誰……もしかして噂の姫様？」

清楚なデザインの水色と白のワンピースに身を包んだ姫様はユエの方に視線を軽く投げる。えっと、そうよ。今日がはじめてよね。ユエと姫様が会うのは。

私はいい仲介役になるべく姫様とユエの間に立ち紹介する。

「そう、この方は私の友達でこの国の姫様アンリエッタ姫様よ。そして、こっちの紫のちっこ……かわいいのが私の友達であり貴族のメイド、ユエよ」

ちっこいと言いついそうになったら足を踏まれたわ。もう姫様の前なのに止めて頂戴よ。

「よろしく……お願いいたします。姫様」

ユエはさすがに姫様の前ということでもいつもの軽い口調にはしないように気をつけているみたい。この子も緊張しているのかしら？ユエも人の子だったのね。

「えっと、ユエさん？　よろしくね。あとルイズ、敬語は止めなさい。ユエさんもね」

「ならさん付けは止めてくださいよ」

——まったく姫様の前でなんていう不敬。二言目で敬語が崩れるなんて公式の場とかに出始めたら大丈夫なのかしら？

？ 敬語注意報——言い訳無用なんだからね！——（後書き）

というわけで国王との何気ないご対面。

し・か・し、何の伏線にもなりませんwww。

だってあの人そろそろ死なないと王位の空席って奴が起きなくなっ
てしまいますし。でも、キャラがおかしい気がする。

感想やきつつういご指摘などなど、ありましたら感想またはメッセ
ージによりしくお願いいたします

では

挿話 アンリエッタの杞憂

暇、という言葉が多分今の私を表すのに一番適當。だって、暇なんですもの！

貴族の女の子から平民の女の子まで生きている女の子は小さな頃に一度は姫様という存在に憧れるものだと言はれ、それが私には信じられないわ。本物の姫様だというのに。

だって、まず外に出ることを許されないのですよ？ お菓子をたくさんほおぶることが出来てもお馬さんに乗ったりすることは許されないし、何よりもお父様に最近ほとんど会えないのよ？

ルイズは私の部屋を見て豪華で素敵とか服を見てすばらしいとか何とか言うけれど、私にとってそんなことどうでもいいことではないの。服や部屋が豪華でも貴方みたいに簡単に脱走することも出来なければ、親に甘えることも出来ないのよ？ 信じられる？

だから、私はルイズという友達が大好きよ。私の暇を紛らわして私と一緒に遊んでくれて忠実で優しい私のお友達。

なのにルイズだったらどうして最近遊びに来てくれないのよ！？一ヶ月に一度は絶対にくるって言ったのにもう二月も私のこと放りっぱなしじゃない！ ひどいわ、あんまりよ。私毎日毎日ルイズからお手紙来ないかなとかルイズ早くこっちに遊びに来てくれないかなとか、ルイズもしかしてお病気なのかしらとか色々考えていたの

になによ！

先日彼女からお手紙が届いたの。こっちについに遊びに来てくれるって。私、本当にその時ばかりは純粹に喜んだわ。だって、ルイズが遊びに来てくれるのよ？　それも久しぶりに。

けれど、文面を読み続けるたびに段々ふつふつと怒りがわいてきたわ。

まず、彼女は私との約束を忘れてたの。一月に一回はくるという約束を忘れてたの。それくらいならまだ許せるわ。彼女だって忘れることはあるんですから。

でもね、二つ目にはさすがに私は許せなかったのよ。新しい友達が出来たので一緒に来ますですって？　ルイズ、ちょっとどういうことなの？　私はずっと待ってたのよ？　貴方が来ないかなってずっとまつたのよ？　なのに、それはあんまりじゃないかしら？　お仕置きしてあげないと。

なんて思いながらも彼女たちが遊びに来る日が来てしまった。結局ルイズに対するお仕置きもその友達との接し方もなんにも考えられなかった。だって、なんだかんだでルイズが遊びに来ることが嬉しくて。本当に嬉しくて、嬉しくて……。

お仕置きとか接し方とかそういうのの前に久しぶりに友達と会って生き抜きできるってことが嬉しかった。魔法でも使えればもっと楽しかったのにと後悔したりもした。ほんと、お母様たちはどうし

て中々杖の契約をさせてくれないのでしょうか？

その時、ドアからコンコンコンと四回ノックの音が聞こえてくる。あの小さなメイドの子だわ。ということは彼女たちが来たということだね。

「入っていいわ」

——私ながらなんて強気。どうしてこんなに声が強くなってしまったのでしょうか？ 緊張してるつもりなんてないのに。

すると、三人の少女が私の部屋におどおどと入ってくる。一人は小さな金髪のメイド。二人目は桃色の髪の見慣れた少女、ルイズ。そして三人目が彼女の言う友達みたい。紫色の長い髪に瞳。身長はルイズとおなじくらいでかわいらしい感じの子。でも、どうしてメイドの服なんて着ているのかしら？

貴族だと聞いていたのに。家名は書いてなかったけれども。

そんな事を考えているとパタン、と音をたてて扉がしまった。メイドが出て行ったみたい。さて、ごあ……私はこの瞬間理性を手放した。もう色々考えるのめんどくさいわ。私はルイズが好き、大好き！ それでいいじゃない！

「ルイズ！ 久しぶり！」

私は気がついたら駆け出していて扉の前に立っていたルイズに向かってダイブしていた。手が自然と首を絞めるようになってしまう。

「姫様！ 息がぐる——じい……です」

ルイズったらもうどうしてこんな場面でも敬語を使ってくるのかしら？ でも顔が本当につらそうねえ。少しだけ手を緩めてあげましょう。お友達もぽかんと口をあけているみたいですからね。そして、彼女が幾分か楽になったところで、こう付け足す。

「あつ、ごめん。かわいいからつい。駄目？」

首をかしげるのがポイント、とこの前メイドの子が言っていたことを実践する。顔は自然に微笑んだままだっけ？

すると、ルイズは安心したように何時ものかわいらしい笑顔を見せてくれた。やっぱりかわいいわ。さすが美少女。

「それにしてもこの子はだれ？」

私はまず気になっていたことを聞く。お友達ってことしか知らなくともしょうがないし、せめて名前くらい名乗ってもらわなければね。と、彼女も私と同じようなことを感じていたのか、

「彼女は誰……もしかして噂の姫様？」

と、ルイズに聞く。それにしても、噂の姫様ってルイズ私のことどういつていたのかしら？ 内容によっては後で調教が必要なのですけれど。

すると、ルイズはすごく嬉しそうな顔をする。私たちのことが誇りだとも言うように。ストレートに嬉しいわ。

「そう、この方は私の友達でこの国の姫様アンリエッタ姫様よ。そして、こっちの紫のちっこ……かわいいのが私の友達であり貴族のメイド、ユエよ」

え、メイド？ 貴族のメイドですって？

まあ、いいわ。私なんて外にも出たことない箱入りのお姫様なんですからそういうことがあったとしても、知らなくて当然ですわ。あとでマザリーニ先生（教育係兼任なのでこう呼ばれている）にきいとかなくっちゃ。

「よろしく……お願いいたします。姫様」

ユエさんはいきなり改まったような態度で綺麗に礼をする。本当に動作が美しかった。たった礼をしていただけなのに。もうこれだけで彼女を認めてもいいようなそんな気もしてきてしまうわ。

「えっと、ユエさん？　よろしくね。あとルイズ、敬語は止めなさい。ユエさんもね」

「ならさん付けは止めてくださいよ」

私が一言言っただけでいきなり態度を崩してくれた。ちょっと嬉しい。私って結局お姫様だからみなさんどう私が言っても姫様とか姫殿下なんてよんでくるし、敬語も丁寧語も面倒くさいったらありやしないのに。

ルイズだって何度あっても最初はずっとこんな態度なのよ？　本当にひどいと思うわ。だから、嬉しいの。こういう態度って本当の本当にまれだから。

「わかった、ユエね。じゃあ、私のことはアンって読んで。勿論ルイズもよ」

「で、でも……」

ルイズったらほらまた渋る。これの何処がお友達なのかしら？

「ねえ、ルイズ。そうしようよ。ここではみんな平等にアンのお友達だよ?」

「わかったわよ。アン、これでいい?」

ルイズは少ししてれながら私をアンとよんでくれる。ユエの方を見るときもう今にも私みたいルイズに抱きついてしまいそう。なのに、友達よりも妹よりもお姉さんっていう感じがするわ。

「ええ、それでいいのよ」



そのあとしばらく二月分のお喋りをした。私とルイズが会えなかった二月分の。長くて短かったような二月分の。ユエが話すルイズの話とルイズが話すユエの話はどこかみ合わなくってとっても面白かった。私も何か話せばよかったんだけど、何も話すことがなかった。しょうがないから仲良くなった小さなメイドさんの話をしてみる。

ユエとルイズほどには仲良く慣れなかったのだけれど、ちょっとした瞬間に目が合うとすごく幸せな気分になったこととか、彼女が私の好きなクッキーを手作りしてくれた話とかそんな他愛もないことばかり話してた。彼女たちはどうでもいいような私の話に聞き入

ってくれて、少し嬉しかった。

ただね、ちょっと遠い気がしてしまった。

ルイズがルイズでないようなそんな奇妙な錯覚。私とおままごとをすれば必ずおもちゃを取り合ったルイズから、一歩下がったところからおままごとをじっと見ているルイズへ。

そんなの嫌なのに、本当はおもちゃを取り合うのになんだかんだで奪うってことがすきなのに、一人だけ大人になってしまいそうな感じがする。まだお互いにちいちゃいのに。もっと人に甘えて駄々こねて遊びまわって昼寝して、それで充分みんな笑ってくれるのにどうして？

ユエのせいだとかなんとか叫びだしそんな自分が嫌い！ 人のせいにばかりしている自分が嫌い！

お父様に会いたい？ 自分で会いに行けばいいのよ。

勉強したくない？ 勉強道具を壊して先生を困らして追い出してしまえばいいのよ。

外に出たい？ 速く魔法を勉強して門の兵をみんな倒す、いいえそれじゃあ遅いわ！ それならば私が武力を持てばいい。私が戦えばいいの。お父様から与えられた兵隊さんに頼るんじゃないで私が戦うの。

そして、ルイズが遠くに言っちゃいそうで怖い？ ユエと一緒に大人になってしまいそうで怖い？ 一緒に遊びたい？ もっとけんかしたい？

——それならさルイズを自分だけのものとしてずっと閉じ込めればいいじゃない。

違うのはわかってる。本当の正しい答えは知っている。けれど、そうしたら私は……どうなっちゃうの？

「私ね、アンにプレゼント持ってきたんだ」

「えっ！ 私にはないの？」

「勿論三人分。友情の印だよ！」

ユエとルイズのかわいらしい小鳥のような声が耳元で聞こえる。どこか離れた現実みたいに。私と二人の間には確固たる溝があつてそれ以上近づけなくて、でも曇ったように見える世界。幸せと自由に満ち溢れた彼女たちの世界が私の近くには確かにあつて。

「あれ、アン聞してる？」

「うん。何してくれるの？」

興味はあるからそれを素直に表に出す。向こうからはきっと全部見えてしまうんだ。私は向こうの世界に渡ろうとしても船がないのに、向こうには空を飛ぶほうの船があるんだ。こっちの世界で何があるかと全部丸見え。なのに、こっちからはぼんやりと遠くの方に何かがあることくらいしかわからないんだ。不公平。

彼女は左手でエプロンのポケットを探る。そして、その小さな手に三つのペンダントを持ち私たちに見せる。それはハートの形をしたペンダントだった。それぞれ、桃色、紫、白、に塗られている。私に変な貴族たちから貰ったペンダントとはまるで違い年相応のかわいらしいもの。

「これこれ！　とりあえず受け取って。使い方を説明するから」

「使い方？　なんかに使えるの？」

「そうだよ。だから、早く首にかけてよ！」

ルイズは驚いたような顔をしながら桃色のペンダントを手取る。私も同じように白のペンダントを取った。

きっと、二つは髪の色に合わせて私のは服の色に合わせたのでしよう。いつも白い服を着ているから。純白しか着ちゃいけないから。

ユエは私たちがペンダントを手を取ったのを確認するにつこり

笑いながら首にかける。何故か右手は使わないで左手だけで上からざぶっとかぶってしまった。私もたまに首にロザリオをかけるときのようにペンダントを首にかける。遅れてルイズも慣れない手つきでペンダントを首にかけた。

「かけたね？　じゃあ、使い方を教えるけれど絶対に他の人に私が渡したって知らせちゃ駄目だよ？　私こんなの何十個もつくれないもん」

そう言ってから馴れた手つきで杖を持ちサイレントを唱える。ただのペンダントなのに嚴重だなーと私は心のどこかで考えていた。

「ルイズ、まずはペンダントを裏返して。其処に鏡がついているでしょ？　それに自分の顔を映し出して。アンは自然体でいいよ？」

「鏡？　どうしてそんな高価なものを……」

「鍊金で少しづつ作ったの。大変だったんだからね！」

えっへんとユエは胸をはって、ほらほら早くと私たちをせかす。ルイズはちよっとむすっとしたような顔をしながらも鏡を覗く。

純粹な鏡、黒いほこりとかも一切映らない純度100%の鏡。これを鍊金で、しかもハートの形に整えながら何てユエはすごいなあと、そして私もそんな風に魔法が使えるようにになりたいと思う。

「じゃあ、とりあえずルイズ。アンと話したいって鏡を見ながら念じてみて。言葉には出さないんだよ！」

「どうして？ 目の前にいるじゃない」

「いいから、マジックアイテムなのに使いこなせなきゃしようがないじゃん！」

マジックアイテム？ 自分で作ったの？ すごい！ けれど、目指すにはちょっと重いかもしれない。

ルイズはそんな私の気持ちにはきずかず、むすっとした顔のまま鏡を見つめる。鳶色の綺麗な瞳は鏡の心をわしづかみにしているような感じがする。と、次の瞬間頭の中にルイズの声が響く。『アン、アン、お話ししましょう？』という甘い甘いルイズの声が。どうして？

視線をルイズに向けると、ルイズもまた驚いたように目をぱちくりさせながら私を見つめ返す。私の声が届いたとでも言うように。

「効果はわかった？ 鏡を見ながら念じればね相手に念が届くの。すごいでしょ？ 一回通じちゃえば鏡から目を逸らしてもいいし、年が届くのを止めたければ両方がなくなってもう止めたいと思えばいいの。それに、向こう側にいる人の周りの人の声も全部聞こえて来るんだよ？ すごいでしょ？」

ユエはにっこり笑いながらそういうけれど、私はあまりのことに言葉を失ってしまう。いたずらが成功したみたいな幸せそうな顔をしているユエ。子どもだよ。私と一緒に驚いているルイズだってまだ子ども。私から遠くはなれることもきつとない。

私たちはもうちょっとだけならばなかよしでいられる。明日からはどうか知らないけれど、今日はまだ一緒に肩を並べて歩ける。

それに、私たちはつながっているわ。このペンダントでどこまでも、願えば何処までも。私が本当に女王になっても、彼女たちが結婚しても。死ぬまで永遠に――……。

その時、ユエが私の左側を嫌にゆっくりとしたスピードで通り過ぎてゆく。そして、私にしか聞こえないくらい小さな声で呟いた。のろいの言葉を。

「貴方のお父様は、今の国王は来年病気で死ぬよ。そしたら貴方のお母様はきつと女王にはならない。だから貴方はお姫様として今よりも厳重に閉じ込められるの。それでね、その時も貴方が何か国民のためになりたいとかしっかりとした姫様になりたいとか望むなら私と話したいと願ってね。私は助けてあげる。私は占いが出来るの。だから、貴方のためになれるよ。貴方の友達なんだから、頼ってね」

嘘だ!!

叫びだしたい！　なんでユエが、さっきまで子どもだったユエがどうしてそんなことをいうの？　いじわるな大人みたいに。どうして、お父様が病気で死ぬの？　どうして閉じ込められるの？

根拠なんてないのに！　と叫びだしたい。けれど、彼女が言うこと事態が根拠に思えてしまう。ユエが言うとうソに聞こえない。なんで、なんで！！

「最後に、もしも外にでれたなら裏を見てみなよ。表通りじゃなくて裏通り。きっとね貴方が信じられないような光景が広がっているよ」

どうして、マザリーニ先生のように私を貴方と呼ぶの？　それじゃあまるで友達じゃない！

「どうしたの？」

「なんでもないよ！！」

力強く叫ぶ。今度こそは叫ぶ。ルイズは私の友達。ユエはどうか知らないけれど、ルイズだけは絶対に私の友達で私の味方！

挿話 アンリエッタの杞憂（後書き）

というわけで改変されたアンリエッタさんでしたww。

アホリエッタとか色々いわれてますが、この話の中では孝謙天皇化していただきます。っていうか、悩める美少女って可愛い！

それにしてもどうして挿話の方が本編の2倍くらい長いんだろうか？
（カトレアさんの時もそうでしたが）

なお、この設定何？ みたいなことがありましたらご連絡お願いいたします。

？ 嵐の後の静けさ

「お母様、お母様！ ユエは？ ユエはどこ？」

「嗚呼、あのメイドなら自分の領に昨日かえっていました。それがどうかしましたか？」

どうかしましたか、じゃなくて、どうしてユエ帰っちゃったのよ？ それじゃあ、私との出会いなんかどうでも良くて姫様と接触しただけみたいじゃない！ そんなの寂しいよ。なんで私に何も言わないで。

その時、ふと思い至った。

メイドの寮の中の彼女の部屋に何かが残されているかもしれない。そう気づくと自然と私の足はお母様の部屋から飛び出しメイドの住む寮にひとりで走り出す。広すぎる庭のずっと向こう側にある古びた木造の二階建ての建物。それがメイドとか使用人の住む寮。そして、彼女の部屋は一階の日がよくあたる部屋だった。

あの時忍び込んだから良く覚えている。

「ルイズお嬢様どうしましたか？」

いつかの台を一生懸命おしていたメイドが突然背後から声をかけ

てくる。最近はお母様たちがいなければ向こうから積極的に離しかけてくれるようになった。さすがに、呼び捨ては無理みたいだけだ。

「トウネ、特に問題はないから自分の仕事を済ませたほうがいいわよ」

「あっはい、失念しました」

「失念って……」

「あ、私は行きますね」

まったく、最近は何事でもぱかりじゃない。お喋りが好きなのはいいけれどお仕事ちゃんとやらなくちゃ。

まあ、遊んでばかりの私がいえるようなことではないんだけど、貴族のお嬢様には魔法と勉強と遊ぶことしかやることがないんだからね。

とにかく、彼女の部屋に行かなくちゃ！ 私が行かなくて誰が行くっていうのよ？ 誰がああ強固すぎるロックをとけるっていうのよ？

私は今走っている。何かのために。今まで走るなんてことはほとんどしなかった。ドレスのすそをまくりあげてゆっくりと歩いてば

つかだったから。走る必要なんてなかった。みんな私を待っててくれた。

痛い、足が付け根が先っぽが。何時もはこんな風に動いたりしなかったから、私という少女の体重がひどく重くのしかかる。

それなのに、どこかその痛みが心地よい。そろそろ気温も冷たくなってきたいてもうすぐで冬が来る。その乾いた冷たいささるような風さえもが優しく撫でてくれるように思える。

私は使用人の使っている寮に入ってゆく。右側の手前から三番目の部屋。

「ついた……」

目の前にはいつか壊したと思った扉がまるで何もなかったように聳え立っていた。ためしに、四回ノックしてみる。勿論反応はないみたい。次に私はノブを何回か回してみた。ノブはキュイキュイとこすれるような嫌な音を出すだけで扉は開かないみたい。ならば……。

私は杖を振り上げる。彼女と同じように右手で。そして、勿論成功するわけのないファイヤーボールのスペルを唱えはじめた。威力はこの扉が壊れてしまうくらい。長くもなければ短くもない詠唱を淡々と読み上げるように呟く。恥ずかしいから周りの人には聞かれなくなかったもの。

「フアイヤーボール！」

詠唱が完成して私は心の中では世界中に響くくらいな大声で、現実には隣の人にも聞こえないくらいの小さな声で叫ぶ。扉に火がつくことなんて勿論なく、扉は部屋の奥の方に吹っ飛んでいったそのあと木っ端微塵に割れてしまった。

まるで、いつかユエが庭に植えてくれた「サクウラ」という不思議な桃色の花びらを持つ木の花がちょっとひっぱっただけでぱりぱりと割れてゆくように。

「……う……あ」

その部屋の中には何もなかった。前に見た部屋とおなじ部屋には見えないくらいにその部屋は狭く、唯一ベッドが置いてあるだけだった。棚も何もない、ただ寝るだけの部屋。

その生活している気配というものが残ってないこの部屋の真ん中に、一つ手紙が置かれていた。宛先はなくなっていただ「ユエより」と書いてある完結な手紙。封筒には封の判がおされている。

私宛とは限らないわ。でもね、これを見つけれられるのは私だけだから——……。

あなたはいつ、どこでこれを読んでいるのかな？

それとも、あなたには届かないうちに捨てられてしまったのかな？
私には未来のことははっきりとはわからないけれど、あなたがきつ
と読んでるってそう思うよ。

ルイズ、いきなりいなくなっちゃってごめんね。

何回もヴァリエール家から出て行くときに女々しくも振りむいちゃ
った。

何回もルイズがいる部屋見て、けれど決意を鈍らせちゃ駄目だって
……。

ひどいじゃない！ 友達でしょ！

私のまぶたの裏にはルイズがそう叫ぶ姿が浮かんでるよ。

いつもいつも一緒にいてね、ルイズのことは結構わかってるつもり
なんだよ？

クッペリーパイが大好きだってこととか、実は不器用だということ
とか、努力家だってこととか。
知ってる。ちゃんと見てる。

それだけにね、私がいなくなることを悲しんでくれるような気がし
てたの。

もし違ったのならば笑い話だけだね。
とんだ思い上がり。

だから、不安になっちゃったの。

このまま幸せだったら私も本当の気持ち忘れちゃうって。

私ね、これからブリミル教に復讐しようって思ってるんだ。

何をいきなりとか、私にこれを読ませてどうするのよとか思うかもしれないけど伝えたかった。

私はただたんにメイドになったんじゃないの。アンリエッタ姫ともそのために知り合ったの。

そんな裏ばかりな女の子なの。

でも……ルイズのことは友達だと本当に思えたよ。

ありがとう。

幸せなひと時を。

最後に

人の部屋に勝手に忍び込むなんて最低！　いつか絶対に怒ってあげるもん！

T o. 最愛の友人ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールへ

b y. 貴方の友人ユエ・デュ・ラグナロクより

？ 嵐の後の静けさ（後書き）

異常で「それを奇跡と呼ぶのなら……」は終了です（＊＾|＾＊）
赤髪よりずっと量というかボリュームは少なかつたんですけれど、
きつかったんですよ？ 途中でストックが切れそうになったり。ス
トックが切れそうになったり。

否、だからって感じなんですけど。中身薄いし。うん。

誤字脱字、設定間違いなどありましたらお教えくださいまし。

キャラしょーかい3と次回予告(笑)

というわけで、まずはとーじょー人物紹介

ルイズ

今回の語り手。基本的な原作知識はとりあえず省略。

まだツンデルイズではないし、ユエと仲良くなったせいで変に達観している。

多分6、7歳なんだけれども大人っぽい（おとなっぽすぎるのは気のせい）

やっぱり魔法は使えないけど、ユエのお陰で其処まで曲がらずむしろ変な魔法まで何とかできる爆発を短所としてみていない。

メイドとかとも仲良くしていたりする

ユエ（名前が長いので省略）

貴族なのだけれど、とある理由でルイズのメイドをやっていた。

水と土でとりあえずラインまでいけるけれど、その他不明。

変なマジックアイテムを作ったり、魔法円を使ったり謎のルーンを使ったり、大人っぽいと思ったらただのロリだったり、よくわからない子。

また、メイドの仕事は下手みたい。そして、何故か怪我を全くしない。

<http://www.kakikaki.com/bbs/view.html?594326>にてイラストが見れます（みてみんなには上げられなかった）

カーリーヌ

ルイズのお母様で無言の圧力を放っている怖い人。

さすがにユエ相手に本気で魔法を一回も使わなかった。

カトレア

病気の次女。

貴族として生きたくない事から自らに何らかの呪縛をかけていたけれど、ユエによって開放された（あれ、この辺具体的に書き忘れたかもしれない）

アンリエッタ（アン）

無邪気だけど寂しがりやな普通の少女。

まだ魔法を使わせてもらえなくて、いつも守られてばかりいることに不満を感じている。

《次回予告》それはユエがヴァリエール家にくる年の春にはじまった。

「はじめまして、エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールこと、ヴァリエール公爵家の長女よ。よろしくね」

俺の目の前ではのんきな自己紹介が行われていた。ここっというのはつまるところ貴族の息子や娘たちが未来のために適当な友達を作る場所。教育なんて所詮二の次で本当に重要なのはこういうところなんだ。っと、おっと俺の番がきたな。

「俺の名前はレント・フォン・バルソビアナ。しがない伯爵家の長男だ。よろしくな」

とりあえず貴族っぽくない適当な奴って言うイメージがついてくれればいい。できるだけ有名貴族は取り込むべきなんだろうけど、家なんて正直どうでもいい。重いだけ。

……なんて思ってたんだけどな。今から四ヶ月前の俺、家なんてどうでもいい？ 笑わせるな。お父さんがどうでも良からうが弟は守んなければならないじゃねーか。

今更後悔してもしようがねーけどな。

——ユエとルイズが友達になった裏の物語、エレオノール姉様とある貴族の少年レントの物語が始まる。

V S 黒い怪物（前書き）

短編です W W W

ヴァレンタイン企画をやるつもりだったのに。

VS 黒い怪物

朝がくる、それはすがすがしく人々の気持ちを上向きにし、夜の闇が消えるというすばらしいことだ。

人間というのは周りが闇だっていうだけで気持ちが沈んでしまったりと実に単純なだけに、朝や光というのはすばらしく素敵なものに思えてしまうのだ。

例えば、吸血鬼が日の光の中を歩けないのも、怪物が盛んに活動するのも夜中であるのも、幽霊は真昼間には普通出ないこともその考えに基づいている。今ここではこのような生物が実在するかは考えない。この生物たちへの闇のイメージが光で打ち消されるといって人間が考えているというのが重要なのだ。

そのため、朝というのは夜に泥棒や殺し屋が忍び込んだりしない限りはふつうはすばらしいものなわけだ。

それにならって、今日もヴァリエール亭はすばらしい朝をむかえ

……

「きやあつああつ！　な、黒い怪物がでたあ！」

られなかった。

大きなヴァリエール公爵たちが暮らす本館とは庭を挟み大分離れたところにある使用人用の寮でとある子どもの叫び声が鳴り響く。その叫び声は庭を飛び本館の端っこにある小さな部屋——ルイズの部屋まで届いてしまったのだ。

ルイズのことを使用人とかかわりについて説明するのなら、貴族の娘でありながら使用人一人一人の名前と顔、声までも全てを把握しているという少女というのが一番わかりやすいだろう。

しかも、その上で気軽に話しかけたりもするため使用人から慕われている。勿論、ヴァリエール公爵はそんなことを知っているわけがないので、ここでは貴族と平民の差がないとか別にそういうわけでもないのだが。

そのため、ルイズはその叫び声を上げたのが最近特に仲良くしているメイドだということもすぐにわかってしまった。そう、メイドでありながら貴族である存在——ユエであることを。

「……朝からまったく」

ルイズはフアーっと一回大きな欠伸をかますとむくりと起き上がり、一人勝手に着替え始める。普通使用人がいるのならはその人に全て自分の世話をさせるのだが、その彼女担当の使用人というのは今使用人の寮にいて叫び声を上げている。

それに、実はルイズの方がユエよりも早起きだったりするので、実質彼女がルイズに服を着せてあげたなんてことは一回もない。たつき起こしたことからばあったけれども。使用人としてこれはどうかと思うのだが、彼女もともと貴族なわけでメイドをやっているのも没落したり家を出て行ったわけでもないのでやっぱり貴族。ルイズはしょうがないと一つ溜め息をつくだけで許していた。

さて、ルイズは何時もの桃色のワンピースに着替え終わり一応念のために杖をもつと彼女の様子を見に歩き始める。普通こういうところでは走るのかもしれないが、彼女はめったに走らない。それに、ユエがある程度強いメイジだとは認めているので、怪物ごときに殺されるわけないと妙に信用していた。

ただ……どうして屋敷内で怪物など出るのか、其処を疑問に感じ使用人の寮へと歩いているわけだった。俯きながら。

そして俯いている、ということは前が見えないというわけで……ゴツン！ 見事に彼女は金髪の緑のワンピースの女性とぶつかってしまった。ルイズそっくりの見た目、唯髪の色と瞳の色と身長くらいが違うがそれ以外はほとんど同じである。

「まったく、痛いじゃないの！ ってルイズ。前を見て歩きなさいよ！」

「い、ごめんなさい。エレオノール姉様」

ルイズはぺこりとかわいらしく頭を下げるかが、エレオノールは気に食わなさそうな目で見ている。しかし、思い立ったように目を見開き顔を真っ赤にしながら、小さな声で

「つ、次からは気をつけなさいよ！」

と叫び急いでその場から逃げだしていつてしまった。ルイズは頭を上げてまた歩き始める。やっぱり俯きながら。

「それにしても、どうしてエレオノール姉様こんなにあっさりと許してくれらのかしら？」

「そういえば最近優しくなったような……いいえ、そんなわけないわ。きっと新手のイジメなのよ」

「あら、姉不幸じゃないのですか？　ルイズお嬢様」

「トウナじゃない。どうしてこんな時間に本館の廊下を歩いているのよ？　今頃は朝ごはんの準備でこったがえしているんじゃないの？」

ルイズは目の前に立つ緑色のつややかな髪に半そでのメイド服をきた少女に問いかける。すると、彼女は悲しそうな表情を作りなが

ら手をもじもじとさせる。

「それが、私がこの前拾った子がいなくなっちゃったんです。可愛
いと思っていたのに」

「どんな子なの？ 私も探してあげてもいいけど？」

「黒くって手のひらに乗るくらいの子ですけど……わざわざ探すな
んてとんでもないです。見かけたら教えてくれると嬉しいです」

「わかったわ」

ルイズがそういうとトウナは嬉しそうに顔をほころばせながら一
つ礼をした。

一方紫の髪の使用人、ユエは左手でほうきを構えて庭の端っこに
立っていた。刹那、東から強い突風が吹き砂埃が舞い上がる。ユエ
は長袖の服で額をつたう汗をぬぐいながら黒い怪物についてもう一
度考察を始める。

（それにしてもどうしてヴァリエール亭なんかこれがでるのかな
？ きっと、こういうものは入れないようにしてあるはずなのにね
え。衛生的にもものすごく問題があるもん。絶対おかしいよ。

ということは、誰かが招き入れたってこと？ 一体何故？ それ

に、私の張ってる結界は絶対だし……トウナだったらやぶれるかもしれないけどね)

トウナとはユエの同僚のメイドの少女だ。まあ一般的に言うドジッ子属性を持つものすごく可愛い子。

でも、実は唯のドジッコではない。周りには迷惑をかけるけれども、自分は絶対に怪我をしないというような天然のドジッ子属性を持っているのだ。

例えば彼女が紅茶を運んでいる間に転んだとしよう。すると、彼女のメイド服は全く汚れないが、近くの床の高い絨毯が全滅したり目の前を歩いていた人が大やけどを負ったりするのだ。そのためちよっとしたドジをふんで彼女の結界の一部を崩壊させてしまっている可能性だってあるのだ。

(あとはカトレア様の動物についてきているとか？ それはないよね。面白そうだけど。それに今はフォンティーヌ領にいるらしいしと、そろそろ現実逃避はやめてこの敵と戦おう)

彼女はもう一度ほうきを構えなおす。しかし、その瞳が黒い化物の実態を捉えた瞬間彼女の心はいとも簡単に折れ、足から力が抜けて倒れる。

「どうして、どうして！ でも、やっぱり嫌だあ！！ ルイズ、た

すけて！」

彼女は叫ぶ、その時颯爽と……ではなくたらたらと歩いているルイズがついにユエの手をとった。

「ど、どうしたのよ！」

「黒い化物が……ほら、そっちに」

ユエは目の前の地面を指差す。

「黒い化物？ どこにいるのよ？」

「と、と、とにかくなんか魔法となえてよ！」

「わかったけど……。ライト！」

ルイズは左手で杖を構えそう呪文を唱えた。まもなく二人の目の前の地面はとんでもない量の砂を撒き散らしながらぶつとぶ。そして、そこには一つ黒い物体が……。

「な、なんで飛ばないの！」

「飛ばないって、もしかして黒い魔物って言うのは……」

「Gことゴキブリのことだよ！」

そう、其処には黒く楕円を描いた物体に八本の足が生えている生物、いわゆるゴキブリが何故か虚無の爆風を耐え転がっていたのだ。

「もう、えい！ 殺して……」

「あっ……トウナのペット!!」

「はい？」

どこまでも納得行かないという顔でユエはルイズを見つめ、そしてもう一度ゴキブリとを見つめ返す。それでも納得がいかず一つ左に首をかしげる。ルイズはぽんと手をうちゴキブリに手を伸ばしそしてその体を捕まえ……られなかった。寸でのところでユエがルイズの手をはたいたのである。

「どうしてよ!」

「だって、あんな汚らわしい生物にルイズを触らせられるわけないじゃない！ 私は、私はルイズを大切に思っているから！ だから……」

ユエはしゃがみこんでから思いっきり泣き出した。メイド服の袖

で目頭を何度も拭くが涙は零れ落ちる。ルイズははっとしたような顔をしてからゆっくりとユエに近づく。そして、その頭を何度も何度も撫でてあげる。その空間だけがまるで現実から切り離されたような平穏をかもし出している。

しばらく、二人ともその姿勢のまま固まっていた。けれど、やがてルイズは撫でるのを止めてユエの耳元で言う。

「落ち着いた？」

ユエはこくりと頷いてからルイズに手を差し出す。すると、ルイズはギュッと彼女の手を掴み引っ張り上げた。

「ありがとう……」

こうして二人は昔よりもずっと中をふか……。

その時、ルイズの靴にグチャツとした感覚が広まる。嫌な予感が見て下を見て確認してみると――。

「ぎゃああつあああ！」

――今後ヴァリエール亭では殺虫剤の散布をあらゆる場所に行うことになった。

V S 黒い怪物（後書き）

ふざけ話です。

最後の方が支離滅裂ですみません。

ついでに、これはエレ姉が夏休みで一時帰宅をしている時、ユエが着てすぐの時の話です。

誤字脱字などありましたら報告よろしくお願いいたします。

ある神様と少女

《side 神様》

私は一人一人の人間なんて見ないようにしてた。見てしまったら私の心が折れてしまうから。

私は神様である。至って力がある。でも私は一人の人のために世界を動かすことなど許されていない。全てを統べる神様であろうと運命は曲げてはいけないのだ。神様が運命を決めているのではない、私たちは運命という軸に沿って世界をすすめるだけの者なわけだ。

ゲームがストーリーどおりに言ってエンディングにたどり着けるように途中途中で道をふさいだりしている、というのが私たちの存在なのだろう。補正とか何とか誰かがいつていたような気がするが、それはまさしく言いえて妙、と個人的には思う。

なのに……あるとき、一人の人間を助けなくなってしまった。理由は何となく。人間の世界をちよつとだけ覗いてみたくなって、そしたら彼が目に残った。惹かれてしまった。ただどうしようもなく。

たすけてくれたとかそんな具体的なエピソードはなかった。言うならばちよつとすれ違ったかもしれないけれど、それくらい。でも、私は彼に引き寄せられてしまった。

その時にあの事件はおきた。ある少女の最大の願いを込めた心中劇は——……



《side ???》

「つてわけでき、俺の上の上の上の神様がお前を優遇してくれることになったわけ。べっつに俺は上からの命令に従っているだけだからな」

今、私はありえない事態に直面している。宇宙人が目の前でフランス人と踊っているくらいにありえない事態に直面していた。目の前で普通のシヨタが神様を名乗って宙に浮いているなんていう、何度もいえない事態にね。

否ね、可愛いとは思うんだよ？ その無垢な瞳で「俺は神様だ」だなんて言ってる姿なんてもう本当に可愛すぎる。シヨタコンじゃない私も好きになっちゃいそうな可愛さ。

なのにね、言うことといったら「お前輪廻転生させてやるからさ、次の人生で三つくらい願えかなえてやんよ！」だよ？ 口調おかしいよねえ、ねえ、ねえ！！ シヨタなのにどうして俺様系な性格しているわけ？ 信じられないんですけど！ シヨタならシヨタらし

く目をうるうるさせていればいいのに。

「お前、俺に向かってシヨタシヨタ言ってたな？ この見た目実はコンプレックスなんだぞ？」

目の前で自称神様はほざくと溜め息をついた。私も溜め息をつきたいというのに！ まあ、とりあえずあいての指示に従ってやろうじゃないの。

「おう、素直な女は嫌いじゃないぜ」

「その見た目で言わないでよ。なんかなえるー。ならばまず一つ目。私の持っているオカルト系の知識を実際に使えるようにして！ 古今東西ありとあらゆる技をね」

「ふーん、早速大規模なのきたな。いいぞ。面白そうだし」

自称神様はにやつと猫のように目を細め笑ってみせる。やっぱり気持ち悪い。せめて見た目がシヨタじゃなければ……。

「で、二つ目は……怪我をしてもすぐ治る、また怪我の痛みを感じない。ただしたれた血は体内に戻らない」

「ふーん、怪我をしないね。つまんねえけどわかったよ。三つ目は？」

三つ目……どうしよう。望みはあらかた簡単に叶ってしまった。本当にどうしようって感じ。

そんな時、ふと今までの人生が頭の中に走馬灯のように流れ始める。何十個もの思い出すのも否になるような思い出が。あの時感じた気持ちや怒りとかもすべて細やかに再現されている。

吐き気がする。自分という奴に。

「……三つ目は心でいい？ 強い心。無邪気で誰も傷つけないような優しさを持つ心。ひるまない心」

「お前はオズの魔法使いの案山子かよ？ まあ、いいさ。そうしてやろーじゃねーか。あつ、君この本読む？ 君を転生させるまで二三週間ほどかかるんだけど。俺さ、最近このラノベにはまって。しかも、二次創作とかも色々最強だし」

自称神様は乱暴に手に持っていた本を私に向かって投げてくる。受け取ろうと思ひ手を伸ばしたものの、本は私の体をすり抜けてしまった。

「あ、ごめん！ 今からお前物に触れるようにしてあげるからさ。まあまあ座れってお前もう足ないから座れねーな」

やっぱり、神様って言うのはウソなのかなと思ひながらその本――タイトルはゼロの使い魔。作者は、あれ？ この名前どっかで聞

いた事があるような――を手に取り読み始める。絵がかわいいなあ……。

ある神様と少女（後書き）

誤字脱字設定間違いなどありましたら教えてくださると嬉しいです。

あと、諸事情により一週間更新ストップさせていただきます。
本当にすみません

ユエのぶった切られた夢物語

「ねえねえ、ルイズ！ 私物語作ったの！ 読んでみて」

どうも、はじめまして。ユエです。

初めてじゃない？ うーん、確かに私視点の物語は二回目だね。

まあ、そんなこと気にしないで。

それでね、今日はルイズに現実にあった小説をこっちでアレンジして書いてみて大儲けルーツに貢献してもらおうと思って、シンデレラの話を読ませることにしたんだ。神様のところでゼロ魔本編は勿論全巻（といっても作者は18までしか読んでない）、二次創作まで大量に読ませてもらったのです。そこで考えてみました。

私もやってみよう！ と。

本当は内政チートがやりたかったんだけど、諸事情によってできないし、とりあえず都合のいいルイズちゃんに呼んでもらうことにしたのさ。別に魔法を使ってもいいとは思うけど、まあそれは後々でいいかなって。

それにしても、読書中のルイズはかわいいなあ。喋らないと可愛いだよ。特に真剣になっていたり時とかすごく可愛い。あれ？ 真剣になってるって……もしかして好評ってこと？ 感想が楽しみなってきた！

「ユエ、読み終わったわよ」
「どうだった？」

私がそう少し前のめりになってきくと、ルイズは困ったような顔をして溜め息をついた。

「めっちゃくちゃよ」

「え？」

「まず最初に灰かぶりって呼ばれるところだけど、あれは何なのかしら？　まるで実際の貴族がそんなことをやっているような。誇り高き貴族がそんなことするわけ無いでしょう？　次にどうして娘がメイドの仕事なんてして父親がおこらないのかしら？　しかも、主人公が魔法を使えないのはおかしいわ。曲がりなりにもメイジの娘なんでしょ？　他にも変なところはたくさんあるわ」

「最初のは設定なの！　次にそれは巧妙に隠れてやってるの。最後のは隠れてやっているだけよ！」

「そんなにむきにならなくたっていいじゃない！　お話なんだから」
「ルイズの馬鹿！」

少しだけ友情に亀裂が入ってしまった……。後で仲直りできたものの、もう童話にはこりごりね。

ユエのぶった切られた夢物語（後書き）

現実の小説を記憶たどって書いたら売れましたあ！
という二次創作を見て、ふと思いました

ルイズちゃんに現実小説で金持ちルートをぶった切っていたかどうか、と

すみません、十割思い付きです。
故に適当です

いつか推敲してみるかもしれませんが

？ 日夜戦争コンピ（前書き）

――原作開始まで後10年

？ 日夜戦争コンビ

俺はもともと学校という場所が嫌いだった。前世で生きていても、そして今もだ。否、今の方が学校がずっと嫌いかもしれない。絶対そうだ。

なんて俺がもしいいだしたとしたらこの戯言を聞いている君は思うだろう。前世って？ と。まあ、そう思う君はきっと普通なんだろう。そんなことをまじめな顔で言う人がいれば変人にしか見えないだろう。が、しかし。俺はというと大真面目である。

なんせ、本当に輪廻転生なんというものを経験してしまったんだからな。



「さて、今日はブリミル教の歴史をやりましょう」

この学校の中でも美人の部類に入る歴史の教師は言う。美しい短めの茶髪にかわいらしい顔、美人といってもどちらかというと可愛い系に入ると思う。実際このクラスの生徒の何人かはこの教師に告白している（全員見事に撃沈したけれど）。そんな先生でさえ先生であるという理由から俺は嫌っている。

美人だから言いわけじゃないんだ。問題は性格。まずさ、ブリミル教の歴史をやりましようったってもこの世界の教育指導要領どおりにやるだけだろ？ んなこと誰にもできるっての。しかも、教師であるのに自分の意見がない。

もう最悪じゃねえか。それに、生徒が何か質問しても答えられないことの方が多いし、答えたとしてもかなりあいまい。先生としてなっていない。それなのに問題を起こせばいつも高圧的な態度。美人なのにもったいねえー。

ここまでの意見は他の教師にも共通する。そもそも何で教壇なんであるんだよ。俺らを監視できるようにか？ 俺等よりも高い地位にあることを示すためか？ 俺としては上から見下ろされているようにでめんだ。

なら、学校に通うな？ 嗚呼、俺も通いたくなかったよ。だがな、この機会を逃したらもう二度と家から出してもらえない確立が高かったからしょうがなかったんだ。

俺はバルソビアナ伯爵、つまり俺の父親から嫌われている。否、俺もあいつが嫌いだからどうでもいいっちゃ同でもいいんだがな、俺の病気はとくに治ったというのに俺をいつまでも部屋にしばらくつけ、魔法に触らせてもらえたのなんて去年からだぜ？ もう異常だろ？

俺は長男だというのにこの家を継ぐのは俺の弟。別にこの家をつ

ぎたいわけじゃねー。でも、こうなると変質的なまで者俺の嫌がらせにしか思えないんだ。

そんな時に学園に通えといわれた。断ることも勿論出来ただろう。けれど、このチャンス逃したらこれからどうなるかなんてわからねー。結局、軽くここの教師に期待しながらもこっちにきてみたんだが……。

がっかり。

それが俺の感想。教師に対しても、生徒に対しても。期待していたわけでもないが、前世に比べてもこっちの方が最悪っておかしいだろ？

特に生徒。一応貴族なんだから、未来をになうんだろ？ それなのになんだ？ この頭の悪さと無知の加減。あんまりじゃねーかなあ。しかも、なぜかしらねーがここのクラスは貴族の中でも上の法の奴が多い。4つくらいクラスがあるのにどうしてこう一つのクラスに大貴族が集まるのか良くわかんねーが、何故かみんなこのクラスに自然と集結してしまったんだよ。

特に、その中でも二人ほど日夜戦争を繰り返すコンビがいて……。

「ああ、ごめんなさい。服、大丈夫かしらねえ？」

「まったく私への嫌がらせ？　ミス・ツェルプトー」

このクラスの一列目の方で戦争が早速勃発し始める。褐色の肌の巨乳美女がミス・ツェルプトーで金髪の胸が残念な美女がミス・ヴァリエールだ。

どうやら今回は巨乳がメモをペンで取っていた時にインクがこぼれて金髪の服にかかったようだ。つか、仲悪いのになんで隣に座るかな？　絶対これ授業妨害がしたいだけだぜ？

なんていいたくても顔にも口にも出さない。俺なんて所詮伯爵家の跡継ぎでもない奴だし、こいつらはそもそも家からして中悪いから茶々入れてひどい目にあうのは俺。見守っているのが最善だ。

他の奴等ももうなれたのかこいつらの事は完璧に無視している。先生もちょっとあわてながらも授業を続けているようだ。

「わざとでもないよお？　嫌がらせなんてとんでもない、公爵家のお嬢様に手を出すきはないからねえ」

「……それは私への挑発かしら」

それにしても、どうしてお互いにこんなに性格が悪いのだろうか？　巨乳の方はどんなことを言いたくても必ず挑発するように言うし、金髪は公爵家の長女であることをかさにかりて気に食わないこ

とがあるとすぐに怒るし。そんな二人の相性が家柄をおいとしても言い分けなく犬猿の仲と化しているのだが。

ただ、教室で本気で怒らないでくれよ？ お前等結構上位のメイジなんだからさ本気で怒ると、金髪は周りのものを土にかえちゃうし巨乳のほうは周りを焦がすし。迷惑この上ないんだ。

「ふふ？　じゃあ、どっちが上か証明してみる？　でもその前にその洋服きがえないとねえ。メイジのほこりのマントがインクだらけだなんて。くすくす」

「ちょっとその態度なんなのよ！　これが公爵家……」

「あら、またそのセリフ？　飽きてしまうわねえ。そんなことしかいえないと」

「どうせ実技でも筆記でも私には勝てないでしょう？　それなのに貴方私を貶めたいのかしら？」

あああー、この調子だとまた決闘か？　ここの校則で禁止されているのに、俺が知ってる限りで入学式から今日までの間に6回ほどやってんぞ？　ちょっとこれ以上繰り返してどうすんのか？

歴史の教師は普通に授業を続けるし、生徒も興味はあるけれど気にしないようにしている。二人に巻き込まれてもどうしようもないことを知っているからだ。それなのに、あいつ等に望んで関わって

ゆく馬鹿がいた。これもまた見慣れた光景なのだが、見慣れてしまったのがおかしいと俺的には思っている。あいつは馬鹿じゃないのにどうして関わるのかわからないんだ。だから、一回まきこまれれば二度と関わらないと思うっていた。

「まあまあ、美しいミス達よ、こんなすばらしい日にけんかな……」

『かわらないで頂戴！ ミスタ・グラモン！』

優秀なのに馬鹿な男、ミスタ・グラモンは二人に左右同時に殴られる。まったく、実技とか筆記とかはこいつだって結構優秀なのにこんな風に変な正義感持つてるから得できねーんだよ。まあ、本人にそんな事を言ったことはないけどな。

俺はさ、回りにいかに変に関わらず印象を残さないかに燃えて生きてんだよ。

？ 日夜戦争コンビ（後書き）

——タイトルはなんとなく臨也と静ちゃんを意識して。
デュラララ新刊発売記念、みたいな！？

誤字脱字キャラ崩壊などありましたら報告よろしくお願いいたします。
す。

それともう一週間ほど更新停止です。この中途半端な状況の中すみません。

？ 俺の不幸

で、どうしてこうなった？

さっきまで、俺は自分の部屋の窓のところに腰掛けて、世界って奴を見下ろしていた。

家ではそんな事を出来るような窓がなかったからな。落ちる心配っていうのも杖をもっているお陰でないっていったらないし、こういうときは魔法っているんな意味で最高だと思う。それで、のんびりと夕日を見て綺麗だなとかなんとなく思ってみたり、下にある広場を歩いている人を見て楽しんでいたりしていたのだ。

たださ、俺はちょっと忘れてたんだよ。平和ってどんくらいもろくて嘘っぽくって、予想とかをほぼ完全に裏切って、ただ例外的に嫌な予感だけは外れないとかっていうことを。

つまりは、運命って言うのはどこまでも不条理だってことを。俺がそののんびりと人間観察をしていると、何故か人が急激に増え始めたんだ。

さっきまでは夕食の準備のために倉庫と食堂とを行ったり来たりしているメイドさんくらいしか走っていなかったのに、今はといえば一年の半分くらいかそれ以上の人数が次第に真ん中を空けて集まり始めている。

そう、まるで決闘をやるような形に。

一応この学校では貴族同士の決闘は禁止されている。危険で、片方が怪我をしたりしてしまった日には学校が責任を取ることに自然となってしまうからだ。

けれど、あくまでもそれは建て前で事実教師は生徒の決闘でも小さなものなら結構見逃していたりする。そして、その決闘にもベストスポットというものがあって、その一つにこの広場が数えられる。そのため決闘は意外と珍しくない。

で、俺は決闘はやるのは嫌いだけど見るのは嫌いじゃない。事実、自分の部屋が広場をちょうど見下ろすようなところにあるっていうことを知った時には、なんかラッキーだなーなんて思ってしまった。

そんなわけで、俺は変に冷静で今日は誰対誰かなあなどのんきに考えていたわけだ。本当にのんきだったと今ならば後悔できる。三度神様に土下座をして運命を変えてもらいたいくらいだ。

そう、決闘の相手が最悪だったんだ。ミス・ヴァリエールこと金髪対ミス・ツェルプトーこと巨乳だったんだよ。まったく、こういう高レベルの戦いって言うのはさあ建物がない森の中でやってほしいね。二人ともトライアングルだし、戦っている途中から燃えてきちゃって周りが見えなくなるタイプだろ？ それなのになんで人と建物にはさまれた狭いスペースでやるんだろうか？ あいつ等の頭は空洞か？ 脳みそがないのか？

まあ、こんなに人が集まってきちやっただししょうがない。折角だから最後までここから見るしかないだろう。だけど、この二人の場合会話が聞こえないとつまらないよな……。

「シャーブイヤー
地獄耳」

俺は右手で杖を構えて呪文を唱える。

すると、あいつ等の会話が聞こえてきた。全く遠くにいても声が聞こえるなんて便利な呪文だよ。今なら、魔法が使えることで威張りたくなる貴族の気持ちが分からなくもないぞ！ 尤も俺はそうはなりたくねえけどな。

「ふっ、私の方が魔法の腕は上なのに逃げ出さなかったのね？」

「仮にも軍師の家系の長女なんだよねえ。だから、まさか逃げ出すわけないわあ。それよりも、ミス・ヴァリエールさあん。私にはむかう覚悟はできているのかしらあ？」

「も、勿論よ！ 挑発するなんていい度胸ね！」

その言葉が皮切りのように二人の決闘は始まった。

といっても、実際の戦いのように走り出したりはせず、杖を右手で構えて詠唱をしているだけなんだけどさ。まったく、本当の戦いでんなことしてたら技はなっ前に死ぬぞ？

まあ、貴族の長女が戦いに慣れてるっつーのも絶対に問題なんだけどな。二人とも結構位は高いし。少なくとも長男（別に家を継ぐわけではない）よりも位高い。ったく、男尊女卑の世界なのに親の身分の影響っつーのはやっぱりすごいな。

「ファイヤーボール！」
「ブロッケード木偶の坊！」

おっと同時に詠唱終了って、ブロッケードってなんだよ？ 木偶の坊ってのろまって意味だろ？

なんて思っていると、金髪の目の前の地面がいきなり盛り上がってワルキューレよりも小さな土人形が6個できあがる。ああ、もしかして文字通り木偶の人形ってことだろうか？ ただ、見た目からして同考えても木じゃなくて土の人形なんだけど……あんまり気にしないでおこう。ファイヤーボールも俺にはなかなかまねできないようなサイズである。

そして、杖のちよつと上の部分でとまっていたそれは発射された。おっ、スピードも悪いわけじゃない。ただ、金髪の頭もそこまで悪いわけじゃなくて、すぐに土の人形を犠牲にしてきた。ファイヤーボールの当たりそうなところにちょうど木偶の坊が移動してきたのである。このスピードで進んでいれば、今更軌道修正も適わず木偶の坊に直撃した！ 白い煙がもくもくと上がって、木偶の坊を包み込む。

その間に、残りの木偶の坊が巨乳の杖を奪おうと動く。だけど、やっぱりのろまっちゃのろまで可愛いんだけど、使えない。巨乳は

詠唱をしながらも余裕で木偶の坊の攻撃を避けている。すると、今度は金髪の詠唱が完成したみたいだ。

「マッドウェーブ！ ふん、中々やるじゃないの！ さっきのファイヤーボール」

ど、泥の波かよなんて思っているうちに巨乳の足元に泥が大量に押し寄せてくる。木偶の坊が一匹流されているが、ぶつかったらやばいだろうな。金髪の性格からしてなんか仕込んでそうだからな。

「ウィンド オブ ファイヤー そうねえ、あんたも中々やるわねえ。まっ私には適わないだろうけどねえ。特に胸の部分とかあ？」

「な、何よ！ フライ！」

火の風かぁ。なんか対照的だ。と思っているうちに二人はフライを唱え空へ飛び立つ。観客は足元に流れてくる泥の波と火の風で文字通り右往左往としている。上から見るとやっぱり人間って塵みただ。動き回っているのが本当に馬鹿らしく見えるよ。

それにしても、巨乳は本当に挑発が好きだなあ。そこは禁句だつて言うのに。

そして、二人はフライで間を取り合いながらも呪文を唱える。二

つの魔法の同時使用は普通不可能だけれども、魔法を使っている間に呪文を唱えることは可能だし、魔法が切れている間に最後の一言を言って、またフライをかけなおせば一応空中でも魔法が使える。まあ、普通はあんまりこんなことやらねえんだけど、まああの二人の実力は互角くらいだな。

「もう一発うってあげようじゃないの。ファイヤーボール！」

「きたわね！　錬金！」

錬金だと？　また、金髪が変なことをしている。ここはマッドワールドとかで防がなければいけないところじゃねえか？　なんて、思っているのを見ると見るうちに土が杖に向かって集まり、銀色の板状のものを作り出す。材質はよくわかんねえけど、金属だよな？　どうするんだ？　何て思っているうちに、ファイヤーボールは金髪目の前に……？

そうだ、金髪はさっき作った鏡なんかをファイヤーボールに当たてて反射させたんだって、違う！　火が反射するのはおかしいだろ！？　そうだ、火をまとわせた金属系の物をレビテーションで投げてんだ。途中からは重力に従うから、フライを自分にかけておして……。時間的に結構無理があるが不可能じゃない。きっと、巨乳対策に何回も練習したんだろう。

そして、その火をまとった金属はこっち側にいる巨乳に向かって飛んでくる。巨乳はすぐに気づいて、それをよけ……るなよ！　ち

よつとまで。俺のいる部屋はちょうどお前の背後なんだぞ？ お前が避けるってことはすなわち……。

「あっちい！」

その火をまとった金属は窓に腰掛けていた俺の左足に直撃する。ああ、やけどが起こってるよ。どうして、金属って熱の伝導率がこんなにもいいんだろうか？ ひりひり痛むとかそういうレベルを超えている。足の神経が麻痺して感覚というものがどんどん薄れていく。けれども、意識は失わない。

とりあえず水で冷やそうと、窓を閉じ……なんかまた土の塊っぽいものが飛んできた。そして、それは窓ガラスを割って俺の体に突き刺さってゆく。嗚呼、なんていう不幸……じゃあねえよ！ これは不幸だけど原因がいるんだ。俺が八つ当たりをする相手はちゃんというんだ。

俺は失いそうになった気を取り戻して、窓を開ける。もうガラスがついていないけれど、枠の上には腰掛けられねえからな。

そして、感覚のない左足から窓のところにのせてゆく。俺の足を傷つけた張本人達の決闘の場所は地上に移っていた。ただ、地面はまだぬかるんでるみたいで、時々滑って転びそうになっている。さっさと転んじまえよ！

そして、杖を構えて本当は長い詠唱を始める。だけど、今はいち

早くあいつ等に怪我とか何かをおわせたかったからスピードが三倍くらいだ。

というわけで、詠唱は本当にあつという間に終わってしまった。後は、座標指定とかをやるだけだ。最初はいつ等を炭にしてやろうかと思ったが、自分の問題があるため怪我とかでもかなりヤバイことになると思う。伯爵がどうなろうが知ったこっちゃねえが、弟は嫌いじゃなかった。だから、怪我なんてさせるわけにはいかねえ。それでも、精神的に何らかのダメージを与えなければ……そうだ。

「フアイヤーバード！」

俺の叫び声と共に、杖の延長線上に一匹の大きな火の鳥が現れる。俺の住んでいた村を灰にしてみせた、相棒が。本当は空気を凝縮したりして形を整え、其処に火をつけているだけだ。けれども、形を保つには結構な集中力が必要で、意外と扱いにくいし、威力がすごく強いわけではないので不便な魔法。でも、威嚇する時にはこいつしかない。それに、一回作れば操作は必要だけれどそれ以外に精神力を使わないで住むので意外とエコな感じで気に入っている。

二人は最初自分の勝負に夢中で火の鳥のことについては全く気づいていなかった。けれど、あいつ等の目線くらいの高さまで降りていけばさすがに二人とも気づく。そして、お互いに目を見合わせて首をかしげてから、もう一度火の鳥に意識を移す。だが、其処には既に火の鳥はいず……。

「俺の足の痛みを受けろ！」

嗚呼、キャラが崩れている。今までの平和に過ごすための丁寧でありながらも、無口な性格っていう仮面がぼろぼろと崩れてゆく。彼女たちが俺の叫び声に気づき振り向いた時には、もう髪はもともとの半分くらいの長さとなっていた。

そう、俺はあいつ等に怪我を負わせることを諦め、代わりに髪を奪っていったんだ。女の髪は命だって言うし……な？

あれ、意識が途切れ……。

？ 俺の不幸（後書き）

すみません。軽くスランプです。

三日に一度の更新になるかもしれません。

毎日暇だというのに

感想やら誤字脱字やらがありましたら、コメントにてよろしく願
いいたします。

挿話 つながった世界

気がつけば、俺は俺を見下ろしていた。正しくいうならば、吉川漂祈という僕を。

このことがあったのは確か今から10年くらい前だった。あの日、林の奥の隠された池に飛び込んだ時だったからな。

——これは、俺がまだレントになる前の話。



「おーい、なあ。なあ、漂祈か？ 大丈夫か？」

少年は水にまみれた倒れた少年——つまりは、俺こと漂祈に向かって問う。とにかく、必死そうにあわてながら、何度も何度も同じようなことをわめく。

それでも、漂祈は何も答えてくれず、彼は自分の手と彼の顔を繰り返し見比べては顔を真っ赤にしていた。

否な、俺だってあの時は普通に気がつけなかったんだ。お前の言葉はすべて聞こえていたけれど、起き上がる元氣も力も精神力も何にもなくて、ただ自分が漂祈と呼ばれていること。そして、俺が俺

じゃないような気がしていることと、俺にいきなり昔の俺の自我が叩き込まれたことによって混乱してたんだ。

意味不明だろ？ 俺のこの思いを言葉にしたものを誰かが聞いたとしたならば、絶対に意味が分かるはずない。まあ、当たり前だろうな。なんせ、俺は俺を夢の中で見下ろしていて、その見下ろされている俺は実は漂祈という俺とは全く関係ないはずの少年で、そこに俺という存在が憑依していて、でもその憑依した俺にも実は二人の俺の自我があつてという限りなく理解不能な状況だったんだからな。

こう説明してもわからねーか？ 俺、俺、と俺が多すぎてさっぱり？ そりゃそうだな。確かに自分の思っていることを振り返ってみれば全く不可解すぎて悲しくなっちゃう。

それでもさ、一つだけ理解して欲しいことがあるのなら、見た目は吉川漂祈、中身は俺ことシアリと別の名前もわかんない俺、そして少ない吉川漂祈の記憶。その名もとりあえずは吉川漂祈。

これでもわからないか？ なら、理解するのを諦めろ。これは吉川漂祈の物語だっと思ってくれればいい。

「漂祈、なあ漂祈！ ベ、別に俺はさあ、きつ君を殺そうだとか危害を加えようとかそんなこと思ってたんじゃないんだぞ！ これは事故なんだ。たまたまだったんだよ。だから、おきてくれよ。俺は平和な人生を生きたいんだ」

漂氣を見下ろす少年は、またもわめいては泣きそうになり。涙をこらえれば漂祈を揺らし、を繰り返していた。けれども、やっぱり俺はおきてこない。起きれない。

少年は次に漂祈をいきなりたたいたりしだした。大人対漂祈であれば絶対に児童虐待だっていえそうなくらいの勢いでだ。どう見ても気を失った友達を起こすのには使わないような技までどうとうと使っている。

あの頃の俺もさすがに痛くなってきたのか、うつすらと目を開けた。あの時、確か目を開けたらいきなり夕焼けと現代的な日本でよく見かけた服を着た少年が映ってすごく驚いたな。あの大きすぎる夕日と、紫というのか赤というのかもわからないような幻想的な空が美しくて、一瞬ここは天国で、俺は死んでしまったのかもしれないと思った。

だが、俺の記憶の中に何故か転がっていた天国とはどこか違うような気がして、とりあえずこの少年と話してみようと思ってゆっくりと意識を戻していったんだ。

「ひ、漂祈！ よかった。お前が生きてて。って良くないぞ！ 俺は……俺はお前を池に突き落として、お、お前は中々おきあがanneーし。も、もしもそれで怪我なんかしてたら俺の未来は。漂祈！ 死ねばよかった……よくない！ 俺はわかんねーぞ。お、俺はなんも知らねーぞ」

漂析を起こそうとしていた少年は、今度は漂析が起き上がったことで混乱しているみたいだ。前髪もない短い髪をぶんぶんとふつていたり、体が震えたりで忙しそうだ。

とにかく、こいつの間抜けな一言で俺ももっと混乱しちゃったんだ。なぜなら、あの時の俺の記憶の中にこいつの姿なんて影も形もなかったし、ましては突き落とされた記憶なんてまるっきりなかったからな。それで、首をかしげながらも彼のいつまでも続く弁明に耳を傾けていた。

だがさ、こいつつてもものすごくうざいんだよ。ちょっとだけ大人になった俺から見ても、当時の俺から見てもすごくうざかったんだ。自分が加害者なのに俺の心配の前にいわけとか未来がなんちゃらかんちゃらとかそんなことばっか言っていてさ。

もう、さっきまで沈みかけていた太陽が今では半分沈んでるまでに動いてんだぞ？ さっさと消えて欲しかった。

けどな、俺の情報源はこいつしかいなかったんだ。俺の周りで今の俺の状況を話してくれるのはこいつしかいなかったからな。俺の中の吉川漂析の記憶だって当てにならないわけじゃない。しかし、こいつ偏見が多すぎるんだよな。そのせいでいろんな出来事がゆがんでさ。

「それで、おい！ 漂析。お前きいてんのか？」

聞いてませんか何か？

挿話 つながった世界（後書き）

すみません。ちょっと旅に出たら、旅先に閉じ込められました。
＋帰って見たら停電スタート↓P Cがいじれない。

ということでネタだけが脳内に蓄積されました。

私はこれくらいの被害で済みましたけれど、東北の人とかは本当に
大変そうで……。NHKの教育テレビの放送見ると変な実味があ
って。

いち早く救われると良いのですが。

？ 女の髪は命といます

「起きたかしら？」

「みたいだねえ、加害者のミス・ヴァリ……いいえ、面倒くさいからエレオノールでいいかしらあ？」

「いいけど。なら私も貴方のことをラズって呼ばせていただくわ」

「まあ、名前で呼び合っても友情なんて……」

『生まれない』

えっと、今はどういう状況なのだろうか？ 髪のがこげて縮れてしまっている金髪と巨乳が俺の顔を覗き込んでいるみたいだけど、一体どうしてこうなった？

まあ、とりあえず周りを見回して現状確認をしよう。

まず、ここはどこだ？ 家具や壁紙を見ると生徒の部屋っぽいのだが。多分この二人のうちのどっちかの部屋だな。布団が花柄だし、次に、俺はどうなっている？ 左足の感覚が消えかけているのだが、血が足りていないのかなんかだるいし。最後に、二人は何をたくらんでいる！？

「えっと、まず大丈夫？ 自分の名前とかわかる？」

「お——私は記憶喪失を起こしたってわけではないので」

「あらあ？ 先日とはえらく口調が違うわねえ。性格のほうが大変なことになってしまったのかしらあ？」

先日……？ 嗚呼、そうだった。確か俺はこいつ等に左足を攻撃されて返り討ちにし、結果死にかけて……。ただ、一つ気になるのはどうして保健室ではなく、こいつらの部屋にいるのだろうか？ まさか、あれだけ派手に決闘をした上でおとがめなしとか？ 理由は大貴族だから、とか？

うあつあ、さっすが公爵家長女と外国のいいとこの長女。ってことは、もし俺が何日も眠っていたとしたらただのさぼりだって思われてるってところか？ 最悪。目立つつもりはなかったのに。

「うあああ！」

「ど、どうしたのよ」

「いえ、なんでも」

やっちゃった。どうして水のドットメイジ設定の俺が火と風のトライアングル使ってたんだよ？ しかも火×火×風だぞ？ 気づいている人はあれが実は面倒くさい技だって気づいているよな？ 幸い教師はいなかったものの無駄に察しのいい生徒の一人や二人いてもおかしくないな。特に、目の前の二人とか。

彼女たちはこっちの事情がわからないのか不思議そうな顔をしている。というよりも、いきなりの奇行にいぶかしむような感じだ。

「それよりもお、私のことは無視かい？」

「え、そんなつもりはなかったのですが……。性格の方は心配には及びません」

「あら、大きすぎる猫が見えるねえ。いつか、その猫にとって食われちまわないように気をつけなさい」

そう巨乳は言って不適に笑った。変にさばさばした見た目とその笑みがあまりにも似合いすぎている。しかも、その大きな瞳はまるで俺の気持ちをすべて見透かしているようで気味が悪い。

さて、俺のことが何処までごまかしきれるか、そこが勝負どころだな。どこまで記憶に残らないような普通の感じを演出するかだ。

だがしかし、そんな風に普通な印象を残らせるのは前提からして不可能みたいだ。なぜなら、一通りの世間話(?)を終えた二人の目は怒りでぎらついてたから。さっきから逃避したかったんだが、この部屋の所々が炭になったり土になったりしているんだからな。

前にも説明した通り、上級のメイジは強く怒ったりおお泣きしたりと、大きな感情を持つと周りが自分の系統魔法によって変化したらしってしまう。この場合、巨乳が炭を作って金髪が土を作ったんだろうな。ついでに、水だったりすると部屋の気温が下がり、風だと強風が吹く奴がいたような気がした。つか、風のほうはミスタ・ワルドだな。水は誰だっけ？ ハンバーガーとかなんとかって名前だった気がする。まあいいや。

そして、今回の場合はずばり怒ってる確率しかなくて、対象となる人物は十中八九俺しかなくて。しかしさ、今回の被害者は俺だろ？ この調子だとしばらく歩けそうもないし、感覚さえもない。一方こいつ等は髪をちよつと焼かれた……髪って女の命っていうよな？ あれ、俺もしかして超巨大地雷でも踏んだ？ なあ、もしかしてそうなのか？

「さあ、戦争を始めましょう」

「が、が○さんのセリフ引用するな！」

俺の突っ込みもむなしく、金髪は早速――。

30分経過。

「すみません。ごめんなさい。ごめんなさい！ か、髪くらいでそんなに怒らないで。うあああ。ひ、皮膚から火の手が。ごめんなさい。土下座しますから！ 土下座とはこんな風に額を地面にこすり付けて謝ることで……うああ。足蹴にしないでください」

また30分経過。

「ごめんなさい。ごめんなさい。す、すみません。み、ミス・ヴァ

リエールお嬢様！　だああ！　そんな死線を越えるわけには。こ、怖いです。ミス・ツエルプトー様……お嬢様。うああ、お嬢様にらまないでえええ」

さらに30分経過。

「え、エレオノールお嬢様にラズお嬢様。こ、これでいいですか？　これでもう充分ですよ。俺、が……わ、私！　ぐあつああ！　も、もう取り繕いません。け、敬語を取れ？　気持ち悪い、吐き気がする？　俺も自覚してたがストレートに言われると響く。歪曲表現をしてくれれば嬉しかったんだけど」

そして、また30分経過。

「……俺は二人の犬です」

——女の恨みってこえー。もう二度と髪なんて燃やさない。

？ 女の髪は命といえます（後書き）

何があったかはご想像にお任せいたします。

誤字脱字、その他謎の文法などありましたら報告してもらえると嬉しいですよ。

挿話 俺と漂祈

その後しばらくあいつの懺悔つーかいらいらす話をえんえんと聞かされた。途中でできりたくも何度かなったんだけど、結局夕日が半分くらい沈むまで聞いてしまった。何故そこで切れたかといえ、いきなり「夕焼け小焼け」のチャイムが鳴り出して、名前も知らないあいつが「もう五時か」といいながらふらふらと帰っていった。まいったからだ。夕焼け小焼けの曲がまさか福音に聞こえる日が来るとは思ってなかった。

それにな、福音って思う前にすごく懐かしかった。あの頃の俺だってこっち側でいき始めて五、六年くらいは経っていたはずだし、今の俺なんてあの時から十年は経っている。こんな風に普通にさ日本で生きてたら耳にするような音でも、改めて聞けば懐かしい。子どもの頃聞かせてもらった子守唄と同じようなものだ。

ほら、「ポクっ」て音するだろ？　こういうチャイムって。学校のはどうだったかは知らないが、なり終わるとスイッチを切る「ポクっ」ていう音がするんだよ。マイクをたたいたような音がな。最初さ、誰かがそれに気づいてみんなで聞けば「あっ本当だ」なんていって、何故かしんねーけどみんなで笑って。そんなことしているうちにとくに門限過ぎててさ、でもこのことはいわなかった。ただ、みんなで遊んでいただけだって言って、「ぼくっ」のことは言わなかった。自分たちだけの秘密にしたかったのかなんのかはよくわからないけどさ。

その時のみんなの顔、もうとくに二十年以上経った今でも思い出せる。明確にはわかんないけど、ざっと十人くらい近くに住んでた奴が集まっててさ。若葉と話したのもきっとその時が初めてだったかもしれない。あの音を聞いた後に紫と赤色の間の気味の悪い色した、そうそう今みたいな空の真ん中にうつすらと白い半月が浮かんで、若葉がなんかいったんだ。

その月を指差しながら。俺はそれを聞いてなんて答えたんだっけ？
忘れちゃったな……。

「この空から人は生まれて、この空に人は還ってゆくんだって。半月はその扉が押せば開いて、ひけぼとじるの。新月は扉が閉ざされていて、満月は扉がひらいてる。だから、ハロウインの日に死んだ人は空に還れないの。十五夜に満月が終っていて、必ずハロウインの日は新月だから」

「逆だよ？ ハロウインの日には死んじゃった人が家を訪ねてくるんだ」

「そうだよ。普通はそうなの。だけど、私は違うってことを知っているの。叔母ちゃんが教えてくれたから」

頭の中に少年と少女——昔々の俺と若葉の声が響く。あの時に話していたであろう言葉が優しく俺を包むように。

若葉の言葉は変に大人っぽくて、それなのにどこか子どもっぽくて妙な感じがした。逆に本当に子どもな俺。小さいころから女の子の方が大人になるのが速いとは知ってたけど、異常な感じがするほどに大人っぽい。見た目だって変にませていたような気がしてきた。

黒くて長い髪を束ねないで、きれいにいつもとかしていて。服とかはいつもおんなじような物なのに、ちょっとづつアレンジしていた。俺は覚えている。

その時、目の前で何かが輝いた。池の水が何かの光を反射しているんだ。太陽の強すぎる光を反射しているんだ。

その強い光はかつての俺の回りを地平線のちよつと上までを包み込んでゆく。その俺はいきなりのことに驚いて、池からさっと飛びのきしりもちをついた。まったく間抜けな奴。たすけてやりたいけれど、夢を見ている俺はなにもしない。あくまでもそれが見えるだけなんだ。それに、こうしなければならなかったんだ。こうでもないし俺はわからない。かつての俺はこの事態を知ることが出来ない。

俺は光がさつと引いて行くのをみて、夕日が殆ど沈みきってしまったことを知った。本当は半分くらいしか沈んでいないんだけど、最近高くなった地平線の上では沈んでしまったようなもの。夕空は夜の空へとの衣替えを確実に進めて行く。さっきのチャイムと共にちらちらと付き始めた電灯の光がかつての俺と池とを映している。

俺は何が気になったのかゆつくりと池に向かって前進し始めた。そろりそろりと動くそのさまはどこかの動物園でみたオラウータンに似てないわけでもない。って、似てるわけないか。なんせ、化学繊維で作られたパーカーやTシャツ、ジーンズを着ているわけなんだから。

つまり、そこで俺が見た自分というのは紛れもなくシアリとは似ても似つかぬ自分、吉川漂祈の自分なのであり、全く知らない人が自分とおなじ動作をしているのが湖に映っていたわけだ。で、当たり前だけど俺は驚いた。ドッペルゲンガーでも見たんじゃないか？
ってくらいに驚いて、さっきみたいにはっと飛びのいた。二回目だから尻が痛そうだ。

そして、すぐさま自分の体のあちこちを触り始めた。肩とか腹とか足とか、髪の毛とか。客観的に見れば変態にしか見えないけれど、あの時の俺は必死だった。自分が自分じゃないなんて中々に納得できなわけがない。肩を触ると、そこにはごっつごっつと表に出ている骨はなかった。腹を触るとちゃんと肉がついていて、足は頑丈そうだった。肌の色だってシアリとは違って健康的な小麦色。髪の毛はあの地方では珍しい真っ黒だ。

ここまで見てしまえばもう否定できるはずがなかった。



「漂祈、お帰りなさい」

優しくて温かい声が、吉川漂祈の中のかつての俺に突き刺さった。俺は決して漂祈ではないのに、それを弁明することもできず、彼女は優しくしてくれる。それも、無条件に。

とてもいたたまれない。けれど、このまま玄関に突っ立っているわけにも行かないので、靴を脱ぐ。俺は久しぶりの靴紐に戸惑い、何度かヒモをぐじゃぐじゃにしていまいながらも、何とか解いていた。もしかしたら、米なんて食べた日にはないちまいそうだな。嗚呼、どうしてこの夢は眺める今年かできねえーんだろう。嗚呼、味噌汁が飲みたいよ。

そういえば、今日の夜ご飯はなんなのだろう？ どうも辛いような、とても懐かしくておいしそうなおいがする。カレーかな？カレーだったらいいな。昔から好きだったから。否、良くない。今の俺は過去の俺を眺めることしかできねえんだ。むしろ、へこむ。お願いだからカレー以外になってくれ！

しかし、ジュースとたまねぎ独特の焼ける音が聞こえると、やっぱりカレーとしか思えなくて少し残念だ。いつそ目をそむけてしまおうかとも思ったが、夢から目は背けられるはずがない。こういう強制力は正直やめて欲しい。

そんな感じで気づけば俺は漂祈の部屋においてあったベッドに大の字になっていた。何かが潜んでいるわけでもないただの天井の一点を見つめてはまぶたを閉じ、まぶたを開ければ一点を見つめまた閉じている。何か思うところでもあったのだろうか？ やっぱり細かいところは大分忘れているな。しょうがねーよな。10年くらい前なんだしさ。

そして、俺は不意に立ち上がると今度は漂祈の勉強（笑）机をあ

さり始める。何が入っているのか。自分の記憶が何処まで信じられるかきつともよくわかってなかった。ヘタすればプライバシーの侵害だ。だけど、必死だったんだ。自分が自分であることを感じられるようにただただ必死だったんだ。

何個か引き出しを開ければ色々出てきた。主にゲームとかゲームとかゲームとかゲームとか。こいつはゲームオタっぽい。同人ゲームの売れたやつまである。否、其処まで知っていた自分もどうかと思ってしまったが。

どういうゲームが好きなのかな？ えっと、ヒロインはやっぱ巨乳姉キャラだけど、たまに子どもっぽくなるとかそういう子がいいか。髪の毛は金髪で。ツンデレではないけれどさ……。ゲームの内容はといえば、ギャルゲーが殆ど。あとはRPGだった。格ゲーも面白いんだけどな。

さてと、次に見るのは肩がけのスクールバックの中身だ。チャックは三段あって、とりあえず一番奥のものでも。えっと、何々？ 携帯か？ 俺はなんの躊躇もなく携帯を開き、メールをあげようとする。けれど、パスワードという壁にあたってしまった。

「ははは、漂祈の記憶があるんだ。こんなの邪魔でもなんでもねえよ」

あのときの俺はそうかつこ悪く呟いて、パスワードを入力してゆ

く。それにしても今のはなかったな。誰かに聞かれなくて本当によかった。聞かれちまえば、漂祈君の未来が確定だ。

「漂祈。ご飯よー」

しばらくすると、漂祈の母親が漂祈――俺を呼んだ。俺は、パタンと携帯を閉じると食卓のほうへと歩いていった。

挿話 俺と漂析（後書き）

えっと、挿話。まだまだ続きます。

それにしても、ワルドさんたちとのネタが終らない……。

誤字脱字その他諸々ありましたら、言ってくださいれば嬉しいです。

？ ティータイムに戦争は起こらない

「ねえ、お茶を持ってきて頂戴」

「はい、かしこお！」

とある虚無の日の学園の中庭に鋭く美しい少女の声と、ヘタレな少年の声が響く。

っていうか、俺とエレオノール嬢だった。

あの悪魔の拷問の日から数日、俺は完全なる二人の僕化していた。貴族だったら普通ありえないのだが、二人が異常なんだ！ 方や公爵家の長女。方や辺境伯家の長女。しかも留学生。一方俺は伯爵家の長男だが、親に嫌われている。故にこんなことになっても誰も突っ込めないのだ。

っていうか、いつも仲悪かったこいつ等が最近すごく仲がいいんだが……俺のおかげか？ けんかしないのはいいけれど、俺の両隣の席を占領したりと嫌がらせばかりしてくるのは何故だ！？

いやなあ、従者は主の傍にいつもいなければならないとか何とか言ってたけどよ、俺はいつから従者になった！？ といっても、二人ににらまれちまうと怖くて一度も突っ込めなかったけれども。一回がつんといえいいのかもしいけれど、正直そんな勇気があるわけない。地位が高い奴が調子に乗る理由がある意味よくわかったよ。下から見た世界をひっくり返して考えたから結構間違ってい

るだろうがさ。

上の立場ってのは誰かに文句を言われにくいのだ。それは、地位って言う核爆弾をちらちらさせているからだろうな。地位を行使すれば下のものの命なんて基本虫けら同然なんだ。

ここで重要なのは後に遺恨が残るかどうかな。無駄なことであらまれてもしようがないからな。その時、下の立場の日にとって基本的に上の人に適わないって考えているから、遺恨は残るけれどもうらむことはできない。そういうわけで、上の奴は調子に乗ってしまう。ストッパーがないから。

ただ、ある程度まで上にいつてないとすぐ落とされるから要注意だな。んなわけで、こいつ等二人はこの学校の中でバカにされたりもしながらも、一応上なんだ。下の奴は魔力でも地位でも適わない。ただ、他の奴等もしたってわけじゃないからここまで意地悪は普通出来ない。

しかし、俺の場合はちょっと事情が特殊なんだよ。

まず俺の地位と家族構成。さっきいったとおり伯爵家で長男だが、跡継ぎではない。そして、親に嫌われている。学校内での地位は魔力と家の力の中で、魔力は隠しているせいでドットレベル。家の力には無いに等しい。そして、相手に対して負い目があるから反抗できない。

幸運だったのはいいじってくる相手がこの二人だけだったことだな。

この嫌味な二人だっていう部分はあるより幸運じゃないが、他の奴等は関わりたがらないから多数対一にならねーんだ。数少ない例外はいるけどな。ミスタ・グラモンもというラックという名の馬鹿な女たらしがな。

俺が彼女たちの従者化してきた時に「お前はずるい！ 二人の美女を手籠めにし（ry）」とか何とかいってきて、勝負になっていらい仲がいいというか、悪いというか……。女運が悪いところで意気投合いたというか。結局殴り合っている中で、馬鹿話ばかりしているような悪友というか——まあいっか。友達じゃないといえば友達じゃないし、友達といえば友達って感じの関係だな。

あとは、ミスタ・ワルドに一回ほど話しかけられたっけ。つるペタ幼女についてどう思うかとかなんとか……。あれは白昼夢だったのか？ ミスタ・ワルドってたらこの学校一の優等生だって聞いてただけどなあ。家柄はあるより良くないけれども、文武両道で見た目もかっこよくて何でもできる俺が大っ嫌いなタイプの奴だって。

「あらあ……お茶はまだかしらあ？ おっそいわねえ」

「もう、ラズ。意地悪は止めなさいよ。っていつでも遅いわね」

「心配？ 大好きなレントのこと？」

「ま、まさか。そんなわけないじゃない！」

謎の会話が聞こえてくるけれどスルーしておこう。とりあえずお茶お茶。

確か二人がいつも飲むのはダージリンだから、普通にメイドさんに頼んで入れてもらったのを持って行くほうが速いか。変なのが好きじゃなくて本当によかった。

俺はメイドさんがたまっている庭の端の小さなテーブルまで行く。すると、白くて清潔なエプロンをつけたメイド、キャッセが微笑みながらポットを構えていた。美人とか可愛いとかそういうわけじゃないんだけど、ほっぺがふっくらとしていて愛嬌があるから結構好きだったりする。一個一個の動作も洗練されていて綺麗だし、喋り方とかはおっとりしてて俺が変態みたいだな。

「またダージリンを二つですか？」

「だから、敬語はいいって。まあその通りなんだけど」

おっし、今日はついに相手から話しかけてもらえたぜ!! いつも話しかけるのは俺の方からだったのに……。うん。なんかいいことがあるそうだ。

そんな事を考えている間も彼女は綺麗な白い手で重そうなポットの中の紅茶を注いでいる。1滴もこぼさず、適量入れる辺りかなりなれてそうなんだが実はまだ二十歳らしい。否、あくまでもこれは厨房のマルトーさんが酒でよっぱらってもらしたことだから信用ならないんだけどな。あ、そうだチップ今のうちにおいところ。

「えっと出来たんですけれど、まだ何かありますか？ ケーキとかは今日ないんですけど。あとで手作りしてもいいんですよ？ アッ

ブルパイ程度ならできますし」

「心動かされるけど、今日は止めとくよ。チップも少ないけれどちゃんとおいといたから。じゃあ！」

貴族に話しかける平民メイドより緊張している俺ってなんなんだろう？ やっぱりアップルパイのことを軽く後悔しているからか？俺は二つカップの乗ったトレイをゆっくりと持ち上げる。ここでお茶をこぼしたら全てが終るからな。さってと、早くもどんなきやな。

俺の休日は何だかんだでのんびりと過ぎていく。

？ ティータイムに戦争は起こらない（後書き）

誤字脱字その他何かありましたら報告よろしくお願いいたします。
あと、これはティータイムについての想像です。ティータイムってメイドさんいないかなって思っ、アニメ版一話を考えながらなんとなくだした結論です。

最後に、？について少し。

すみません、笑えないほど長いです。実は今もまだ書き終わってなくって。

上下にしようかな↓上中下になるかな？↓下の下ってなんだろう？
↓下の下の下の下って笑えないんだけど（今ココ）

しかも、学園編と名うっているのに学園じゃないし。おかしいなあ、色々とおかしいなあ。うん。だけど、今更引き返せないし。そんな感じです。

次の挿話ちゃんとかけるかな？

では

挿話 晩

食卓に行くと、其処には大きな机と4つの椅子があった。俺は漂祈の記憶に従って、何時もの席に座る。そこにはちゃんと、箸が一膳とカレーの入った大皿が一つ置いてあった。

他の席の前もそうなっていて、机の中央には紅い福神漬が入ったタッパーとそれを救うためのスプーン、あと冷たいお茶の入った大きなポットが一つおいてあった。席にはまだ俺以外の人はいない。

暇で暇でしょうがないから、福神漬けでもカレーにかけてみようかなと思ったのか、ちよつとだけ俺が右手を動かす。その時、廊下の方から一人分の足音が聞こえてきた。漂祈の記憶によれば大きくも小さくもないこの足音は兄貴のものらしいが、詳しくはわからない。

だけど、俺の記憶の中の親父よりは絶対小さい気がする。そもそも漂祈の母ちゃんは台所にいるし、漂祈の親父はいつもどおりならまだ帰ってきていないはずだ。消去方でも兄貴しかいねえだろう。

その予感は的中した。的中することに不都合はないが、そんな風に言うともまるで不都合があるように聞こえちまう。まあ、そんなことはおいといてだ、漂祈の兄貴はボタンと大きな音をたててドアを開き、大またで入ってくる。

カッコは普通に漂祈の記憶どおりのロックなカッコをしてみたが失敗してしまったような感じだった。顔事態はさつき湖に移った漂

祈の顔とは似ていず、妙にかっこいい。そういえば、こいつにギャルゲーを最初にあげたのはこのエセロックだったみたいだ。今は堕ちたもんだ。

エセロックが俺の左隣に座ると、今度はチャイムがなった。どうやら漂祈の親父が帰ってきたみたいだ。台所から漂祈の母ちゃんはパタパタと出てきて、机に同じ柄のコップを四つおくと玄関の方に走っていったしまった。

しばらくすると、玄関口から穏やかな漂祈の母ちゃんの声が出てくる。時折低くてしっかりした声も混ざる。どうやら漂祈の親父が帰ってきたみたいだ。俺はいつもの漂祈みたいに、姿勢を少し整える。あの声を聞いた時の条件反射みたいなものだ。

エセロックも俺みたいに姿勢を整えた。舌打ちをしながら。もしかして、漂祈の親父が苦手なのか？ よくわかんねえな。後で話してみるか？ っておっと、今の俺は幽霊のような状態なんだっけ。夢だから手が出せない。嗚呼、息苦しい。

とりあえず、妙に姿勢を正したまま、リビングに二人がやってくるのを待つ。その時間はやっぱり妙な沈黙が包み込んでいる。何か、すごく嫌な予感がした。

その嫌な予感こそ本当に的中した。

この後「いただきます」を言って、食事を始めると早速漂祈の親父が喋り始めた。酒が入るほどにそれは饒舌になり、さっきまでの威厳はもう目も当てられないほどに崩れていた。親父は喋る。見た目の割りによくしゃべる。殆どが上司の愚痴で、その声だけが食卓に響いていて、俺もエセロックも居心地がすごく悪そうだ。これは漂祈はしっかりと覚えていたけれど、あんまり信じたくなかった事実だ。

俺は昔、親父に妙な憧れを抱いてたからな。俺が転生する少し前にその憧れは見事に碎かれちゃまったけどな。リストラされてさ、けど飲んだくれたりしなかった。

それが親父がかっこいいと、親父にあこがれた理由。

ちょっとした仕事でも、再就職に向けて希望捨てなくて、生活が苦しくてもさ、一生懸命な親父を見ているのは好きだった。否、本当のことを言えば、そんな親父が恥ずかしいって思った時期もなくはなかったんだよ。たださ、結局俺は其処まで割り切った人間じゃなかった。

でも、ある日急に仕事をやめてしまったんだよ。何があったか詳しくは知らないけれど、その後母ちゃんがずっと働いて、そのお陰で俺は生きてた。あの時勿論大学に進学する道はなかったんだ。

漂祈はよくこんな家でこの暇で生きてこれた。どこか見掛け倒しなこの家で。俺だったら持たない。あの時だって殆ど限界だった俺がもつわけない。三日がきつと限界だ。三日がだ。

そうだ、後三日。俺は後三日以内にこの奇妙な状態を何とかしよう。

何もなかったように頑張って目を逸らしてきたがもう嫌だ。こんな中途半端な状態。まるで足が宙ぶらりんのようで安定しないんだ。自分が自分じゃないような気がして、それでもやっぱりよくわかんなくって。

後三日、三日以内に元に戻らないと何もかもが壊れそうだった。心から体、記憶までもが。

探そう。とにかく探そうじゃないか。

挿話 晩（後書き）

短めです。

予告していた話は何とか書き上げました。

最終的には上・中・下・下の下……下の下の下の下の下まで行ったのでまとめる作業が必要ですが。

それにしても最近他の二次創作の更新がわりかし停滞していてちょっと寂しいです。皆様やっぱ春は忙しいのでしょうか。

誤字脱字その他諸々ありましたら、報告よろしくお願いいたします。

？. 学園に戻る時までが遠足です 上

俺がお嬢様やお坊ちゃま（クラスメイト）と仲良くするのを拒んでいたのには理由がいくつかあるけれど、そのうちの一つで「変なことに巻き込まれそう。とくに位が高い奴」っていうのがあった。

俺は正直面倒くさがりや出し、人に注目されることでもっとあいっ（・・・）にねたまれるのも嫌だった。これ以上ねたまればいっそ殺されてしまうかもしれないから。尤も、生ぬるいあいつよりもぎりぎりの中で生きてきた俺の方が数倍強いし、あいつを殺すことにまったく躊躇なんてないんだけどな。たださ、あいつの地位が邪魔なんだよ。

——まったく、早く野たれ死んでくれねーかな。

とにかく俺は今、その点においてもものすごく後悔していた。

あいつ等の髪を燃やしたことによって、誰かと一緒にいる時間がふえ、誰かに嫌われやすい環境ができたんだからな。

まったく、あのまま墜落して運の悪い被害者の振りでもすればよかった。そのほうが、少なくとも人の悪意にまきこまれる確率は低かったんだと思う。

つまり、俺は現在進行型で悪意に巻き込まれていて、あいつ等に関わってしまったことをものすごく後悔しているんだ。

あいつ等の召使ごっこについてはまだいい。所詮、ごっこなんだからな。

まあ、この前メイドにやらせることを貴族がやってんのを見てみたいからとか言って、本気で俺に洗濯物を渡してきたときはびびったけどな。後は、手料理食べたいとか。否、俺が前世で一人暮らし目指して料理作れるようになってなかったら死んでたぞ。

ただ、本気でご飯を振舞ってしまったお陰で、たまに俺の飯が食べたいからといい、食堂を占領するのはやめるべきだと思う。お前等はなんだかんだで大貴族なんだから、みんなきいつかってしまつてむしろ邪魔だぞ？

そして、今日は虚無の日、悲しきことに休日だ。

休日に貴族の女がやることといえば……買い物しかないな。買い物をするということは至って街に出るってことだ。そこでは貴族への犯罪も結構数があつて、本来なら学生の少女二人で出かけるところではないと思うんだが。それで、例にならいあいつ等も買い物に行きたいとか言いやがって……。

「ねえ、レント。今日は何の日でしょう？」

エレオノール嬢は何かとても可笑しげに言う。

それは、どっかの手品師が相手をはめる時の笑顔にすごく似ていて、嫌な予感がしたのでちょっとだけ目をそらす。

隣にはいつものように面倒くさそうに座っているラズがいて、「

がんばりなさい」と表情だけで伝えてきた。しょうがないのでまたエレオノール嬢の方を見れば、にやっと笑った。

「虚無の日……だよな？」

「ええ、そうよ。虚無の日。ということで、私とラズの買い物に付き合ってくれない？」

やっぱりか。

うん、予想はついてたんだけど現実逃避をしてた。

だって、女の買い物って今まで付き合ったことはねーけど、すっげえ面倒くさいことくらいは知っていた。否、デートできる相手がいるだけまだいいとか、リア充爆発しろとか言っている奴にいう。彼女じゃない奴と買い物、しかも二人つきりじゃないに何の意味があると思っただけ！？

そうだ、俺は所詮荷物もちなんだよ。

あー。拒否権が欲しい。五大国じゃないけど拒否権が欲しい。

つか、どうせ二人とも金持ちなんだから普通に誰か使用人を連れてこいよ。特にラズは男友達（彼氏AB）とかいるじゃん。そっち使って欲しいんだけど。俺には病気の振りをして低下してしまった体力を取り戻すという使命があるんだよ！

「かわいらしい女の子二人に誘われて、断る気かしらあん？ それ
つてもものすごく失礼じゃない？」

ラズは、エレオノール嬢とは質の違う何時ものやにや笑いを浮かべたまま立ち上がり、俺に顔をものすごく近づけてくる。

エレオノール嬢が変な殺気を出してるから、正直すって首を引いてやりたいんだけど、体がうごかねえ。

俺の体、どうしてこんな時なのに動かないのか！？

ラズのおっそろしいフェロモン（笑）に当てられたとかいうのか。エレオノール嬢の殺気がラズの顔が近づくほどに強くなってくるよ。ついには鼻と鼻とがぶつかってしまいそうだ。

「止めなさいよ。ラズ。そんな奴に其処まで顔を近づける必要なんてないじゃない？」

「あらあらあ、ツンデレエレオノールちゃん？ 素直になれないのねえ」

つ、ツンデレだと！？ なぜラズ嬢がそんなことしてんだあ！？

俺が（あくまで心の中で）突っ込みを入れてみると、左頬に衝撃が走る。そう、悪魔の拷問の時のような衝撃が。きっと、エレオノール嬢の右ジャイブだ。この前諸事情によりラックを空のお星様に

したりもしてたっけ。

その鋭いパンチは俺の病気（仮）によりものすごく軽い体を意図も簡単に吹っ飛ばす。俺もまた空の星にでもなんのかな？

「ラズ、私久しぶりに決闘がしたくなってきたわ」

地上の方でとても危険な爆弾的な発言が聞こえる。空が近い。

「ええ、望むところよおん」

気が抜けたほうの発言も聞こえる。空が段々と遠くなる。早くレビテーションかフライを使わなければ、俺もお陀仏だ。

でも、ちよつと前に地上二階から負傷した状態で飛び降りても普通に生きてたし大丈夫かも知れんな。

「おい、レント！ ごめんよ！ さっさと星になれよ！ そして、俺の女難の相を取り除いてくれよ！」

……、俺は神速（自称）でマントの簡易ポケットから杖を取り出す。

「レビテーション！」

そう叫ぶと俺の体はふんわりと地面に着地した。まんとや服の砂を払う前に……。

「ウインド」

俺はまたも呪文を唱える。杖の先は勿論ラックに向いている。ラックは自分に杖が向いているのに気づいているのか気づいているのかは知らないが、とくに気にせず空に合唱を続けている。

——さらばだ、友達（仮）。

刹那、その風はラックの前髪を襲う。前髪は途端にふわっと舞い上がり額にかかれたらくがきをちらちらと見せ始めた。

あ、らくがきを書いたのは勿論俺。漢字で「馬鹿」と書いた。こっちの人には意味はよくわからないけれど、ダサイことはよくわかるみたいでそれを目撃した人たちは大笑いも大笑い。ラックは自分に起ったことがよくわからないのか、やっぱりしばらくきよろきよろしている。無様だ。めっちゃくちゃ無様だ。

「おい、レント！ お前……」

「俺を勝手に殺したラックが悪い。ざまあ見やがれ」

いつもは魔法で勝負していたけれど、今日はなんとなくおいかけっこになった。杖をお互いにしまつてガチでの鬼ごっこ。否、十秒も立たないうちに買い物に行きたがつたエレオノール嬢に力づくでとめられたけどさ。



「で、なんでラックがいるんだ？」

「いてはいけないかい？」

「駄目だ」

「レントもいけずだなあ、まったく」

ぽんぽんとラックは俺の方をたたいてくる。

まったく、両手が荷物でいっぱいのせいですごく痛いのが知ってやっつてるな？ 当のラックはといえば、そんなの知らぬ存ぜぬといったげに、下手な口笛を吹きながら王都の店一つ一つを見ては喜んでいる。これでも伯爵家長男か？ 俺には東京に出てこれた田舎のただの学生と同じようにしかみえねえーが。つか、ここが始めての理由もないだろうに。

まあ、確かにこの辺の店自体は面白いなあと思う。

すごいマント持ったメイジとかと庶民とかへの値段の差とか。それと、見た目の関係とか。いかにも怪しい店には庶民が寄り付かない。だが、メイジがたまに出入りしていて中から恐ろしい値段が聞こえたりする。一方、変な食道とかの前を通ると結構な安値で昼飯を提供していたり、其処に入るメイジを変な目で見る庶民の姿があったりと、結構面白い。店自体もおんぼろだったり、オシャレだったり、店員さんも美人さんが多かったり、元気なおっさんおばちゃんが多かったりと。

ただ、噂に聞いてた通り道が細いのがいただけねえ。店頭に並んでいるものに躓きそうだ。

それに、なんかすごく嫌な匂いがするんだよな。

ここらへんを往来している人の汗のにおいとか、メイジの香水の匂いだけじゃなくて、例えば血の匂いとか。いや、しておかしいものでやないんだけれど、こう強いと気味が悪い。

後は何かが腐ったような匂い。ラックも最初はそれを感じてたのか、「なんかやな匂いがしねえーか？」って鼻をつまみながら言っていたんだが、途中からは鼻をつまむのもやめてしまった。ラズ嬢もちよつと嫌そうな顔をしているけれどしうがなさそうだし、エレオノール嬢に至っては、さもそれが当たり前とか言いたげだ。さすが公爵家長女。一体ここに来んのも何回目なんだろうな？俺にはわからねえ境地だろうな。

まあ、何回も着てるからといって買い物で買う量はかわらねえが。むしろ、多分始めてきたと思われるラズ嬢よりも多い。

嵩張りやしねえが高いよくわかんねえような本やら金属やら、あとは薬も少しだけ買ってたな。確か、この前本人が「薬品作りはあんまり得意じゃないけど、できたほうが便利よね」とかいいながら学園の実験室、勝手に借りてたっけ。注意したら「公爵嬢権力よ」と、どっかの悪代官様みたいな感じで笑って、淡々と薬作りを続けてた。

一方ラズ嬢は服とアクセサリーばかり買っている。すごく重い。派手なのばかり買うから本当に重い。一個一個の値段も馬鹿みてえーに高いし、なんか偽物っぽいのも結構買っていたし、何処の世界も女ってかわんねえーなーって思わせていただいたよ。

え、ラック？ あいつはエロ本やら、怪しい薬草やら買おうとしてラズ嬢にたたかれてたな。そんなこんなで、ラズ嬢の荷物の半分はラックが持っている。本当に助かる。

「それで、なんでラックがいるんだ？ 荷物が半分でたすかるっちゃ助かるんだが」

「ミス——ラズ嬢に連行されたの見てただろ？」

「ああ……」

そうだ、ラズ嬢が連行してっただ。

あの後俺はエレオノール嬢に殴られて気を失ってたが、こいつは

ラズが殴ったのか。因果応報だ。いや、なんか意味が間違ってるか。こいつも俺と共になんか気づいたら馬車の中。外を覗けば王都でしたという体験をしたのか。

ついでに、その時の馬車は指定の場所で待っていてくれている。こっちについては二人が頼んでいたのを見たから確実だ。

全く、俺等も苦労人だ。お互いに伯爵家の長男だというのに。

「それにしても王都っていいよな！ 誰かくどいてもよさそうな感じがしないか？」

「お前って平民くどく趣味あったのか！？」

「ああ、女性でストライクゾーンだったらどんな人でもウェルカムさ！」

「ついでだが、お前のストライクゾーンって？」

「髪は金色で病弱でか弱そうな感じ。白い帽子とワンピースが似合えば最高！ あ、実はヤンデレだったとかそういうおちはなしで。お前は」

おま、なんでヤンデレとかしってる！？ って、俺？

「お、俺かよ!？　そうだな――いつでも朗らかに笑っててさ、ちよつと軽そうなところもあるかもしれないねえーけど、絶対に俺のことを裏切らないような、そんな人」

若葉みたいな。

そう続けたかったけど、こいつに言ってもしょうもないから言わなかった。若葉、一体今どうしてんのかな？　ちゃんとさ、生きてるかな？　若葉、俺の好きだった若葉。もしも、こっちの世界にいたら絶対に見つけ出して、両思いになってやるさ。

くっ、本人前だったらぜってえーいえねーな。こんなはずいこと。妄想ワールドってまじすげえ。

「じゃあ、お前さ。それって何歳であろうといいのか？」

「ああ、いいね。見た目じゃなくてそんな感じの子だったら。俺の電波にかかるなら、絶対に悪い子じゃない」

「自分のこと過信してんな」

「お互い様だろ？」

電波ってなんだよ。何歳でもいいってなんだよ。嘘だろ。冗談だろ。へっへっへと、ラックは俺の気持ちなんて気づかず笑っている。何時ものあのにくったらしいほどの笑顔で。

この馬鹿みたいな得意げな顔、いつか壊してやりたくなった。勿論不可能って事とか、そんなことできるほどの勇気が俺に眠ってるとは思えねーけど、所詮チキンの俺がそんなことできるわけないけど、そう思ってしまう自分がいた。

人間って破壊衝動と隣りあわせだって聞いた事がある。それは勿論前世なんだが、どんなに可愛い少女でも破壊衝動をもっていて、いつ暴走するかはわからないと。俺はさ、それを聞いた時に鼻で笑ったんだよ。

実際に破壊衝動が働くほど勇気がないチキンですって。いつ暴走するかはわかんねえけど、抑止力……勇気が無いっていう現実はいつでも目の前に突きつけられてるんだよ。残念ながら。暴走したって破壊できないってこともわかってんだよ。妙に悲しいけれど。

結局、今この瞬間にいらってきて相手を殺したいと思っても、気づいたら諦めてるんだ。暴走する前に自分の勇気の無さ、チキン具合が思い描かれて、あっさり諦めちゃうんだ。

「あの、お嬢様……」

「えっと、誰？」

変な思考にふけっていると、視界の端にエレオノール嬢と、彼女に話しかけている少年が見えた。

少年は昔の僕みたいな身なりをしていて、きっとこの辺で路上生活しているような奴。当然なんか下心があって、怪しいような気がする。ただ、エレオノール嬢は気づいていない。気づいているのかもしれないけれど、気にせず話そうとしている。俺にはどうしてかはわかんねえーけどな。

ラックとラズ嬢もなんか怪しいなと思っているのか、杖をすぐ取り出せるように構えている。あ、ていうか俺も構えなきゃ駄目か？

「お嬢様って、すごく綺麗ですね」

「そ、そうかしら？　そうなの？」

「はい！　本当に綺麗で。さっきから話しかけたいなあって思ってたんです。でも、高貴な雰囲気当てられちゃって」

少年は目を輝かせたまま少し俯く。エレオノール嬢はそんな反応をされてしまったせいで、どうすればいいのかわからないのかきよろきよろと目を動かし、俺達に助けを求めている。否、こっち見られても困るだけなんだけど。

「そ、それで？」

エレオノール嬢は溜め息をついてから、変に上ずった声で答える。少年はその答えを聞くと見計らったように、飴を差し出した。さつきから店頭でたまに見かけるペロペロキャンディのような飴だ。お値段の方は見た目によって、すごく高いのから安いので。それはきつとかなり安い飴だと思う。

簡単な板状でなにも彫られていないし、色も妙な赤色だ。綺麗だけれども。それでも彼にとってはかなり高い買い物だっただろう。

俺が思うに少年は物乞いだ。実際に見るのは初めてだけど、ここで正規に働いているのならばもっと質の良い物が着れるはず。それならば、自分をみじめに見せて物を稼ぐ物乞いしかありえない。物乞いだって、きつとそんなに高いお金は手に入らないはずだから、あの飴は彼の何日分、いや何か月分の給料かもわからない。しかし、簡単に買えるわけないんだ。

「よかったら、受け取ってください。き、気持ちです！」

なんで、どうして？ そんなこと言うのは無粋。きつと、恋でもしたんだろう。一目ぼれって奴？ 身分違いだから何にも望んでないけど、ただ伝えたかったとか。

むしられる確率もあったのに、よくやるよな。つか、もうちょ

っとひどい奴だったら「話しかけるな！ 無礼者」って言って、ようしやなしに魔法ぶっ飛ばしたよな。否、あいつ俺相手なら身分関係なしにぶっ飛ばすけど。

エレオノール嬢はどうしていいのかわからないのかまたこっちに視線を飛ばす。俺は首を左右に振り、ラックはよそを見る。ラズ嬢は何時ものニヤニヤ笑いを浮かべているだけだった。

「あ、ありがとう……。じゃあっね！」

……強引に会話終らせて逃げんなよ。少年があっけに取られたような顔してんぞ！

「なんでたすけなかったのよ！」

「助けるって無害だろ？」

「無害だけど。あああっあ！ もういらいらする。ここは助けるのが筋なのよ。筋！」

「はあ？ それ、ひどくねえか？」

「ひどい？ 何を言っているのかしら。私に向かつて」

エレオノール嬢はさっきまでのおろおろさ加減もどっかへ行き、
明るい顔でキャンディーをなめている。それを見ればさ、まあいっ
かって気持ちになっちゃうんだよね。なんかさ。

◇

(??? side)

私はすたすたとできるだけ足音を立てないように彼についてゆく。
たまに歩調を速めたり遅めたり、武器屋さんや本屋さんを見つけれ
と積極的の中に入って行くし、良く曲がるしここまで着いてくるの
は大変だったけど、なんとか突っ込まれずにここまでこれた。

それなのに、どうしてか知らないけれど私が進んだ道は行き止ま
りで、其処にワルド(・・・)様がない。瞬間移動なんてあの方
ならできるといふような気がするけれど、現実でありえるわけ無いわ。ど
うして。

「ねえ、其処の君。どうして私をつけてきたのかい？」

「ひゃっ！」

私は突然背後から憧れのワルド様に話しかけられ、答えることができない。嬉しいけど、怖くて。そう、声が何時もの温暖な感じがしないから。どこかすごく鋭くて、氷柱のような迫力を感じたから。

振り返ってしまいたかったけれど、無理。きっと、私なんて振り返った瞬間に刺されちゃうんだ。いつもあなたが持っている剣で一突きにされてしまうんだ。

「振り返りなよ。刺したりはしない。君はなんだかんだで貴族なんだ。簡単には殺せないよ」

「ひ……」

貴族じゃなければ殺すんだ。ワルド様は善人かもしれないけれど、自分に敵対する人には全然容赦しないんだ。実は身分制度なんてどうでもいいし、今すぐにも私のことを殺してしまいたいんだ。

いつもは思うことさえできないような妄想が瞬時に頭を駆け巡る。振り向けない理由が増えてしまった。けど、このまま振り向けなければ、どこか鋭いまなざしで私の顔を覗き込むんだろうな。そんな表情は私には想像できないけれど、ワルド様が持っている怖い一面が私を見つめるんだ。

「早く振り返っちゃいなよ。私だって自分を自制しきれるほど大人じゃないし、怖がりなんだよ」

「こわ、がり？」

ワルド様がこわがり？ そうだとしたら私はなんなの？ いつも帯刀していて今のところ敵なしのあなたが怖がりならば、私は病気なの？ あなたが恐れるものがあるってことも私には信じられない。私にとってワルド様は何でもできる憧れの人――雲の上にいるような人だから。

ついこないだワルドさまは恐ろしいオーク鬼を5匹一人で殺したと風の噂で聞いた。事実かはわからないけれど、優秀な剣の使い手であり風の使い手でもある彼ならばできるような気がした。学生とかそんなの関係なく。そんなワルド様にまだ怖がるものが残っていたとしたら……。

「私はね、人の悪意というものが物凄く怖い。怖くて怖くてたまらないんだ。私が君を殺すなら、周囲の人は私をどう見るのだろうね？」

「な、んだ。そんなことなのね？」

人の悪意。確かにオーク鬼の三倍は怖い。いいえ、人の善意もそうだけど悪意なんて測ることもままならないわね。なるほど、うまく言うわ。余計ワルド様のことが好きになっちゃった。

完璧な人よりも少し欠けた人のほうが世間一般には好まれるけれど、確かにそうね。怖いものなしだったりしても人間味がなくていやかもしれないわ。

「まあ、とにかく振り向きなよ。ほら、杖も剣も持っていないからさ」

「どうせ神速で抜けると私は思うの」

「それは一本取られたね。いいだろう？ どうせ逃げられないんだ。さっさと振り向きなよ。君について僕は何にも知らないんだ。せめて、名前くらい教えて欲しい」

さっきからは大分穏やかな声でいう。半ば可笑しそうに。私もこのまま背中を向けているわけには行かないわ。考えてみれば、殺すならば背中から突くべきよね。それだったのなら殺される心配もする必要はない。

よし、くよくよ考えててもしょうがないしさっさと振り返ってしましましょう。

左足を軸にくるっと優雅に、そうワルド様にできるだけ良い印象を残そうと丁寧にまわる。そして、向き合ったならいつか習ったように、ペコリとスカートをつまんでお辞儀をしてから微笑み、自分の中できつと一番美しい顔で言う。

「お久しぶりです。バーガンディ伯爵家次女、リダ・ド・バーガンディです。あなたのクラスメイトであって、たまに話しかけたりするのですけれど、ご存知ありませんか？　ワルド様」

side out



それで、今に至るって……まだ話がたりねえな。そうそう、導入部分なんてむしろどうでもいいんだ。問題はあの飴だったんだよ。

？. 学園に戻る時までが遠足です 上（後書き）

今まで予告し続けてきた長編の上です

シヨッピングの話なのにシヨッピングが始まらないし、無駄に長い

誤字脱字その他諸々描写について「あれ、なんか変かも？」って部分があったら教えてくださいな

？、学園に戻るまでが遠足です 中

「飴、おいしいかしらあ？」

「ええ、独特の風味があって結構甘くておいしいわ。ぶどう酒みた
いって言えばいいのかしら？ 庶民の食べ物って意外とおいしいの
ね」

何時もはきれまくりのエレオノール嬢は飴をなめてほくほく顔だ。
そんな顔されちまうとやっぱ手をださなくて良かったと思ってし
まう。ただ、独特の風味って何なのだろうか？ 体に悪いものでも
入っていないといいんだけどさ……。

ただ、今のほくほくさ加減はちょっとだけ異常な気がする。いつ
もはつつかかってばかりのラズ嬢のセリフにも笑顔で答えるなん
て可笑しさ極まりないんだ。俺の考えすぎなのか？ 考えすぎの方
が嬉しいんだけどさ。

まあいい。とりあえず今迷惑しているラックのことでも考えよう。
あそこからまだ二三十歩しか歩いていないのに、ラックはというと
店頭で飴を見かけるたびによだれをたらしかけて引っ込めている。
さすがに貴族という猫もかぶっているから、外聞も無くだらしなく
はできないらしい。それだけならばいいんだがさ、たまに自分の財
布をみたりしながらだから少し悲しいんだ。あのエロ本を買って金
の殆どを失ったらしい。ったく、馬鹿だ。本当に馬鹿だ。

しかも、俺に買って欲しいのかちらっちらっと視線を飛ばしてくる。潤んだ目で。お前はどっかのおもちゃ屋の前で泣き出す子供か。俺も金がねえんだ。我慢しろ！ 一千万歩譲って慰めてやってもいいが、俺は譲らない。

「っていうわけで、レント。この飴なめてみなさいよ」

「はあ!？」

え、エレオノール嬢がまた変なこと言い出した。ラズ嬢は本日三回目のニヤニヤ笑いをしている。つーか、ラック。子犬みたいな目でみんな。今にも怒り出したいが、大人になろうと自分に言い聞かせあくまでも上っ面だけは冷静な声でエレオノール嬢に尋ねる。

「なんで俺がその飴をなめるんだよ？」

「ラズがこれ本当においしいのか疑ってきたのよ。自分でなめればいいじゃないって言えば”まずかったら嫌よおん、レントに食べさせなさあい”って言うってくるの。あの子に従うのは癪だけどその方がいいと思って。嫌？」

嫌？ ってなんだよ。お前ラズの声真似うますぎだよ。気づけよ、エレオノール嬢。だまされるなエレオノール嬢。それは

間接キスだ！

ジュースくらいならまだましだったかもしれない。ごまかしようがある。しょうがなかった勘がある。しかし、ペロペロキャンディーの間接キスって、大様ゲームののりでなんとなくやってしまったポツキーゲームレベルの恥ずかしさがあるぞ！

つか、実はお前は俺が好きで、全部気づいていてわざと強要してるのか？　ないな。前提がそもそも崩壊している。っていうか、これに逃げる方法はあるのか？　なあ。

「ほらあ、エレオノールちゃんのためよおん？　やってあげなさいよお」

ラズ嬢がいつのまにか隣に立っていて、耳元で囁いてくる。間接キスになることぜってえー知ってんだろ？　こういう風に仕向けた現況はお前だろって叫びだしたかったが、俺は押される。絶えろ、自分！

「な……なあ、どうしてもか？」

「拒否権は無いわ」

自滅するのを知っててこれをいうならば、エレオノールさんは相当積極的だけど、まあそれは無いとして、逃げたいです。ラックの犬のような目からも逃げたかったけど、エレオノール嬢から本気で逃げたいです。

もしかして、この子酔えば恐ろしいことになるかもしれない。未来が心配だって現実逃避を無意識にやっている自分がいた！
（そして、この予想が正しかったことを約5年後に知ることになるのだが、それは別の話）

「ほら、やってしまいなさいよお」

ラズ嬢は相変わらず悪魔のように囁きかけてくる。

もういい！

俺はやけになって差し出された確かにぶどうの香りがするペロペロキャンディを強奪、そして、なめた。思いつきなめた。投げようとも一瞬思っただけで、そうしたら浮かべるであろう悲しげなエレオノールの表情が瞬間的に思えば、ついやめてしまった。

で、味の方を真剣に考察して――？

「インクベリー……だよな？」

「どうしての、顔を真っ青にしてってきやああ」

俺は今度こそペロペロキャンディを投げ捨てた。

Side リダ

「あら。それでてっきり私が敵だと……」

「ああ、すまない」

「いえ。私がワルド様と二人っきりで話せること自体が奇跡なんです。学園からつけてきて本当に良かったわ」

「それは、ストーカ「なんですか？」 いや、なんでもない」

ワルド様は私から事情を聞くと、驚いてからふーといっきに肩を落として笑ってくださった。どうやら、私の尾行を感じてどっかの

敵だと思ったらいいわ。まあ、尾行にはちょっと自信があったけれど、まさかプロレベルだと思っていただけなんてびっくり。ちょっと嬉しかった。

ただ、誉めていただけた以上にやっぱり、二人っきりでおしゃべりって言う状況が嬉しくてたまらない。学園では殆ど話すこともできなかったし、私はただ一方的に見つめるばかりだったから。それに、学園でのワルド様って優しい感じがするんだけど、どこか一歩下がったような感じで……。そう、ちょっと前のミスタ・バルソビアナみたいな感じなのよね。

クラスメイト全員の名前を覚えるために、それぞれ特徴と関連づけるのだけど、あの人の時は特徴が無くて困ったわ。喋らないんですもの。ちょっと話しかけても、気づいたら話が終ってたり、不思議な人だった。あれでは貴族の世界でやっていけないわねとか、そんな事を一瞬感じたりしたもの、実は人によって人格を変えてしまいうタイプかなと思ってみたり、色々と創造のしがいがあったわ。

けど、結局一歩引いた人のイメージで覚えたのだけだね。ついでに、ワルド様は私の愛している人。ラズさんは、嫌味な人。エレオノールさんは強気な人。ミスタ・グラモンは愛すべき馬鹿、だっけ？
今のミスタ・バルソビアナは残念な人ね。

「本当にすまなかった」

「いえ、そこまで謝らなくても！」

「でも、やっぱりクラスメイトを疑うのは悪いような……」

「な、なら！ 私とデートをしてください。償いみたいな意味で、です」

「デート？」

勢いで言ってしまいました。どうしよう。取り消したくないけれど、ワルド様が不思議そうな顔をしていらっやいます。やっぱり、駄目ですかね？ 私みたいな子じゃ駄目ですか？

そうよ、私がつりあうわけないのよ。まず、見た目。私はそばかすがたくさんついたちやい子だけど、ワルド様は美男子。魔法の実力だって私は全然駄目だし、紅茶を入れるのがうまいわけでもないわ。唯一爵位は勝ってるかもしれないけれど、それは親の爵位……。

「ごめんなさい！ 勝手なことを言い出して」

「いや、別にそれで許してくれるならば君は優しいよ」

「ありがとうございます。けれど、私はそんな優しくないです」

だって、こういう時は普通謙遜して何にも頼まないでしょ？　なのに、つい本音を出しちゃった私は駄目じゃないですか。淑女失格です。

それなのに私を誉めてくれるワルド様って、やっぱり誉め上手なだけですか？　嬉しいけれど中身が伴ってないような気がしてしまいます。いつもの温かい微笑のように。さっきの冷たい声の方が感情を感じられたのは私だけでしょうか？　冷たい声って無機質な声って良く思われます。でも、あの声を今考えれば、もっと恐怖が含まれていたかもしれません。自分がつけられていることに対する大きな恐怖が。一方、学校での微笑みってただ形式的にそうしているのかもしれない。笑っていた方がいいから笑えばなしでいるような、そんな投げやり間があるような気もするんです。

気のせいですね？

「まあ、時間がこのまま過ぎてしまっただけじゃない。そろそろ中央通に戻りましょう。ミス・バーガンディ」

「もう一つ頼んでいいかしら？」

「できるだけかなえましょう」

「私をリダと呼んでください。あなたをジャンって呼びますから。駄目ですか？」

「あ、はい。わかりました。リダ」

わ、ワルド様——ジャンが私をリダって呼んでくれたわ。やっぱり私ははしたなくても愛に生きますわ。だって、どんな形でも照れたような顔されて、好きな人に自分の名前を呼んでもらうというのはドキドキしちゃうし、それでまたすごく嬉しくって。ああ、もう今の記憶が永遠に私の中に残るなら殺されてもいいってくらい幸せ。

なのに、人って願えば叶うと知ったら願いたいことって大量にできてしまうのね。最初はデートだけでも嬉しかったのに。私はそつとジャンの大きな手に自分の手をのせた。人らしいぬくもりがじんわりと手に広がっていく。それがまた嬉しくって。

「えっと、私なんかと手を……」

「すみません、わがままな娘で」

いつもみたいに俯かないで、たまには顔をあげてジャンと話す。恥ずかしいし、どういう反応をしたのかすぐわかってしまうから怖

い。だけど、“こういう言葉を言うなら、いたずらをするような顔で言った方が徳よ”っていつかラズさんが言ってたから。あの人は確かに嫌味な子。美人だし金持ちで、魔法もできる。もてるくせに告白してくる人は片っ端から振って、自分より強い人が好きだわなんてぬかす。そんな人めったにいないのに。わがままで強欲。でもね、嘘をつかないの。絶対に嘘はつかないのよ。

「いいや、デートだからな。手くらいつなごうじゃないか」

ラズさん、ありがとう。

side out



「ちょっと、レント何するのよ!」

「ったく、やっぱり貰ってすぐに捨てればよかった」

「なんでよ。折角好意で貰ったのに」

「エレオノール嬢は綺麗って言われて浮かれてただけだろ!？」

街中でいきなり不満そうに泣きたげなめで見つめられる、という最悪の事態は回避できた。一緒にいるものの一言も喋らないとか、そういうことにもならなかった。うん、それだけでまだ良かったのかもしれない。けどな、俺が飴をいきなり飛ばしたからといってすぐに怒んなよ。こっちにも考えがあるかもしれないってことくらい考えろ。

そうだよ、おかしすぎるんだ。平民がいきなり貴族にプレゼントを渡すなんて。そこにさっさと気づけよ。箱入りのお嬢様は毒を入られた料理なんて食べる機会が無かったかも知れねえが、可能性くらい考えろよ。

俺がこんなにかっかしてんのにエレオノール嬢は言葉を返してこない。さっきまで、お前だっていらいらしていたのに、なんで急に黙るんだよ。俺がすぐく悪い奴みたいじゃねえーか。否、もしかして実は相当キレていて言葉を返すこともできないとか？ 無いな。さすがにエレオノール嬢も子どもじゃねえんだ。ペロペロキャンディ一つでそれは無いだろ。

「ねえ……嫉妬でもした？」

「はああ!？」

今日は変な日かもしれない。すごく変な日かもしれない。俺、今日三回も意味不明発言を聞いちゃったよ。

というか、変な俯き加減で顔赤くしてぼそぼそとそんなこと言うなんて反則だろ。なあ？ 隠れ爆弾女、エレオノール嬢よ。なんか少しだけ可愛い奴とか思っちゃうじゃねえか。いつもは足蹴にしたり変な命令してきたりうんざりだけど。

俺の好み、若葉からは一千m以上離れてるはずなんだけどさ。あいつ自身にはものすごく失礼かもしれないけど。

もしかして、もしかして“エレオノール嬢は綺麗って言われて浮かれてただけだろ！”っていう言葉に反応したか？ このいかにも無茶振りの多い駄目彼氏みたいなセリフに。否、文脈ももうよ。これには、俺以外の奴に綺麗と言われて喜ぶなよとか、そういう少女漫画独特のツンデレ男子のセリフのような意味はないから。

あれ、この子実は脳内お花畑？ なわけねえよな。

「べ、別にあんたなんか好かれても嬉しくなんか無いんだからね！？」

ツンデレテンプレセリフきたあっあ！ エレオノール嬢のキャラが恐ろしく崩壊してるよ。そして、俺のもしかしては正解だったのか。嫌だな、それはすごく嫌だ。エレオノール嬢が実は脳内お花畑ちゃんか、俺が好きだっていう結論が……否、俺がすきって言う

確率は無いな。俺に好きになってもらえる要素もなければ、エレオノール嬢が俺が好きそうなそぶりも無い。少なくとも俺は鈍感のつもりは無いから、これが事実だ。

「なんか反応しなさいよ。もう、いいんだから！」

何もよくねえ！俺がそう叫ばないように自重している隙に、エレオノール嬢はラズ嬢を連れてあつという間に逃げていつてしまった。俺の両手に荷物を残したまま。

振られる男ってこんな感じだよな。両思いだった形跡をさ、金って言う形で残されて消えて行く辺りまさにこんなかんじだ。ほら、ドラマで美人局にだまされる人って必ず相手の女性にいろんなものを貢いでて、最後はその勘定だけ残して捨てられるんだよな。金は払ってねえけど、両肩が重い。

「ちっと悲しいな。レント」

「そんなもんだ」

友情って大切だな。

リダ side

「あの、さっさと街に出てしませんか？ 私、こういうところ苦手なんです」

苦手じゃない人のほうがおかしいと思うけれど、とは続けなかった。変な皮肉をジャンに言ってもしょうがないから。やっぱり好きな人には普通のかわいらしい女の子って思ってもらいたいから。あ、でも私の見た目はそんなに可愛くないよね。性格だって内気で、ちよっとした事で怒ったり……やっぱりジャンとは嘘のデートだと思っても全然つりあわないよ。

「すまないね。気が利かなくて。こんなデートの相手が男じゃ駄目だね」

「いえ、私が無理を言っただけなんです」

また、ジャンに気を使わせちゃった。もっとうまく喋ればいいのに。今の返事だって変に硬かったから、もしかしたら私が怒ってるって思われてしまったかもしれない。

一言喋るたびに不安が何個も現れて、この緊張で胸が破裂して死んでしまいそう。こんなことならジャンと無理やりデートしようって考えるんじゃないか、なんてどうしても思えないし、不安でた

まらないのにジャンと二人つきりでいられる状況が嬉しくてたまらない。そんな自分がまた調子のいい女にしか思えなくて、また自己嫌悪してしまうんだけど。

「まあ、とにかく買い物にでも行こう」

ジャンは少しだけ顔を上向きにしていた。それが隣から見るとあんまりにもかっこよくって、ついじーつと顔を見つめてしまう。変に思われるかもしれないけど、目を逸らすこともできない。

だけど、その瞳に目をうつすと何か嫌な予感がした。ジャンの目がどこか遠いところに向いているような気がして、無性に怖くなる。いつかジャンはその遠いところに行ってしまうような気がして、その時私は忘れられてしまうような気がして。私なんて特徴も無いから、きっと学園限りの付き合いになってしまうと思う。私はそれくらい重々承知している。それでもね、心のどこかで未来にそんなクラスメイトもいたなって覚えていてくれるのを望んでいる自分もいて、わがままかなって思うんだけど、やっぱり覚えていてくれないと寂しい。嫌だ。だから、こんなにはつきり想像できてしまうと怖かった。いつかそれが現実になってしまいそうで。

せめて、今隣から消えないように私は小さな子供のように、つないだ手を引っ張る。ごつごつとした傷の多い手。ジャンは剣も得意だって聞いたことあるけれど、昔から手がこんなになるまで練習したからなのよね。

天才ってジャンはよく呼ばれる。なんでもできて当たり前ってみんなに思われている。その通りジャンはなんでもできる。

けれど、最初からできたんじゃないんだ。私、よく見るよ？ 自分の疑問を先生にぶつけているところ。一生懸命考えて、考えた末にわからなかったことを人に聞いて、それでまたすぐなくなっていくジャンが好き。その質問は私には難しすぎて全然わからなかったけど、その答えを見つけたジャンの幸せそうな微笑を見ると、すごく嬉しくなってしまう。私はそれで充分。

だから、ちょっと怖い。いつか答えのない疑問にぶちあたってジャンが挫折してしまわないか。そして、その答えを探すためにとんでもない罪を犯してしまわないか。その罪のために彼は遠いところに言ってしまうんじゃないか。

妄想？ 妄想だよ。

だけど、私にはどこまでも現実味のある妄想。いつも隣にいるような恐怖。私は平凡な人生を送ると思う。だって私はそんな風に努力できるほど頭良くないから。誰かの影になってしか生きていけないから。

でも、彼は影を作らなきゃいけないの。彼は表で戦わないといけないの。永遠に平和な世界に生きていけないの。未来には落ちぶれるかもしれない。そういう選択肢もある。だけど、ジャンはそうはならない気がするの。きっと、今のまま天才と思われ続けて、自分でも信じているうちに壊れてしまうんだ。

——そんなの嫌だよ。そんなの嫌だけど。

「どうしたのかい？　リダ。何かお気に召さないことでも？」

「そんなことないわ！　いきましよう。買い物。こんなとこにいつまでもいたて、危ないだけですもの」

そう、裏路地なんて危なくないわけが無いわ。さっきから目の前にジャンがいるから無視し続けてたけれど。そんなの見たくないから、見えない振りをしていたけれど、もう我慢できない。慣れていくけれど、苦手なの。この匂い。

王都だというのに裏路地に出ればまず鼻がひんまりそうな匂いがする。それは、排泄物の匂い。人間がここで暮らしている跡。こんなところでも人は暮らしているの。あとは腐ってしまった食べ物や生物の匂い。食べ物はまだ殆ど残ってはいないけれど、生物には今は死体でもないただの骨から灰、流血している生物まで悲しいほどにヴァリエーション豊富。そのうち人間の殆どは今挙げたみたいな派手な死に方はしていないの。痩せ細った人間が一番多い。そう、餓死しているの。

私が豪華な食事をしている間にも何人もの人が死んで、最後には土に還って行く。昔は少しだけ反抗心を感じたけれど、今はもうそれが当然。慣れちゃったの。私は危険の外に生きてるからなれちゃったの。人間ってほんとうに恐ろしいわ。

その時、私とジャンがつないでいた手を切るように少年が走ってきた。みすばらしい小さな茶髪の少年だ。みためはみすばらしいのに、私達の手を切ったその時なんとなくみすばらしい姿とは似合わないぶどうのような匂いがした。気のせいなんだろうけど。そして、少年はその勢いを殺さずに走ったため、道の端の壁にぶつかってしまった。ここは行き止まりですから。

少年のことはあんまり気にしないで、もう一度ジャンと手をつなぎなおそうと顔を見ると、今度は少し考え事をしているようだった。たまに少年を見るところからきっと少年についての考え事なのでしょう。その当の少年は壁にぶつかってしまったことで気を失い、倒れているのですけど。

今ここで、手をつないでいいですかなんて聞いてもしようがないので、私はこっそり手をつなぐことにしました。またもじんわりとジャンのぬくもりが広がっていきます。

side out



「それでだレント、あのキャンディなんだったんだ？」

「嗚呼、説明してなかったっけ？」

「おいおい、ぼけんには早すぎるぜ？」

「余計なお世話だ」

俺等は二人になったところで無駄な会話を繰り返す。いつも学園で話していてもこんな感じだけだな。ラックというのは気が楽という点では結構楽しい。昔、サイトと話していたような軽い感じがいいんだ。こっちの人は変に固くってさ、やってられねえよ。本当に。

ラックも俺と出会うまではそうだったらしい。詳しい過去はよくわかんねえけど、変なことばっかしてたらしい。元帥さんの長男ってなれば変な付き合いも沢山あって疲れる、っていつて剣ばっか弄繰り回して、人どろくに付き合わない。弟がそんなことたまにこぼしてたっけ。平民と話していた方がむしろ性があうって本人も笑ってた。

だからさ、俺みたいに変に気さくな伯爵家長男さんなんて珍しいらしい。俺は世間知らずだからそんな周りのことはわかんねえけど、ここの学園の人を見るとさ、わからないこともなくなってきてしまう。みんながみんなクラスメイトみたいだと、俺も疲れるよ。変な陰謀にいそしんだり、人を馬鹿にしたりで忙しいなんて本当に泣きたくなってしまうね。

「んでさ、さっきのキャンディの話さっさとしろよ。黙りこくつてると気味が悪い」

「すまん。えっとキャンディの話だな？ あれ、実は毒が入ってたんだ」

「はああ!？」

ラックはさっきの俺みたいいきなり叫び声をあげる。まあ、毒と隣り合わせの幼少時代をすごした貴族なんてきつと俺くらいのものである。毒なんてさどっか現実味なくて当たり前だ。実際に毒殺なんていうへまするのは見た目だけの馬鹿くらいで、元帥家だったら軍事系だし、さすがにそれがあれば困る。

伯爵家だってそれなりっていえばそれなりなんだが、毒殺を行っている犯人って言うのが親だったりするからなあ。それはそれで日常。間引こうとしてるってことだ。俺に毒なんてきくわけないんだけどな。シアリの頃に免疫できてるし。

「その毒のもとの植物の名前がインクベリーってさ、色が服につくとなかなかおちないっていう厄介な実をつける。それで、そのみためがぶどうそっくりでさあ。味自体はあんまりいいとはいえないんだけどな、毒があるんだよ。インクベリーの葉から根まで、実だって危険な毒。食べちゃったらだいたい二時間後くらいに毒が効果

を發揮して、強い吐き気と下痢に見舞われるんだよ。地味だけどやな感じだろう？ 小さい子なんて、果汁が直接触れるだけでもアウト。最悪死ぬ」

「え、エレオノール嬢は大丈夫なのか？」

「うーん、魔法あるし公爵嬢だし金あるし、なんとかなるんじゃないかねえの？」

それにあの死ぬ氣しないし。病気にもぜってえならないと思うし。少なくとも今しなれては困るから、俺が直してあげてもいいし、そもそもあの摂取量で毒が症状をあらわすかもわかんないし、心配するだけ無駄な気がする。

まあ、ラックは軽く本気で心配してたのか、俺がこう答えるとほっとしたように一息ついた。そんなにあいつのことを心配するなら、俺のこともついでに心配してほしかったよ、我が親友。結局最後は女なのかって俺軽く落ち込んでんだけど。

「よかった。で、お前なんでそんなこと知ってるんだ？」

「禁則事項です」

「何も可愛くねー」

「余計なお世話だ」

ハ○ヒネタがみごとに滑ってしまった。それにしても、こっちの人って時々よくわかんねえこと知ってるよな。この前ツンデレって言葉聞いたし、今のこの反応、まるで本家を知っているみたいじゃねえか！！　まあ、気のせいだよな。

とりあえず、ねたのお陰で説明するっていう事態は回避できたっぽいな。うん、助かった。こいつが単純で。

その時、背後から軽くとんとんと軽く肩をたたかれた。ラックは目の前にいるし、エレオノール嬢でも戻ってきたかなと思いながら、振り返ってみれば、そこには知らない少女とミスタ・ワルドー―推定ロリコンが居た。けっ、相変わらずすかした顔してて存在だけでもうむかつく。あんなロリコンの彼女だなんて、かわいそうだな。あの子。

「この飴って、もしかしてミスタ・バルソビアナの？」

「え。なんで名前知ってんだ？」

「あなたも私のこと知らないんですね。あなたのクラスメイトのリダ・ド・バーガンディです」

クラスメイトかよ。すみません、軽く心の中にひきこもり気味だったんで外界のことなんて知りませんでした。って、なに言ってるんだか。ラックの方はどうやら彼女のことを知っていたっぽい。軽く会釈していたからな。

「それで、この飴なんですけど……」

「あ、俺の連れのだけど……。すまない」

「いいえ、それはいいんですけど。服が汚れてしまっ

え？

彼女は俺に飴を渡すと、ふんわりとしたスカートの端をつまみ上げこっちに見えるようにする。確かに真っ赤になっていた。これって十中八九俺が飴投げたせいだな。

無言で軽くにらみつけているリダさんの背後霊が怖い。

「すみません！ 馬鹿な俺はどう責任取ればいいかわかりません！」

「おいっ」

ラックにつっこまれてしまった。

リダ side

しかし、その手もすぐに離れてしまう。ジャンは丁寧に私の手を払いのけ、剣の柄を掴む。私としてはどうしてそんな事をするのかさっぱりわからなくて、さっきみたいにおろおろとジャンの背後に回りこんだ。それを見計らってか、私が移動を終えるとジャンは一步、また一步とゆっくり少年にむかって歩き始める。何故かその動く様子を見ると、さっきのあの冷たい雰囲気を感じ出します。まるで少年を警戒しているみたいに。

やっぱりもうちょっと離れた方がいいのかもしれない。私はさらにもう一步ジャン達から離れるように下がった。その頃にはいよいよ二人は近づいて、そこから剣を延ばせば彼の心臓をさせそうなくらいです。一体何をやる気なのかしら？

「そこの平民、起きろ」

低く押し殺したような声が裏路地に響いた。さっきの私に対するやりとりの比では無いほどに、その響は恐ろしさを含んでいて、この辺りを何か動物が通ろうとするなら、すぐに逃げてしまうでしょう。それほどに本能的に怖い声。

それが私はものすごく嫌だった。怖いけれど、それ以上に嫌。好きな人が悪魔にとりつかれてしまったようで、ものすごく嫌なの。いつものジャンはかっこよくって、優しくって、いつも半歩下がっているけれど、それがまたかっこいいっていう人。決してこんな悪魔や獣のような感じではないの。普通ならば、また新しい一面を知れたって喜ぶべきなんだと思う。確かに嬉しかったよ。学園の女の子たちが誰も知らないジャンを知れたみたいで。だけど、それよりも嫌悪が十倍くらい勝ってる。理想を押し付けているのかも知れないけれど、たまには強気じゃなきゃいけないのかもしれないけど、嫌なの。それこそ本能的に、生理的に嫌。

早く終って欲しい。私は怖くて動けないから。ジャンがまた戻ってきて欲しい。何時もの、人間らしくて誰よりも素敵なジャンが。

それなのに、平民は中々起きない。こんな殺伐とした雰囲気の中のんきに気を失っている。私はいらいらしながらも、顔には出せない。本当に眉一本緊張で動かせないの。

「早く起きろ。さもなくば刺すぞ」

「はひいえ！　なんだ美女じゃない、って貴族様！？」

やっと少年はしりもちをついた状態で起きる。最初は寝ぼけていたけれど、すぐにジャンが貴族だって気づいたみたい。本当によかった。ジャンによる少年の流血シーンやら拷問シーンは見たくないから。目を逸らせないって本当に嫌。目を瞑ることも、瞬きさえできないうちで苦しい。だとしたら、普通にジャンと喋っている少年は意外と大物なのかもしれないわ。

「お前に聞きたいことがある。毒を盛らなかったか？」

「毒？　ま、まさか！　そんなの触ったことも食べたことも見たこともないよ。ヴァリエール家の娘になんか、毒入りの飴とかあげるわけないじゃないか」

「そうか、毒を盛ったのか」

訂正します。これは大物ではなくて大馬鹿みたい。だから、空気を読めないから殺伐としているのもわからない。我ながらすばらしい解答。

けど、今ヴァリエール家の娘って言わなかったかしら？　あの家って娘さんが三人いるけれど、エレオノール嬢は長女よね？　もしかしたら毒入りの飴、食べているんじゃないかしら？　それならば

どうしましょう。あの子、死ぬ気はしないけれど、苦しむのは見たくない。世の中なんて目を逸らしたいことばかりよ。

「だけどよ！ 僕が毒を盛って渡したけどさ、飴に毒を塗ってと頼んだのは別の人だよ？ 僕は実行したただけなんだ！」

「じゃあ、誰が頼んだんだ？」

「ターバンを巻いた怪しいおっさん。商人だって言ってる、そうそう太ってるんだ。脂汗ばっかりかいてる」

少年は必死に情報を叫ぶ。さすがに殺されるかもしれないことを察知したみたいで、なんとか生き延びようと、さっさと情報を吐いている。本当はここで殺したりしないことはわかってるんだけど、私は見守ることしかできない。口出しなんてできるわけないのよ。

ジャンはまた考えるように首をかしげる。もしかしたら思い当たる商人がいるのかもしれない。背後からだと言情もよめないし、もっと考えていることがわからなくなる。

「その毒はどんな毒か？」

「ブドウみたいな実の毒。ちょっとまぜただけだから死にはしない

って」

少年は怖がりながらも必死で弁明を続ける。一方ジャンっていった……。もう嫌だ。絶えられない。

「止めてください！ この少年は犯人じゃないんです。私は信じます」

怖かった、怖かったけど言った。言うしかなかった。見守ることしかできないとかいいわけできたかもしれないけど、見ていられなかった。痛々しすぎて。ジャンは一瞬ピクツと耳を動かしてから、静かに低く呟いた。

「そうか……。まあいい。今日だけは許してやろう。次にこんなことをしてかしたら、殺す」

「ひやあい！」

少年は最後に悲鳴のような返事をする、その体勢から這う様に動きジャンの横を通り過ぎると急いで立ち上がり、さっさと走っていつてしまった。よほど安心したのか、二三回躓いていたけれど。

謝るべき？ 駄目だ、駄目な気がする。このことは忘れよう。

それにしても、どうしてジャンは彼が毒を盛ったってわかったのかしら？ 私には何にもわからなかったんだけど。質問してみようかな？ だけど、答えてくれないかもしれない。むしろ、無知な女って思われて……。

とにかく、今は嫌な時間が終わったことに安心しましょう。私は、ジャンにまた近づいていき笑ってみた。自分の想像する最高の笑みで。ちよつと前に鏡を見て特訓したの。ばかげてるかもしれないけど、いつも最高の自分を見て欲しいから。

「ジャン……、いきましょうよ。今度こそ」

「すまない、予定を変更していいか？」

「ええ、商人を探すのでしょ？ 喜んでお手伝いします」

「そうか」

エレオノール嬢は私のお友達でもあるのだから、知ったからには捕まえなきゃね？ 本人はきっと彼等がいるし大丈夫だわ。

side
out

？、学園に戻るまでが遠足です 中（後書き）

一日遅れてすみません

誤字脱字その他諸々ありましたら報告よろしくお願いいたします

そして、下がかなり短くなりそうです

（これに比べたら）

？、学園に戻る時までが遠足です 下

「ま、まあいいことにしてやろう。それでだ、お前等はこれからどうする？ ミス・ヴァリエールは飴を既に食べてしまったみたいだが……」

リダさんの背後霊ことロリコー―ミスタ・ワルドはきつと俺の方をにらみつけてくる。もしかして、リダさんの服汚したことそんなに怒ってんのか？ ロリコンの癖に、彼女は美少女かよ。地味目だけど実は可愛いし、優しそうないい彼女。世の中って不条理だなあ。

それにしても、これからって言われてもなあ。エレオノール嬢のことはそんなに心配しなくてもいい気がするし、まあ誤解は解きたいけどな。ただ、そんなのは後でいいんだ。学園帰ってからいくらでも弁明できるし、むしろこの状況でもう一回顔つき合わせたらぜってえコンマ三秒で言い合いになるな。それくらいだったらさ、今くらいは別々に行動するのも悪くない。あ、でもこの両肩の荷物どうしよう。すぐく捨てていきたい。実際にやったらあの日の悲劇再び（笑）みたいなことになりかねないけどさ。

っで、これからか。

「そうだな、ここで暇しててもなんだし、エレオノール嬢に毒入りの飴をやったやつに釘刺しにでも行くかあ」

「それならもう私達がやった」

「はぁ？」

否、さっきお前等いなかっただろ。それなのになんで毒入りの飴をエレオノール嬢に誰かがあげたことや、ここで俺等に会う前に少年しめられんだよ？　なんか怪しい気がする。もしかして、さっき見てみぬふりでもしたのか？　……こいつならやりかねえな。優等生だけど腹のうちじゃあなに考えてんかわかんね。それはエレオノール嬢とかさ、周りの人全員にいえるっちゃいえるんだが、そのたくらみが悪い方向のような気がするんだよな。こいつ。

俺がこいつを気に入らないのは、まさかこいつが自分よりなんでも上だからってだけじゃねえ。そっちについても性格にはわかんねえけどさ、そういう嫉妬の類だけじゃない。このロリコンは敵になる気しかないんだ。

一時共闘できても、悪い奴じゃなくても、結果的には戦うようなそんな気がしてならね。その時俺が悪か正義かもわからねえし、もしかしたらそれはただの逆恨みかもしれない。どんな形であれ結果的に仲良くなれる気がしねえんだ。そんな奴と付き合いたいかつ。

「疑ってますね？　私が証明します。確かにジャンは少年がこの毒入りの飴をエレオノールさんに渡したことを知っていますわ。」

けれど、それは見捨てたわけじゃないの。ついさっきたまたま少年本人にあって、そのことを聞いちゃっただけなの。それで、今から少年が毒を入れた飴を渡すように誘導した商人を探そうと思って

いるのだけど、一緒にいかない？」

「おい、リダ」

「大丈夫。きつと足手まといにならないと思うのよ。むしろ、味方は多いほうが得だわ。ね？」

「あ、ああ……」

やっぱり、リダさんはロリコンには勿体ねえな。ロリコン、ほらリダさんの魅力わかってこねえか？　ね？　って笑った時のあの表情とか最高だろ。

たださ、なぜかしらねえけどリダさんとさくが妙にかぶるんだよね。雰囲気とかちょっとした動作とか、恥ずかしがりやだけど、たまに可愛かったりさ。でも、違うんだよね。かぶるけれど結局は全く違う。世界が違うからじゃなくて、もっと根本でさくには負けてんだよ。勝負してるわけでもないけど、俺にはなんかわかる。

そんなこんなでロリコンはリダさんに説得され、俺等も承諾して、四人で商人を探すことになった。俺等つーのは、ラックも一緒だってことだ。あいつをこの辺に一人でほっぽり投げておいてもしょうがねえしさ。ただ、二三步歩くたびにリダさん口説こうとするから、ロリコンににらまれまくりだけだな。

それにしても、その商人の特徴が笑っちゃまうほどにうさんくさい。

ターバンを巻いた怪しいおっさんで、自称商人。太っていて脂汗ばっかりかいてる。肌の色がせめてわかればもっと探しやすいかったんだが。否、二人曰く少年自身に聞いてこれしか言わなかったんだ。ってことは、肌の色はこの辺では目立たない白っぽい色で、顔自体もそこまで珍しくない悪人面って事か。

「てか、分かれたほうが良くねえか？ 効率考えて」

「それもそうだな、ペアにでもなるか」

「たまにはレントもやんなあ。リダちゃん、俺と一緒にグループになろう」

「結構です。どうやってわかりますか？」

わあ、リダさん軽くスルーしちゃった。取り付く島もなさそうだな。そういうところもある意味魅力的かもしれねえ。くっ、ロリコンの癖に（ry。

で、確かにどう分かれようか。さっきのままで俺はいいんだけどさ、ラックがうるさいよな。絶対。そんな風に分かれた日には、「お前きいきかせろよ」なんていって、承認探しに専念できねえし。グッパで決めるか？ でも俺、ロリコンと組みたくねえな。平和かもしれないけど、生理的に無理だ。もしかしたらリダさんと一緒になれる確率もあるけど、3分の1だったらわざわざ運にかけたりしたくない。

そんな時に、つんつんと人差し指で俺の左腕がつかれる。左って事はラック、俺は振り返らないで、「なんだ？」と小さな声で返す。お前が言うことは予想済みなんだな。いちいち振り返るか、ラックなんかのために。

「俺とりダで組めたら、後でなんかおごる」

マジか！ 3分の1の確率だけど、これならかける。俺がロリコンと一緒にいたいとか進んで言いたくないし、神頼みつーのも悪くない。

「グッパーにしようぜ」

「グッパーてなんだ？」

ラックがすぐに返してきた。あ、そっか。こっちの人はじゃんけんも知らないんだっけ。残りの二人も不思議そうにしている。

「グッパーってのは、グループ分けの時に使う方法だ。こうやって握りこぶしを作るのをグーって言って、手を全部開いているのがパーって言う。それで、‘グッとパーで分かれましょ！’っていう掛け声にあわせて、どっちかをだすんだ。で、四人の場合はグーが二人、パーが二人になるまでやって、その二人でペアを組む。どうだ、簡単だろ？」

「面白いですね。さっさとやってしましましょう。それにしても、どうしてさっきからペア前提なんでしょうかね？」

「連絡がつきにくくなる。それだけだ」

「なるほど。さすがジャンですね」

おい、リダさんがそんなに嬉しそうなのにそっけない態度止めろよ。見ててリダさんが可哀想で悲しくなってくる。

まあ、説明があんまりうまいといえない俺だったけど、二人にちゃんと伝わってよかった。ラックが俺に向かって下手なウイנקをしてきた。感謝の気持ちをこめてか？ 後でその感謝は物で頂戴するからいいっていうのに。



リダ side

さてと、これ以上路地裏にいても意味がありません。さっさと街中へ出てしましましょう。ジャンも町の方へ方向変換したところですよ。今度こそ手をつなげれば良いのですけど。

それにしても、商人をあんな少ない情報で探すというのは大分手間がかかりますわ。もう少し問い詰めておくべきだったのかしら？ けれど、あの状況で動けなかった私が言うことでもないわよね。

今更後悔しても、時を戻せる魔法も無いしね。とりあえず、今を楽しみましょう。まずはジャンと手をつなぐところから。

「いいですか？　またですけど……」

「手くらいかまわない。デートなのだろう？」

本当に付き合っているわけでもないのに、やっぱりジャンは優しいわ。こういうときに気さくに笑ってくれて。表しか見えなくていいって思ってしまうくらいに。いい人には裏があるって言うけれど、私はジャンになればだまされていい。その気持ちが犯罪の元かしらね？　ここは命がけでとめてみせるくらい考えとくべきだったかしら？　妄想は自由。何を考えてもいいのだから、そもそも裏を無いことにしてしましましょう。永遠に平和な時が流れることを願って。

「私の顔に何かついているのか？　じっと見ているみたいだが」

「あ、すみません。綺麗だなんて」

気がつかないうちにジャンの顔をじーって見つめてた。もしかして、顔が好きなのであって性格とか関係ないか思ってるのかな？　だとしたらすごく駄目な女よね。外面しか見れないなんて。

「綺麗か」

ジャンはちよつと困つたように目を逸らす。男性に綺麗はまずいのかしら？ さっさと訂正した方がいいわよね。

「違いますわ。うーんと、かつこいいなあつて思いました」

「そうか」

話が続かないわ。緊張しちゃつてうまいこと話せないし。さっきまではもつと自然に、普通に話せていたのにどうしてかしら？ 変に意識してしまっているからかな。だけど、意識しない方が無理だと思う。好きな人と二人でいるのに意識しないで普通に話せるって言うのは、もはやそれは恋じゃなくて友情よね。

そういう意味ならば自然なのかもしれないけれど、やっぱり悲しいし気まずい。こうやってやつと二人並んでいられるのに、なんかもったいない。損得とかじゃないのにな。

それなのに、結局私も顔を前に向けてしまった。右手だけはつながつているのに、他人みたいにお互いに前向いてしまつて、デートになんかなくてないような気がしてしまう。他人から見れば実に不思議な光景でしょう。さらに私達が付き合つてないって知つていたら、もつと気味が悪いでしょうね。人目なんて関係ないのに、つい気にしてしまう。

「つまらないか？　口数が少なくて」

「全然です！　もともと私のわがままなんですから」

恥ずかしがってばかりの私はまた俯く。右手だけが妙に温かくて逆に気がめいってしまいそう。

だけど、考えてみればものすごくわがままなのよね。無理やりだったのよ。すべて無理やりなのに寂しいとか悲しいとか気まずいか、当たり前じゃないの。私ったらジャンだってむしろ困っているのに勝手なことばかり考えて。最後はいつもみたいに俯いて逃げて。

学園でも確かに何度か話しかけたわ。ちょっとしたような時に席を隣にしてみたり、物を拾ってあげたり。なのに、名前。全然覚えてもらってなかった。見た目さえも彼の中には入っていなかった。私なんて取り巻きの一人としか思ってくれていなかったの。どうして？　簡単よ。私の努力が足りなかっただけ。家の名前とかは関係ない。もっと強くアピールすればよかっただけの話。それなのに私ったらいつもいつも恥ずかしがってばかりで、周りの女子の目ばかり気にしていて。

俯くのはやめよう。少しずつでいいから関わろう。気まずいとか考える前に私から話せばいい。馬鹿みたいでもいいの。無視されてもいいの。

「さっき、どうして毒のことわかったんですか？」

「それはだな、匂いだ」

「匂い？」

ジャンは殆ど考えることなく答える。話しかけてみたらちゃんと答えてくれたじゃない。もっと頑張れ、自分。

「匂いって少年からしたぶどうみたいな匂いのことですよ？ それでどうしてわかったんですか？」

「あの少年は金が無い。見た目ですぐわかるだろう。それなのに、平民ではまず手に入られないようなぶどうの匂いをする分けなのだ」

「でも、市でたまたま触ったとか」

「そういう場合もあっていいと思うが、私が店主ならあんな少年に自分の店の商品を触らせたくない」

こういうことならジャンは饒舌になってくれるみたい。共通のねたができて少し嬉しい。それに、私が言う疑問にもきちんと答えてくれる。ただ、なによりジャンがこっちを向いて話してくれることが嬉しかった。

「そうですね。だけど、ぶどうの匂いと毒がどうしてつながるんですか？」

「それはだな、実はぶどうそっくりの植物が雑草で生えているからだ」

「はい？」

ジャンは私の答えに得意げそうに頷く。学園では絶対に見られない表情。それを私だけが見てる。段々と心が晴れて行くわ。

「ぶどうにみためから何までよく似た毒があるんだ。もしかしたらと思って鎌をかけたんだ」

「嗚呼、そうい……」

その時、左手の方から何か赤いものがとんできた。それは食卓でたまにみるワインのような色をしていて、白い棒がついている。そして、その飴は私のワンピースのスカートにペタッと張り付く。キャンディかしら。そのキャンディをスカートからはずそうと手を伸ばす。

「ちよつとまで。それがさっきあの少年が言っていた毒入りキャンディだ」

「え？」

何か予想外のことが起こり始めてる。

side out

◇

グッパをした結果、俺とリダさん、ロリコンとラックというペアになった。なんか、ラックが結果変えろよとかうるさかったが、気にしない。俺としてはロリコンと一緒にいなかったから、大分ましなんだ。いまさら結果かえるか！

そんなわけで何故か俺とリダさんは横に並んで歩いていたりする。見る人が見ればデートっぽいかもしれない。手なんて勿論つないでないが。

街中は相変わらず妙に人が多くにぎやかで、噂の商人なんて見つからない。似たような人はいるんだが、ターバンのせいで違うとすぐわかつちまうんだ。つまらないからリダさんと話そうとしても、彼女は心ここにあらずって感じで話も盛り上がらない。飽きたなあ。

つとそんな時、視界の端に眺めの金髪と黒っぽい肌の赤髪が映った。気のせいだと思ったが、やっぱりエレオノール嬢とラズ嬢だった。ちらちらと見て伺うと飴屋にいるらしい。店頭には現色のような飴から複雑な形をしたものまで色々と置いてある。今謝って商人

探しを手伝ってもらおうか、と考えたものの、リダさんも射る手前勝手な行動もできないし、結局むこうまでいきはしなかった。たださ、偶然なのか目があったんだよ。エレオノール嬢と。ほんの一瞬だけどさ。で、すぐにそっぽ向かれちゃった。怒ってたような気がするんだけど、あたりまえだよな。

「ミスタ・バルソビアナでしたっけ？」

「そうだけど、何か？」

あの事件依頼、俺は教師とかの前以外では素で話している。もともと性にあわなかった丁寧語だ。やめようと思えばすぐ止められた。

リダさんは困ったように溜め息をついてから、真剣な顔で聞いてきた。

「エレオノールさんと貴方の関係はなんですか？」

「関係って言われても」

その声にロリコンと一緒にいた時のようなおしとやかさはなかった。エレオノール嬢が怒っていたときみたいな迫力がある。

「あ、え、の。そんな気構えないでください。ちょっと相談がある

だけなんです」

「はあ」

わかりにくい子だ。さっきまでの変な迫力はなんだったのか。今はもう元の内気な少女に戻ってしまっている。

それにしても相談か。俺にねえ。変な感じがするな。

「た、例えばの話ですよ。もしも私に好きな人がいます。その人とあなた方みたいに本音で話しあうにはどうすればいいですか？ 共通の話題がないと話が続かなくて、その、気まずいんです！」

告白でもするような勢いを感じた。否、ある意味これも告白なんだけど。

「好きな人もいない俺にどうしてそれをきくか？」

「はい？ エレオノール嬢は」

「友達だけど」

そう簡単に答えると、リダさんはがーンとかそんな効果音が入りそうな顔になる。ある意味ものすごくかわいいんだけど、このまま

にしておくわけにもいかないし。一応答えておく。まあ、あくまでも俺なりにさ。

「本音でなんて、話し合う必要ないよ。つーか無理だ。話を続けさせる必要も無いよ。ただ、そこに二人でいることに意味があるんだから」

「いることに、ですか」

俺と若葉はさ、結局付き合えなかったけど惹かれあってたんだ。理由もないけど、確信してる。学校では愚かメールなんかでも殆ど話せずじまいだったけどさ、近くにいていうことが嬉しかった。妙に盛り上がっているよりも、ずっと楽しくってさ。

それに、リダさんの好きな人はロリコンだからな。本音なんて聴いた日には倒れちまう。

「うーん、なんかわかったような気がします。とりあえずありがとうございました」

リダさんはそう言うのと丁寧にお辞儀をした。立ち止まりはしなかったものの、最敬礼の45度だ。なんか悪いような気はしたものの、何もいえなくて、俺も首だけで軽く礼をした。

さてと、もう問題は解決したっぽいので商人探しに専念しよう。
リダさんともっと話したいといえど話したいんだが、本人が妙に真剣になってるからそんな空気じゃなかった。

とりあえず、飴屋を優先的に探した方がいいよな。飴の原型をも
って来たのはその商人だと思うから。飴屋かあ……そういえば、さ
つき二人が覗いていた店も飴屋だったよな？

「リダさん、ちょっと当てができた。付き合ってくれないか？」

「わかりました」

リダさんはおどけずかたい返事をする。一瞬リダさんが良い母親
になっている幻覚が見えたけど、それは気のせいだろうか？ なん
か気のせいの気がしない。

場所はというとちょっと戻ったところだったわけ？ 店頭には飴細工
が飾ってあるからすぐわかると思うんだが。片っ端から見るとかな
いかな？ もうちょっと特徴を覚えておくべきだった。

そんな感じで一つ一つの店を人影から覗いて行く。不思議な装飾
品を売っている店から野菜屋まで様々。商品の方だって安いだけじ
ゃない店が殆どで、セリのような大声がたまに聞こえる。街は街で
も商店街って感じだな。おもちゃやはみつかんねえーがさ。

っと、さっきの店が見つかった。妙に派手な感じがして転倒に飴細工をおいている店だ。人影から店主の姿を見つめる。リダさんも俺が止ると察したのか、ぴたっと止ってくれた。中々こつちを向かないから顔とかがわかんねえ。ターバン巻いてるっぽいけどそれ以上は見えないんだ。その時、さっきまで止っていたリダが店の方に颯爽と歩き出した。

「おい、おま、ちょまて」

そんなことを呟けば、彼女はくるっと振り向き両手を握り腕を引いた。ハッスルハッスルと言いたげな感じだ。っていうか、同じポーズだったただけだが。大丈夫って事か？ 大丈夫なんだな。

彼女はそのまま店の方に歩いていき、店主に話しかける。しばらくすると店主がチラってこつちを向く。ビンゴだ。

ここで、このまま待っていれば運命は変わったかもしれないのに。俺は感情に任せて走り出していた。

当たりだ、多分、当たり。そう俺は信じて店主と向かい合った時には殴ってた。これだけの情報で犯人が確定できるわけ無いのに。

「その人は違う！」

その叫び声を聞いた時にはもう商人を殴り倒した後だった。

「違うのか？」

俺がそう聞くと、リダさんはこくりと首を微かに動かし頷いた。
その表情には何も浮かんでいなくて、怖いくらいだった。



俺があいつの顔を見ようと必死になっている時、リダさんはあの
商人と話をしていたらしい。

そして、商人が言うにはあの少年って言うのはさっき訪れた客らしいんだ。毎日のように飴を買いたげにしていたみたいで、飴細工を見るたびに口元を綻ばして走って行っていて、商人はそれを不憫に思ってた。そこで、少年に飴を一つ上げたんだ。それが今日の話。なんで今日だったかという、もうすぐ店じまいをする気持ちだったらしい。最近手が上手く動かなくて失敗することも増え、客も減ってきていた。だからさ、最後に少年に飴をあげたいと思ったとか。

つまりさ、少年が言ったことは完全なウソだったんだよ。俺等はその嘘に踊らされただけだった。考えてみればどうしてあんな話を信じてしまったんだか。飴を盛っていることに理由をつけるためか？

そこで最初に戻る。

俺はさ貴族の子どもつーのが嫌いなんだ。関わりたくないとかそういうのも含めて。面倒くさいことに巻き込まれそうだから。今回の話だってさ、エレオノール嬢がヴァリエール家の長女じゃなかったら巻き込まれなかったんだ。家にたてつくことはできないけれど、その娘や息子は人質にできる。そんなことは大きい家になるほど増えて、俺みたいな奴は無論対象外。で、本人はさそれがある程度知っているのに注意しようとしな。今日だって、今日だって、今日だって。

だから嫌いだ。嫌なんだ。見てて馬鹿みたいでたまらなくて。

《あなたはさ、自分のことをせめるべきなのよ》

久しぶりに頭に響くような声がした。学園にいる間は話しかけないように言っていたから当たり前だ。こいつが誰かって、それは俺の相棒だよ。杖ってやつだ。

《逃げないで頂戴。あなたはさ無意味に平民を殴ったことが嫌で嫌で仕方がないんでしょ。それで逃げようとしているんでしょ?》

嗚呼、今日はいつになく杖がうるさい。なんでこんなにうるさいんだか。声自体は美人な感じがするのに。

《あなたが嫌いなのは貴族の子どもじゃないわ。自分なのよ。エレオノール嬢のことを貶めているけど、そんなの言い訳。あなたはほしいんでしょ? 自分が平民を殴った理由を》

いちいち癪に障る。まるで全てを知っているような態度とかが特にだ。もしも杖じゃなかったら今すぐ折ってるよ。

《あなたはきつというたんでしょうね。ここしばらく変な日々が続いていて、平和なのか不幸なのかわからない日々が。人に関わることに疲れていた、そんな風にもいえるのかもしれないわ》

うるさい。うるさい。

《結局殴ったのなんて、ただの八つ当たりね。そして、今あなたはいらついて人を殴ってしまったことを後悔している。あなたも貴族になりきれば、痛くも悲しくもないこ……》

「知ってるから、もう黙ってくれよ」

おれは小さく、誰にも聞こえないくらいの声で呟いた。

？、学園に戻る時までが遠足です 下（後書き）

はい、中途半端な新キャラ登場なのです！
といっても、杖なのですが

誤字脱字その他もろもありましたら報告よろしくお願いします。

挿話 神様とある少年

(??? side)

それは私が彼に真っ直ぐな形であってみたい。学校とかそういうところに転入するとか、隣に引越すとか、偶然とかすれ違うだけじゃなくて、一個人として認識してもらいたい。それならば、理^{ことわり}を曲げてでもいいって。

誰かは言いました。運命は残酷だと。それは誰にだって平等に残酷で、神様だからといって私に逃れられるものではない。そう気づきました。

とある晴れた日の放課後。彼を好きだった少女、若葉は彼を殺してしまいました。

若葉は普通でとてもかわいらしい少女だと私は思ってた。彼女の過去だって、趣味だって知っていたけれど、それと彼女の性格は別だと神様でさえ思ってた。正しく言えば、そう思い込んでたってことかな？

私、本当はすべての人の思いがわかる。すべての人の悲しみも喜びも苦しみも驚きも、物語を正すのに必要ならば勿論わかる。けれど、私はあえてその能力を封印していた。だってね、私だってたまには普通の少女として世の中を見てみたかったから。それがあだとなった。私は少しさぼってたの。神様の仕事を。

あの殺人事件は私が物事を正していれば起こることじゃなかった。そう、そもそもさくが向こう側に行ってしまう事だって私が止める予定だった。もっと前までたどれば彼の存在でさえ形が間違ってたの。本当は、サイトと友達になる予定も、産まれる世界も違ったの。私をもっとしっかりしていれば、前代の人がしっかりと仕事を行っていたのなら。

後悔してもしょうがない。だから、せめて巻き込まれてしまった二人に、もう一度やり直してもらおう。人生って物を。

(side out)



(シアリor漂祈 side)

「久しぶりだな」

「久しぶりも何もねえーよ」

俺は適当に目の前にいる少年の言葉をあしらう。こいつは見た目こそかわいらしいが、中身は二三百歳のえらい神様（自称）だ。

どうやら運命を扱うらしくって、「運命の遊び人とよべ」なんてよく叫んでんが、かなり適当な正確な気がする。

だってよ、この前だって上のほうから言われたってだけで理由も聞かずに仕事やってたし（あたりめーか）、今だって本を読みながらだ。まあ、力は本当なんだけどな。ミスは多いけど。だって、ここに来るのは二度目だからな。

シアリとして五年くらい前に俺は転生した。その時に三つの能力をあげるとか何とか言われたんだが、あの時一つしか決めなかった。それで、残り二つはもう一度適当な時に呼び出して決めさせることにしたらしい。

で、これが二回目っぽいんだが……。

「何でもいいのか？」

「ああ。俺を馬鹿にすんなよ」

そのシヨタ顔で言われても妙に残念な感じだが、其処はスルーしよう。それにしても、後二つか。正直なんも……よし。これでいいか。

「さくと同じ世界にいきたい」

「無理だ。あいつの管轄はブリミルだ」

「は？」

「よーするに、俺には無理ってことだ。残念だな」

シヨタ神はけらけらと嫌味な顔で笑う。子どもに馬鹿にされているようで癪に障るが、落ち着け俺。あいては神だ。なに言っても無駄だ、きつと。

しょうがねーし別の考えよ。なんか漫画からでも引用しようかな？
けど俺ああいうのあんまり読まなかったしな。

「うーん、例えば自分の望んだ人に成り代われる能力とかいけるか？」

「成り代わるとは？」

「その人の見た目、及び性格や振る舞い、記憶をコピーできるってこと。もちろん今までのことを忘れるわけじゃないよ？」

「エグイな」

「だからなんだ」

シヨタ神はそれを聞くと本当に面白そうに笑う。自然にシヨタの体がふわりと浮いて、それで笑うもんだから角度低にも見下ろされているようで、まじでいらついてきた。我慢我慢。

「いいな。それでいい。お前のセンス悪くない！ あ、だが軽く縛りをつけよう。成り代わるにはその人の名前を三回呟かなくてはならず、まあ物語の中の人物でもゆるそう。それでどうだ？」

「それくらいなら譲ってやるよ。さて、後一つかあ」

もう一度空を見上げて深く考える。って、空なかったか。

何か、何か普通でも面白いものがあるか？ 例えば病気への耐性とか。否、あんな生き方してたんだ。耐性とかもうついている気がするな。そうだ、シアリだった俺が手に入れられなかったものになろう。手に入れられなかったもの、手に入れられなかったもの……。

「俺だけの友達が欲しい。絶対に裏切らない。俺しか知らないような友達が」

「ふっ、笑わせてくれるな。いいよ。やるよ」

シヨタ神は俺に向かって木の枝を投げってくる。いつも魔法の練習用に使っていた木の枝だ。

「お前の頭の中だけに聞こえるように話す杖に改良してやった。いつでも持ち歩きな」

俺はまだその神のニヤニヤ笑いの意味に気がついていなかった。

挿話 神様とある少年（後書き）

さてと、50話이었습니다ね

はい

否、だから何って感じなのですが、きりがいいのでちょっと話を整理します

＋ちよつと今忙しいので次の更新がいつになるかわかりません
早く復活できたらいいなって思いつながら

誤字脱字その他もろもろありましたら報告よろしくお願いいたします。
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2879p/>

誰も幸せになれない物語

2011年5月12日22時26分発行